

新釈諸国噺

太宰治

青空文庫

凡例

一、わたくしのさいかく、とても振仮名を附^つけたい気持で、新釈^{しよこく}諸国噺^{ばなし}という題にしたのであるが、これは西鶴^{さいかく}の現代訳というようなものでは決してない。古典の現代訳なんて、およそ、意味の無いものである。作家の為^なすべき業^{わざ}ではない。三年ほど前に、私は聊齋志異^{りようさいし}の中の一つの物語を骨子^{こっし}として、大いに私の勝手な空想を按配^{あんぱい}し、「清貧譚^{せいひんたん}」という短篇^{たんぺん}小説に仕上げた、この「新潮」の新年号に載せさせてもらつた事があるけれども、だいたいあのような流儀で、いささか読者に珍味異香を進上

しようと努めてみるつもりなのである。西鶴は、世界で一ばん偉い作家である。メリメ、モオパッサンの諸秀才も遠く及ばぬ。私のこのような仕事に依^よつて、西鶴のその偉さが、さらに深く皆に信用されるようになったら、私のまずしい仕事も無意義ではないと思われる。私は西鶴の全著作の中から、私の氣にいりの小品を二十篇ほど選んで、それにまつわる私の空想を自由に書き綴^{つづ}り、「新釈諸国噺」という題で一本にまとめて上^{じょう}梓しようと計画しているのだが、まず手はじめに、武家義理物語の中の「我が物ゆゑに裸川」の題材を拝借して、私の小説を書き綴^{つづ}てみたい。原文は、四百字詰の原稿用紙で二、三枚くらいの小品であるが、私を書くとその十倍の二、三十枚になるのである。私はこの武家義

理、それから、永代蔵えいたいぐら、諸国噺、胸算用むねさんようなどが好きである。
 所謂いわゆる、好色物は、好きでない。そんなにいいものだとも思えない。
 着想が陳腐ちんぷだとさえ思われる。

一、右の文章は、ことしの「新潮」正月号に「裸川」を發表した時、はしがきとして用いたものである。その後、私は少しずつこの仕事をすすめて、はじめは二十篇くらいの予定であつたが、十篇書いたら、へたばつた。読みかえしてみると、実に不満で、顔から火の発する思いであるが、でも、この辺が私の現在の能力の限度かも知れぬ。短篇十二は、長篇一つよりも、はるかに骨が折れる。

一、目次をござらんになれば、だいたいわかるようにして置いたが、題材を西鶴の全著作からかなりひろく求めた。変化の多い方が更に面白おもしろいだろうと思ったからである。物語の舞台も蝦夷えぞ、奥おうし州ゆう、関東、関西、中国、四国、九州と諸地方にわたるよう工夫した。

一、けれども私は所詮しよせん、東北生れの作家である。西鶴ではなくて、東鶴ほつき北ほ亀きのおもむきのあるのは、まぬかれない。しかもこの東鶴あるいは北ほ亀きは、西鶴にくらべて甚はなはだ青臭い。年齢というものは、どうにも仕様の無いものらしい。

一、この仕事も、書きはじめてからもう、ほとんど一箇年になる。その期間、日本に於^おいては、実にいろいろな事があつた。私の一身上に於いても、いついかなる事が起るか予測出来ない。この際、読者に日本の作家精神の伝統とでもいうべきものを、はつきり知っていたく事は、かなり重要な事のように思われて、私はこれを警戒警戒の日にも書きつづけた。出来栄はもとより大いに不満であるが、この仕事を、昭和聖代の日本の作家に与えられた義務と信じ、むきになって書いた、とは言える。

昭和十九年晩秋、三鷹^{みたか}の草屋に於て

目次

貧の意地	(江戸)	諸国はなし、西鶴四十四歳刊行
大力	(讃岐)	ほんちようにじゅうふこう 本朝二十不孝、四十五歳
猿塚	(筑前)	ふところすずり 懷硯、四十六歳
人魚の海	(蝦夷)	武道伝来記、四十六歳
破産	(美作)	につぼんえいたいぐら 日本永代蔵、四十七歳
裸川	(相模)	武家義理物語、四十七歳
義理	(摂津)	武家義理物語、四十七歳
女賊	(陸前)	しんかしょうき 新可笑記、四十七歳

赤い太鼓

(京)

本朝桜陰比事、おういんひじ 四十八歳

粹人

(浪花)なにわ

世間胸算用、せけんむねさんよう 五十一歳

遊興戒

(江戸)

西鶴置土産、せきかくろ 五十二歳(歿)ぼつ

吉野山

(大和)やまと

万の文反古、よろず ふみほうぐ 歿後三年刊行

貧の意地

むかし江戸品川、藤茶屋ふじちややのあたり、見るかげも無き草いおりの庵に、
原田内助というおそろしく鬚ひげの濃い、眼めの血走った中年の大男が
住んでいた。容貌ようぼうおそろしげなる人は、その自身の顔の威厳に
みずから恐縮して、かえって、へんに弱気になっているものであ
るが、この原田内助も、眉まゆは太く眼はぎよろりとして、ただもの
でないような立派な顔をしていながら、いっこうに駄目だめな男で、
剣術の折には眼を固くつぶって奇妙な声を挙げながらあらぬ方
向って突進し、壁につきあたって、まいった、と言ひ、いたずら

に壁破りの異名を高め、蜆しじみ売りのずるい少年から、嘘うその身み上うえばな
 嘶しを聞いて、おいおい声を放つて泣き、蜆を全部買ひしめて、
 家へ持つて帰つて女にようぼう房しかに叱しかられ、三日のあいだ朝昼晩、蜆ば
 かり食べさせられて胃瘕いけいれん癰いんを起して転てん輾てんし、論語をひらいて、
 学がく而じ第一、と読むと必ず睡魔に襲おそわれるところとなり、毛虫がき
 らいで、それを見ると、きやつと悲鳴を挙げて両手の指をひらい
 てのけぞり、人のおだてに乗つて、狐きつねにでも憑つかれたみたいにお
 ろおろして質屋へ走つて行つて金を作つてごちそうし、みそかに
 は朝から酒を飲んで切腹の真似まねなどして掛取かけとりをしりぞけ、草の
 庵も風流の心からではなく、ただおのずから、そのように落ちぶ
 れたというだけの事で、花も実も無い愚図の貧、親戚しんせきの持てあ

まし者の浪人であつた。さいわい、親戚に富裕の者が二、三あつたので、せつぱつまるとそのひとたちから合力ごうりきを得て、その大半は酒にして、春の桜も秋の紅葉も何が何やら、見えぬ聞えぬ無我夢中の極貧の火の車のその日暮しを続けていた。春の桜や秋の紅葉には面をそむけて生きても行かれるだろうが、年にいちどの大みそかを知らぬ振りして過す事だけはむずかしい。いよいよことしも大みそかが近づくにつれて原田内助、眠つきをかえて、氣違いの真似などして、用も無い長刀をいじくり、えへへ、と怪しく笑つて掛取りを氣味悪がせ、あさつては正月というに天井の煤すすも払わず、鬚もそらず、煎餅蒲団せんべいぶとんは敷きつ放し、来るなら来い、などあわれな言葉を譚語うわごとの如く力無く呟つぶやき、またしても、えへ

へ、と笑うのである。まいどの事ながら、女房はうつつの地獄の
 思いに堪^たえかね、勝手口から走り出て、自身の兄の半井清庵^{なからいせいあん}
 という神田明神^{かんだみょうじん}の横町に住む医師の宅に駈^かけ込み、涙ながら
 に窮状を訴え、助力を乞^こうた。清庵も、たびたびの迷惑、つくづ
 く呆^{あき}れながらも、こいつ洒落^{しゃれ}た男で、「親戚にひとりくらい、そ
 のような馬鹿^{ばか}がいるのも、浮世の味。」と笑つて言つて、小判十
 枚を紙に包み、その上書^{うわがき}に「貧病の妙薬、金用丸^{きんようがん}、よろずに
 よし。」と記して、不幸の妹に手渡した。

女房からその貧病の妙薬を示されて、原田内助、よろこぶかと
 思いのほか、むずかしき顔をして、「この金は使われぬぞ。」と
 かすれた声で、へんな事を言い出した。女房は、こりや亭主^{ていしゅ}も

いよいよ本当に気が狂ったかと、ぎよつとした。狂ったのではない。駄目な男というものは、幸福を受取るに当つてさえ、下手くそを極めるものである。突然の幸福のお見舞いにへどもどして、てれてしまつて、かえつて奇妙な屁理窟へりくつを並べて怒つたりして、折角の幸福を追い払つたり何かするものである。

「このまま使つては、果報負けがして、わしは死ぬかも知れない。」と、内助は、もつともらしい顔で言い、「お前は、わしを殺すつもりか？」と、血走つた眼で女房を睨にらみ、それから、にやりと笑つて、「まさか、そのような夜叉やしやでもあるまい。飲もう。飲まなければ死ぬであろう。おお、雪が降つて来た。久し振りで風流の友と語りたい。お前はこれから一走りして、近所の友人たち

を呼んで来るがいい。山崎、熊井くまい、宇津木、大竹、磯いそ、月村、この六人を呼んで来い。いや、短慶坊主ぼうずも加えて、七人。大急ぎで呼んで来い。帰りは酒屋に寄つて、さかなは、まあ、有合せでよかろう。「なんの事は無い。うれしきで、わくわくして、酒を飲みたくなつただけの事なのであつた。

山崎、熊井、宇津木、大竹、磯、月村、短慶、いずれも、このあたりの長屋に住んでその日暮しの貧病に悩む浪人である。原田から雪見酒の使いを受けて、今宵こよいだけでも大みそかの火宅かたくからのがれる事が出来ると地獄で仏の思い、紙衣かみこの皺しわをのばして、傘かさは無いが、足袋は無いが、押入れに首をつつ込んで、がらくたを引出し、浴衣ゆかたに陣羽織ひとえという姿の者もあり、単衣を五枚重ねて着て

頸くびに古綿を巻きつけた風邪気味と称する者もあり、女房の小袖こそでを裏返しに着て袖の形をごまかそうと腕まくりの姿の者もあり、半はん衽んじゅばんにうまのりばかま馬乗袴、それに縫紋の夏羽織という姿もあり、裾すそから綿のはみ出たどてらを尻端折しりばしよりして毛臍丸出けずねしという姿もあり、ひとりとしてまともな服装の者は無かったが、流石さすがに武士の附つき合いは格別、原田の家に集つて、互いの服装に就いて笑つたりなんかする者は無く、いかめしく挨拶あいさつを交し、座が定つてから、浴衣に陣羽織の山崎老がやおら進み出て主人の原田に、今宵の客を代表して鷹揚おうように謝辞を述べ、原田も紙衣の破れた袖口を気にしながら、

「これは御一同、ようこそ。大みそかをよそにして雪見酒も一興

かと存じ、ごぶさたのお詫^わびも兼ね、今夕お招き致しましたところ、さつそくおいで下さつて、うれしく思います。どうか、ごゆるり。」と言つて、まずしいながら酒肴^{しゅこう}を供した。

客の中には盃^{さかずき}を手にして、わなわな震える者が出て来た。いかなされた、と聞かれて、その者は涙を拭^ふき、

「いや、おかまい下さるな。それがしは、貧のため、久しく酒に遠ざかり、お恥ずかしいが酒の飲み方を忘れ申した。」と言つて、淋^{さび}しそうに笑つた。

「御同様、」と半襦袢に馬乗袴は膝^{ひざ}をすすめ、「それがしも、ただいま、二、三杯つづけさまに飲み、まことに変な気持で、このさきどうすればよいのか、酒の酔い方を忘れてしまいました。」

みな似たような思いと見えて、一座しんみりして、遠慮しながら互いに小声で盃のやりとりをしていたが、そのうちに皆、酒の酔い方を思い出して来たと見えて、笑声も起り、次第に座敷が陽気になって来た頃、主人の原田はれいの小判十両の紙包を取出し、「きようは御一同に御披露ひろうしたい珍物がございます。あなたがたは、御懷中の御都合のわるい時には、いさぎよくお酒を遠ざけ、つつましくお暮しなさるから、大みそかでお困りにはなつても、この原田ほどはお苦しみなさるまいが、わしはどうも、金に困るとなおさら酒を飲みたいたちで、そのために不義理の借金が山積して年の瀬を迎えるたびに、さながら八大地獄を眼前に見るような心地が致す。ついには武士の意地も何も捨て、親戚に泣いて助

けを求めるなどという不面目の振舞いに及び、ことしもうとう、身寄りの者から、このとおり小判十両の合力を受け、どうやら人並の正月を迎える事が出来るようになりましたが、この仕合せをわしひとりで受けると果報負けがして死ぬかも知れませんが、きようは御一同をお招きして、大いに飲んでいただこうと思ひ立つた次第であります。」と上機嫌じようきげんで言えば、一座の者は思ひ思ひの溜息ためいきをつき、

「なあんだ、はじめからそうとわかつて居れば、遠慮なんかしなかったのに。あとで会費をとられるんじゃないか、と心配しながら飲んで損をした。」と言う者もあり、

「そう承れば、このお酒をうんと飲み、その仕合せにあやかりた

い。家へ帰ると、思わぬところから書留が来ているかも知れない。
「と言う者もあり、

「よい親戚のある人は仕合せだ。それがしの親戚などは、あべこべにそれがしの懷ふところをねらっているのだから、つまらない。」と言う者もあり、一座はいよいよ明るくにぎやかになり、原田は大恐悦で、鬚の端の酒しずくの雫ぬぐを押し拭い、

「しかし、しばらく振りで小判十両、てのひらに載せてみると、これでなかなか重いものでございます。いかがです、順々にこれを、てのひらに載せてやって下さいませんか。お金と思えばいやしいが、これは、お金ではございません。これ、この包紙にちやんと書いてあります。貧病の妙薬、金用丸、よろずによし、と書

いてございます。その親戚の奴が、しやれてこう書いて寄こしたのですが、さあ、どうぞ、お廻まわしになって御覧になって下さい。」と、小判十枚ならびに包紙を客に押しつけ、客はいちいちその小判の重さに驚き、また書附けの輕妙に感服して、順々に手渡し、一句浮びましたという者もあり、筆硯ひっけんを借りてその包紙の余白に、貧病の藥いただく雪あかり、と書きつけて興を添え、酒盃しゅはいの献酬もさかんになり、小判は一まわりして主人の膝許ひざもとにかえた頃すわに、年長者の山崎は坐り直し、

「や、おかげさまにてよい年忘れ、思わず長座を致しました。」と分別顔してお礼を言い、それでは、と古綿を頸に巻きつけた風邪気味が、胸を、そらして千秋楽をうたい出し、主客共に膝を輕

くたたいて手拍子をとリ、うたい終つて、立つ鳥あとを濁さず、昔も今も武士のたしなみ、かななべ燗鍋、重箱、しおからつぽ塩辛壺など、それぞれ自分の周囲の器を勝手口に持ち出して女房に手渡し、れいの小判が主人の膝もとに散らばつて在るのを、それも仕舞いなされ、と客にすすめられて、原田は無雑作に掻かき集めて、はつと顔色をかえた。一枚足りないのである。けれども原田は、酒こそ飲むが、気の弱い男である。おそろしい顔つきにも似ず、人の氣持ばかり、おっかなびつくり、いたわっている男だ。どきりとしたが、素知らぬ振りを装い、仕舞い込もうとすると、一座の長老の山崎は、「ちよつと、」と手を挙げて、「小判が一枚足りませんな。」と軽く言つた。

「ああ、いや、これは、」と原田は、わが悪事を見破られた者の如く、ひどくまごつき、「これは、それ、御一同のお見えになる前に、わしが酒屋へ一両支払い、さきほどわしが持ち出した時には九両、何も不審はございません。」と言ったが、山崎は首を振り、

「いやいや、そうでない。」と老いの頑固^{がんこ}、「それがしが、さきほど手のひらに載せたのは、たしかに十枚の小判。行燈^{あんどん}のひかり薄しといえども、この山崎の眼光には狂いはない。」ときっぱり言い放てば、他の六人の客も口々に、たしかに十枚あつた筈^{はず}と言う。皆々総立ちになり、行燈を持ち廻つて部屋の隅々^{すみずみ}まで捜したが、小判はどこにも落ちていない。

「この上は、それがし、まっぱだかになつて身の潔白を立て申す。
」と山崎は老いの一轍いつてつ、貧の意地、瘦やせても枯れても武士のはしくれ、あらぬ疑いをこうむるは末代までの恥辱とばかりに憤然、陣羽織を脱いで打ちふるい、さらによれよれの浴衣を脱いで、ふんどし一つになつて、投網とあみでも打つような形で大袈裟おおげさに浴衣をふるい、

「おのおのがた、見とどけたか。」と顔を蒼あおくして言った。他の客も、そのままではすまされなくなり、次に大竹が立つて縫紋の夏羽織をふるい、半襦絆を振つて、それから馬乗袴を脱いで、ふんどしをしていない事を暴露し、けれどもにこりともせず、袴をさかさにしてふるつて、部屋の雰囂ふんいき気が次第に殺氣立つて物凄ものすごい

くなつて来た。次にどてらを尻端折して毛臙丸出しの短慶坊が、立ち上りかけて、急に劇烈の腹痛にでも襲われたかのように嶮けわしく顔をしかめて、ううむと一声呻うめき、

「時も時、つまらぬ俳句を作り申した。貧病の薬いただく雪あかり。おのおのがた、それがしの懷に小判一両たしかにあります。

いまさら、着物を脱いで打ち振うまでもござらぬ。思いも寄らぬ

災難。言い開きも、めめしい。ここで命を。」と言ひも終らず、

両もろはだ肌脱いで脇差わきざししに手を掛ければ、主人はじめ皆々駈け寄つて、

その手を抑え、

「誰だれもそなたを疑つてはいない。そなたばかりでなく、自分らも

皆、その日暮しのあさましい貧者ながら、時に依よつて懷中に、一

両きんすくらいの金子は持つてゐる事もあるさ。貧者は貧者同志、死んで身の潔白を示そうというそなたの氣持はわかるが、しかし、誰ひとりそなたを疑う人も無いのに、切腹などは馬鹿らしいではないか。」と口々になだめると、短慶いよいよわが身の不運がうらめしく、なげきはつとり、齒はぎしりして、

「お言葉は有ありがた難いが、そのお情も冥途なまけめいどへの土産。一両詮議せんぎの大

事の時、生憎あいにくと一両ふところに持つてゐるといふこの間の悪さ。

御一同が疑わずとも、このぶざまは消えませぬ。世の物笑い、一期いちごの不覚。面目なくて生きて居られぬ。いかにも、この懐中の一

両は、それがし昨日、かねて所持せし徳とくじよう乗のこづか小柄を、坂下の

唐物屋十左衛門方へ一両二分にて売つて得た金子には相違な

けれども、いまさらかかる愚痴めいた申開きも武士の恥辱。何も申さぬ。死なせ給え。不運の友を、いささか不憫ふびんと思召おぼしめさば、わが自害の後に、坂下の唐物屋へ行き、その事たしかめ、かばねの恥を、たのむ！」と強く言い放ち、またも脇差し取直してあがいた途端、

「おや？」と主人の原田は叫び、「そこにあるよ。」

見ると、行燈の下にきらりと小判一枚。

「なんだ、そんなところにあつたのか。」

「燈台もと暗しですね。」

「うせ物は、とかく、へんてつもないところから出る。それに付けても、平常の心掛けが大切。」これは山崎。

「いや、まったく人騒がせの小判だ。おかげで酔いがさめました。飲み直しましょう。」とこれは主人の原田。

口々に言つて花やかに笑い崩れた時、勝手に、

「あれ！」と女房の驚く声。すぐに、ばたばたと女房、座敷に走つて来て、「小判はここに。」と言ひ、重箱の蓋を^{ふた}差し出した。

そこにも、きらりと小判一枚。これはと一同顔を見合せ、女房は上氣した顔のおくれ毛を掻きあげて間がわるそうに笑い、さいぜん私は重箱に山の芋の煮しめをつめて差し上げ、蓋は主人が無作法にも畳にべたりと置いたので、私が取つて重箱の下に敷きました。が、あの折、蓋の裏の湯氣に小判がくつついていたのでございましょう、それを知らずに私の不調法、そのままお下^{さげ}渡^{わた}しにな

つたのを、ただいま洗おうとしたら、まあどうでしょう、ちや
んと小判が、と息せき切つて語るのだが、主客ともに、けげんの
面持ちで、やつぱり、ただ顔を見合せているばかりである。これ
では、小判が十一両。

「いや、これも、あやかりもの。」と一座の長老の山崎は、しば
らく経つて溜息と共に、ちつとも要領の得ない意見を吐いた。

「めでたい。十両の小判が時に依つて十一両にならぬものでもな
い。よくある事だ。まずは、お収め。」すこしもうろく碌しているら
しい。

他の客も、山崎の意見の滅茶苦茶めっちゃなのに呆れながら、しかし、
いまのこの場合、原田にお収めを願うのは最も無難と思つたので、

「それがよい。ご親戚のお方は、はじめから十一両つつんで寄こしたのに違いない。」

「左様、なにせ洒落たお方のようだから、十両と見せかけ、その実は十一両といういたずらをなさったのでしよう。」

「なるほど、それも珍趣向。^{いき}粹な思いつきです。とにかく、お収めを。」

てんでにいい加減な事を言つて、無理矢理原田に押しつけようとしたが、この時、弱気で酒くらしいの、駄目な男の原田内助、おそらくは生^{しょうがい}涯に一度の異様な頑張り方を示した。

「そんな事でわしを言いくるめようたつて駄目です。馬鹿^{ばか}にしないで下さい。失礼ながら、みなさん一様に貧乏なのを、わしひと

り十両の仕合せにめぐまれて、天道てんとうさまにも御一同にも相すまなく、心苦しくて落ちつかず、酒でも飲まなけりや、やり切れなくなつて、今夕御一同を御招待して、わしの過分の仕合せの厄やくは払いをしようとしたのに、さらにまた降つてわいた奇妙な災難、十両でさえ持てあましている男に、意地悪く、もう一両押しつけるとは、御一同も人が悪すぎますぞ。原田内助、貧なりといえども武士のはしくれ、お金も何も欲しくござらぬ。この一両のみならず、こちらの十両も、みなさんお持ち帰り下さい。」と、まことに、へんな怒り方をした。気の弱い男というものは、少しでも自分の得とくになる事に於おいては、極度に恐縮し汗を流してまごつくものだが、自分の損になる場合は、人が変つたように偉そうな理

窟を並べ、いよいよ自分に損が来るように努力し、人の言は一切容れず、ただ、ひたすら屁理窟を並べてねばるものである。極度に凹むと、裏のほうがふくれて来る。つまり、あの自尊心の倒錯である。原田もここは必死、どもりどもり首を振って意見を開陳し矢鱈やたらにねばる。

「馬鹿にしないで下さいよ。十両の金が、十一両に化けるなんて、そんな人の悪い冗談はやめて下さいよ。どなたかが、さつきこつそり、お出しになったのでしょうか。それにきまっています。短慶どの難儀を見るに見かね、その急場を救おうとして、どなたか所持の一両を、そつとお出しになったのに違いない。つまりぬ小細工をしたものです。わしの小判は、重箱の蓋の裏についていた

のです。行燈の傍そばに落ちていた金は、どなたかの情の一両にきまつています。その一両を、このわしに押しつけるとは、まるですじみちが立っていません。そんなにわしが金を欲しがっていると
思召さるか。貧者には貧者の意地があります。くどく言うようだけれども、十両持っているのさえ、わしは心苦しく、世の中がいやになつていた折も折、さらに一両を押しつけられるとは、天道さまにも見放されたか、わしの武運もこれまで、腹かき切つてもこの恥は雪こそがなければならぬ。わしは酒飲みの馬鹿ですが、御一同にだまされて、金が子を産んだと、やにさがるほど耄碌はしていません。さあ、この一両、お出しになつた方は、あつさりと収めて下さい。」もともと、おそろしい顔の男であるから、坐り直

して本氣にものを言い出せば、なかなか凄^くい。一座の者は頸^{くび}をすくめて、何も言わない。

「さあ、申し出て下さい。そのお方は、情の深い立派なお方だ。わしは一生その人の従^{じゆう}僕^{ぼく}になつてもよい。一文の金でも惜しいこの大みそかに、よくぞ一両、そしらぬ振りして行燈の傍に落し、短慶どのの危急を救つて下された。貧者は貧者同志、短慶どののつらい立場を見かねて、ご自分の大切な一両を黙つて捨てたとは、天晴^{あっぱ}れの御人格。原田内助、敬服いたした。その御立派なお方が、この七人の中にたしかにいるのです。名乗つて下さい。堂々と名乗つて出て下さい。」

そんなにまで言われると、なおさら、その隠れた善行者は名乗

りにくくなるであろう。こんなところは、やっぱり原田内助、だめな男である。七人の客は、いたずらに溜息をつき、もじもじしているばかりで、いつこうに埒があかない。せつかくの酒の酔いも既に醒め、一座は白け切つて、原田ひとりは血走つた眼をむき、名乗り給え、名乗り給え、とあせつて、そのうちに鶏鳴あかつきを告げ、原田はどうとう、しびれを切らし、

「ながくおひきとめも、無礼と存じます。どうしても、お名乗りが無ければ、いたしかたがない。この一両は、この重箱の蓋に載せて、玄関の隅に置きます。おひとりずつ、お帰り下さい。そうして、この小判の主は、どうか黙つて取つてお持ち帰り願います。そのような処置は、いかがでしょう。」

七人の客は、ほつとしたように顔を挙げて、それがよい、と一様に賛意を表した。実際、愚図の原田にしては、大出来の思いつきである。弱気な男というものは、自分の得にならぬ事をするに当つては、時たま、このような水際^{みずぎわ}立つた名案を思いつくものである。

原田は少し得意。皆の見ている前で、重箱の蓋に、一両の小判をきちんと載せ、玄関に置いて来て、

「式台の右の端、最も暗いところへ置いて来ましたから、小判の主でないお方には、あるか無いか見定める事も出来ません。そのままお帰り下さい。小判の主だけ、手さぐりで受取つて何気なくお帰りなさるよう。それでは、どうぞ、山崎老から。ああ、いや、

ふすま

襖はぴったりしめて行つて下さい。そうして、山崎老が玄関を出て、その足音が全く聞えなくなつた時に、次のお方がお立ち下さい。」

七人の客は、言われたとおりに、静かに順々に辞し去つた。あとで女房は、手燭てしよくをともし、玄関に出て見ると、小判は無かつた。理由のわからぬ戦慄せんりつを感じて、

「どなたでしょうね。」と夫に聞いた。

原田は眠そうな顔をして、

「わからん。お酒はもう無いか。」と言つた。

落ちぶれても、武士はさすがに違ふものだ、女房は可憐かれんに緊張して勝手元へ行き、お酒の爛に取りかかる。

(諸国はなし、
卷一の三、
大晦日おほつごもりはあはぬ算用)

大力

むかし讃岐さぬきの国、高松に丸亀まるがめ屋とて両替屋を営み四国に名高い歴々の大長者、その一子に才兵衛さいべえとて生れ落ちた時から骨太く眼玉めだまはぎよりりとしてただならぬ風貌ふうぼうの男児があつたが、三歳にして手足の筋骨いやに節くれだち、無心に物差しを振り上げ飼か猫いねこの頭をこつんと打つたら、猫は声も立てずに絶命し、乳母は驚き猫の死骸しかいを取上げて見たら、その頭の骨が微塵みじんに打ち砕かれているので、ぞつとして、おひまを乞こい、六歳の時にはもう近所の子供たちの餓鬼大将で、裏の草原につながれてある子牛を抱き

すくめて頭の上に載せその辺を歩きまわって見せて、遊び仲間を戦慄せんりつさせ、それから毎日のように、その子牛をおもちやにして遊んで、次第に牛は大きくなっても、はじめからかつぎ慣れているものだから何の仔細しさいもなく四肢ししをつかまえて眼より高く差し上げ、いよいよ牛は大きくなり、才兵衛九つになった頃ころには、その牛も、ゆつたりと車を引くほどの大黒牛になったが、それでも才兵衛はおそれず抱きかかえて、ひとりで大笑いすれば、遊び友達はいまは全く薄気味わるくなり、誰だれも才兵衛と遊ぶ者がなくなつて、才兵衛はひとり裏山に登つて杉の大木を引抜き、牛よりも大きい岩を崖がけの上から蹴落けおとして、つまらなそうにして遊んでいた。十五、六の時にはもう頬ほおに髯ひげも生えて三十くらいに見え、へんに

重々しく分別ありげな面構えつらがまをして、すこしも可愛かわいいところがなく、その頃、讃岐に角力すもうがはやり、大関には天竺仁太夫てんじくにだゆうつづいて鬼石、黒駒くろこま、大浪おおなみ、いかずち、白滝、青鯨あおぎめなど、いずれも一癖ありげな名前をつけて、里の牛飼、山家やまがの柴男しばおとこ、または上方かみがたから落ちて来た本職の角力取りなど、四十八手しじゅうはつてに皮をすりむき骨を砕き、無用の大怪我おおけがばかりして、またこの道にも特別の興ありと見えて、やめられずどんす榎子のまわしなどして時々ゆるんでまわしがずり落ちてにもにこりとも笑わず、上手うわてがどうしたの下手したてがどうしたの足癖あしぐせがどうしたのと、何の事やらこの世の大事ごとの如く騒いで汗も拭ふかず矢鱈やたらにもみ合つて、稼業かぎようも忘れ、家へ帰ると、人一倍大めしをくらつて死んだようにぐたりと寝てし

まう。かねて力自慢の才兵衛、どうして之これを傍觀し得べき。楸子のまわしを締め込んで、土俵に躍り上つて、さあ来い、と両手をひろげて立ちはだかれれば、皆々、才兵衛の幼少の頃からの馬鹿ばかぢか力らを知っているので、にわかに興覚めて、そそくさと着物を着て帰り仕度をする者もあり、若旦那わかだんな、およしなさい、へへ、ご身分にかかりますよ、とお世辞だか忠告だか非難だか、わけのわからぬ事を人の陰に顔をかくして小声で言う者もあり、その中に、上方からくだって来た鰐わにぐち口という本職の角力、上方では弱くて出世もできなかったが田舎へ来ればやはり永年たたき込んだ四十八手がものを言い、在郷ざいこうの若い衆の糞くそぢから力を軽くあしらっている男、では一番、と平気で土俵にあがって、おのれと血相変

えて飛び込んで来る才兵衛の足を払って、苦もなく捻^ねじ伏せた。
 才兵衛は土俵のまんなかに死んだ蛙^{かえる}のように見つともなく這^はいつ
 くばって夢のような氣持、実に不思議な術もあるものだと言を振
 り、間拔けた顔で起き上って、どつと笑い囃^{はや}す觀衆をちよつと睨^{にら}
 んで黙らせ、腹が痛い、とてれ隠しのつまらぬ嘘^{うそ}をついて家へ歸
 って来たが、くやしくてたまらぬ。鶏を一羽ひねりつぶして煮て
 骨ごとばりばり食って力をつけて、その夜のうちに鰐口の家へた
 ずねて行き、さきほどは腹が痛かったので思わぬ不覺をとつたが、
 今度は負けぬ、庭先で一番やつて見よう、と申し出た。鰐口は晩^ば
 酌^{んしゃく}の最中で、うるさいと思つたが、いやにしつこく挑^{いど}んで来
 るので着物を脱いで庭先に飛び降り、突きかかつて来る才兵衛の

巨軀きよくを右に泳がせ左に泳がせ、自由自在にあやつれば、才兵衛次第に目まいがして来て庭の松の木を鰐口わがくちと思い込み、よいしよと抱きつき、いきせき切つて、この野郎と叫んで、苦も無く引き抜いた。

「おい、おい、無茶をするな。」鰐口もさすがに才兵衛の怪力に呆あきれて、こんなものを永く相手にしていると、どんな事になるかもわからぬと思い、縁側にあがつてさつさと着物を着込んで、

「小僧、酒でも飲んで行け。」と懷柔の策に出た。

才兵衛は松の木を引き抜いて目よりも高く差し上げ、ふと座敷の方を見ると、鰐口が座敷で笑いながらお酒を飲んでいたので、ぎよつとして、これは鬼神に違いないと幼く思い込み、松の木も

何も投げ捨て庭先に平伏し、わあと大声を挙げて泣いて弟子にしてくれよと懇願した。

才兵衛は鰐口を神様の如くあがめて、その翌日から四十八手の伝授にあずかり、もともと無双の大力ゆえ、その進歩は目ざましく、教える鰐口にも張合いが出て来るし、それにもまして、才兵衛はただもう天にも昇る思いで、うれしくてたまらず、寝ても覚めても、四十八手、四十八手、あすはどの手で投げてやろうと寝返り打って寝言^{ねごと}を言い、その熱心が摩利支天^{まりしてん}にも通じたか、なかなかの角力上手になつて、もはや師匠の鰐口も、もてあまし気味になり、弟子に投げられるのも恰好^{かつこう}が悪く馬鹿々々しいと思ひ、或^ある日もつともらしい顔をして、汝^{なんじ}も、もう一人前の角力取りに

なつた、その心掛けを忘れるな、とわけのわからぬ訓戒を垂れ、
ついては汝に荒磯あらいそという名を与える、もう来るな、と言つてい
そいで敬遠してしまつた。才兵衛は師匠から敬遠されたとも氣附きづ
かず、わしもいよいよ一人前の角力取りになつたか、ありがたい
わい、きょうからわしは荒磯だ、すごい名前じゃないか、あま
ことに師の恩は山よりも高い、と涙を流してよろこび、それから
は、どこの土俵おに於いても無敵の強さを発揮し、十九の時に讃岐
の大関天竺仁太夫を、土俵の砂に埋めて半死半生にし、それほど
まで手ひどく投げつけなくてもいいじゃないかと角力仲間の評判
を悪くしたが、なあに、角力は勝ちやいいんだ、と傲然ごうぜんとうそ
ぶき、いよいよ皆に憎まれた。丸亀屋の親爺おやじは、かねてよりわが

子の才兵衛の力自慢をにがにがしく思い、何とか言おうとしても、才兵衛にぎよろりと睨まれると、わが子ながらも気味悪く、あの馬鹿力で手向いされたら親の威光も何もあつたものでない、この老いの細い骨は木^こつ葉^ば微^み塵^{じん}、と震え上つて分別し直し、しばらく静観と自重していたのだが、このごろは角力に凝つて他人様^{ひとさま}を怪^け我^がさせて片輪にして、にくしみの的になっている有様を見るに見かねて、或る日、おっかなびつくり、

「才兵衛さんや、」わが子にさんを附^ねけて猫撫^{こなで}声^{ごえ}で呼び、「人は神代^{かみよ}から着物を着ていたのですよ。」遠慮しすぎて自分でも何だかわからないような事を言ってしまった。

「そうですか。」荒磯は、へんな顔をして親爺を見ている。親爺

は、いよいよ困って、

「はだかになつて五体あぶない勝負も、夏は涼しい事でしょうが、冬は寒くていけませんでしょうねえ。」と伏目になつて膝ひざをこすりながら言つた。さすがの荒磯も噴き出して、

「角力をやめろと言うのでしょうか？」と軽く問い返した。親爺はぎよつとして汗を拭ふき、

「いやいや、決してやめろとは言いませんが、同じ遊びでも、楊ようきゆう

弓 など、どうでしょうねえ。」

「あれは女子供の遊びです。大の男が、あんな小さい弓を、ふしくれ立つた手でひねくりまわし、百発百中の腕前になつてみたところで、どろぼうに襲われて射ようとしても、どろぼうが笑い出

しますし、さかなを引く猫にあてても描はかゆいとも思やしません。」

「そうだろうねえ。」と賛成し、「それでは、あの十種香とか言つて、さまざまの香を嗅ぎわける遊びは？」

「あれもつまらん。香を嗅ぎわかるほどの鼻があつたら、めしのこげるのを逸早く嗅ぎ出し、下女に釜の下の薪をひかせたら少しは家の仕末のたしになるでしょう。」

「なるほどね。では、あの蹴鞠は？」

「足さばきがどうのこうのと言つて稽古しているようですが、堀を飛び越えずに門をくぐつて行つたつて仔細はないし、闇夜には提灯をもって静かに歩けば溝へ落ちる心配もない。何もあん

なに苦勞して足を軽くする必要はありません。」

「いかにも、そのとおりだ。でも人間には何か愛嬌あいきようが無くち

やいけないんじゃないかねえ。茶番の狂言なんか稽古したらどうだろうねえ。家に寄り合いがあつた時など、あれをやつてみんなにお見せすると、——」

「冗談を言つちやいけない。あれは子供の時こそ愛嬌もあります
が、髭ひげの生えた口から、まかり出いでたるは太郎冠者たろうかじやも見人みが冷
汗をかきますよ。お母さんだけが膝をすすめて、うまい、なんて
ほめて近所のもの笑いの種になるくらいのもです。」

「それもそうだねえ。では、あの活花いけばなは？」

「ああ、もうよして下さい。あなたは耄碌もうろくしているんじゃない

ですか。あれは雲の上の奥深きお方々が、野辺に咲く四季の花を
ごらんになる事が少いので、深山の松かしわを、取り寄せて、生
きてあるままの姿を御眼の前に眺^{なが}めてお楽しみなさるためにはじ
めた事で、わしたち下々の者が庭の椿^{つばき}の枝をもぎ取り、鉢植^{はちう}えの
梅をのこぎりで切つて、床の間に飾つたつて何の意味もないじや
ないですか。花はそのままに眺めて楽しんでいるほうがいいのだ
。」「言う事がいちいち筋道がちゃんと立っているので親爺は閉口
して、

「やっぱり角力が一ばんいいかねえ。大いにおやり。お父さんも
角力がきらいじゃないよ。若い時には、やったものです。」など
と、どうにも馬鹿らしい結果になってしまった。お内儀は親爺の

無能を輕蔑^{けいべつ}して、あたしならば、ああは言わない、と或る日、こつそり才兵衛を奥の間に呼び寄せ、まず華やかに、おほほと笑ひ、

「才兵衛や、まあここへお坐^{すわ}り。まあたいへん鬚^{ひげ}が伸びているじゃないか、剃^そつたらどうだい。髪もそんなに蓬^{ぼう}々とさせて、どれ、ちよつと撫^なでつけてあげましょう。」

「かまわないで下さい。これは角力の乱れ髪と言つて粹^{いき}なものなんです。」

「おや、そうかい。それでも粹なんて言葉を知つてただけたものしいじゃないか。お前はことし、いくつだい。」

「知つてゐる癖に。」

「十九だったね。」と母は落ちついて、「あたしがこの家にお嫁に來たのは、お父さんが十九、お母さんが十五の時でしたが、お前のお父さんたら、もうその前から道楽の仕放題でねえ、十六の時から茶屋酒の味を覚えてとやらで、着物の着こなしでも何でも、それこそ粹でねえ、あたしと一緒になつてからも、しばしば上方へのぼり、いいひとをたくさんこしらえて、いまこそあんな、どっちを向いてるのだからならないような変な顔だが、わかい時には、あれでなかなか綺麗きれいな顔で、ちよつとそんなに俯向うつむいたところなど、いまのお前にそっくりですよ。お前も、お父さんに似てまつげが長いから、うつむいた時の顔に愁うれえがあつて、きつと女には好かれますよ。上方へ行つて島原しまばらなどの別嬪べっぴんさんを泣か

せるなんてのは、男と生れて何よりの果報だろうじゃないか。」
と言つて、いやらしくにやりと笑つた。

「なんだつまらない。女を泣かせるには殴るに限る。角力で言え
ば張手はりてというやつだ。こいつを二つ三つくらわせたら、泣かぬ女
はありますまい。泣かせるのが、果報だったら、わしはこれから
いよいよ角力の稽古をはげんで、世界中の女を殴つて泣かせて見
せます。」

「何を言うのです。まるで話が、ちがいますよ。才兵衛、お前は
十九だよ。お前のお父さんは、十九の時にはもう茶屋遊びでも何
でも一とおりの修行をすましていたのですよ。まあ、お前も、花見
がてらに上方へのぼつて、島原へでも行つて遊んで、千両二千両

使つたつて、へるような財産でなし、氣に入つた女でもあつたら
身請^{みうけ}して、どこか景色のいい土地にしやれた家でも建て、その女
のひとと、しばらくままごと遊びなんかして見るのもいいじやな
いか。お前の好きな土地に、お前の氣ままの立派なお屋敷をこし
らえてあげましょう。そうして、あたしのほうから、米、油、味^み
噌^そ、塩、醬^{しょう}油、薪炭^{しんたん}、四季折々のお二人の着換え、何でもと
どけて、お金だつて、ほしだけ送つてあげるし、その女のひと
一人だけで淋^{さび}しいならば、お妾^{めかけ}を京からもう二、三人呼び奇せて、
その他^{ほか}、振袖^{ふりそで}のわかい腰元三人、それから中居^{なかい}、茶の間、御物^{おももの}
縫いの女、それから下働きのおさんどん二人、お小姓二人、小坊^{こぼ}
主^{うず}一人、あんま取の座頭一人、御酒の相手に歌うたいの伝右衛門^{でんえもん}、

御料理番一人、駕籠かごかき二人、御草履取おぞうり大小二人、手代一人、まあざつと、これくらいつけてあげるつもりですから、悪い事は言わない、まあ花見がてらに、——」と懸命に説けば、

「上方へは、いちど行つてみたいと思つていました。」と気軽に言うので、母はよろこび膝をすすめ、

「お前さえその氣になつてくれたら、あとはもう、立派なお屋敷をつくつて、お妾でも腰元でも、あんま取の座頭でも、——」

「そんなのはつまらない。上方には黒獅子くろじしという強い大関がいるそうです。なんとかしてその黒獅子を土俵の砂に埋めて、——」

「ま、なんて情無い事を考えているのです。好きな女と立派なお屋敷に暮して、酒席のなぐさみには伝右衛門を、——」

「その屋敷には、土俵がありますか。」

母は泣き出した。

ふすまご

襖越しに番頭、手代てだいたちが盗み聞きして、互いに顔を見合せ

ためいき

て溜息をつき、

「おれならば、お内儀さまのおつしやるとおりにするんだが。」

「当り前さ。蝦夷えぞが島の端でもいい、立派なお屋敷で、そんな栄

華のくらしを三日でもいい、あとは死んでもいい。」

「声が高い。若旦那わかだんなに聞えると、あの、張手とかいう凄すごいのを、

二つ三つお見舞いされるぞ。」

「そいつは、ごめんだ。」

みな顔色を変え、こそこそと退出する。

その後、才兵衛に意見をしようとする者も無く、才兵衛いよいよ増長して、讃岐一国を狭しとして阿波あわの徳島、伊予いよの松山、土佐の高知などの夜宮よみや角力かくりきにも出かけて、情容赦も無く相手突きとばし張り倒し、多くの怪我人を出して、角力は勝ちやいいんだ、と憎々しげにせせら笑って悠然ゆうぜんと引き上げ、朝昼晩、牛馬羊の生肉を食って力をつけ、顔は鬼の如く赤く大きく、路傍で遊んでいる子はそれを見て、きやつと叫んで病氣になり、大人は三丁さきから風をくらって疾走し、丸亀屋の荒磯と言え、讃岐はおろか四国全体、誰知らぬものとして無い有様となった。才兵衛はおろかにもそれを自身の出世と考え、わしの今日あるは摩利支天のお恵みもさる事ながら、第一は恩師鰐口様のおかげ、めったに鰐口

様のほうへは足を向けて寝られぬ、などと言うものだから、鰯口は町内の者に合わす顔が無く、いたたまらず、ついに出家しなければならなくなった。そのような騒ぎをいつまでも捨て置く事も出来ず、丸亀屋の身内の者全部ひそかに打寄つて相談して、これはとにかく嫁をもらつてやるに限る、横町の小平太の詰将棋も坂下の与茂七の尺八も嫁をもらつたらぱったりやんだ、才兵衛さんも綺麗なお嫁さんから人間の情愛というものを教えられたら、あんな乱暴なむごい勝負がいやになるに違いない、これは何でも嫁をもらつてやる事です、と鳩きゆうしゆ首しゆして眼を光らせてうなずき合ひ、四方に手廻てまわして同じ讃岐の国の大地主の長女、ことし十六のお人形のように美しい花嫁をもらつてやったが、才兵衛は祝しゆう

言^{げん}の日にも角力の乱れ髪のまま、きようは何かあるのですか、大勢あつまつていやがる、と本当に知らないのかどうか、法事ですか、など情無い事を言い、父母をはじめ親^{しん}戚^{せき}一同、拝むようにして紋服を着せ、花嫁の傍^{そば}に坐らせてとにかく盃^{さかずき}事をすませて、ほつとした途端に、才兵衛はぷいと立ち上つて紋服を脱ぎ捨て、こんなつまらぬ事をしていては腕の力が抜けると言い、庭に飛び降り庭石を相手によいしょ、よいしょとすさまじい角力の稽古。父母は嫁の里の者たちに面目なく背中^{へた}にびっしり冷汗をかいて、

「まだ子供です。ごらんのとおりの子供です。お見のがしを。」
と言うのだが、見たところ、どうしてなかなか子供ではない。四

十くらいの親爺に見える。嫁の里の者たちは、あつけにとられて、「でも、あんな髭をはやして分別顔でいきんでいるさまは、石川五右衛門の釜^{かま}うでを思い出させます。」と率直な感想を述べ、とんでもない男に娘をやったと顔を見合せて溜息をついた。

才兵衛はその夜お嫁を隣室に追いやり、間の襖に念入りに固くしんばり棒をして、花嫁がしくしく泣き出すと大声で、

「うるさい！」と呶^ど鳴り、「お師匠の鰐口様がいつかおっしゃった。夫婦が仲良くすると、あたら男盛りも、腕の力が抜ける、とおっしゃった。お前も角力取の女^{にようぼう}房ではないか。それくらいの事を知らないでどうする。わしは女ぎらいだ。摩利支天に願掛けて、わしは一生、女に近寄らないつもりなのだ。馬鹿者め。め

そめそしてないで、早くそつちへ蒲団敷いて寝ろ！」

花嫁は恐怖のあまり失神して、家中が上を下への大騒ぎになり、嫁の里の者たちはその夜のうちに、鬼が来た鬼が来たと半狂乱で泣き叫ぶ娘を駕籠かごに乗せて、里へ連れ戻もどつた。

このような不首尾のために才兵衛の悪評はいよいよ高く、いまは出家遁とんせい世して心静かに山奥いおりの庵で念仏ざんまい三昧の月日を送っている師匠の鰐口の耳にもはいり、師匠にとつて弟子の悪評ほどつらいものはなく、あけくれ氣に病み、ついには念仏の障りにもなつて、或る夜、決意して身を百姓姿にかえて山を下り、里の夜宮に行つて相変らずさかんな夜宮角力を、頬ほ被おかりして眺めて、そのうちにれいの荒磯が、のっしのっしと土俵に上がり、今夜もわ

しの相手は無しか、尻しりごみしないでかかって来い、と嗔しやがれた声で言つてぎよろりとあたりを見廻せば、お宮の松しょうらい籟いも、しんと静まり、人々は無言で帰り仕度をはじめ、その時、鰐口和尚おしょうは着物を脱ぎ、頬被りをしたままで、おう、と叫んで土俵に上った。荒磯は片手で和尚の肩を驚わしづかみにして、この命知らずめが、とせせら笑い、和尚は肩の骨がいまにも砕けはせぬかと気が気でなく、

「よせ、よせ。」と言つても、荒磯は、いよいよ笑つて和尚の肩をゆすぶるので、どうにも痛くてたまらなくなり、

「おい、おい。おれだ、おれだよ。」と囁ささやいて頬被りを取つたら、

「あ、お師匠。おなつかしゅう。」などと言つてゐる間に和尚は、

上手投げという派手な手を使って、ものの見事に荒磯の巨体を宙に一廻転させて、ずでんどうと土俵のまん中に仰向けに倒した。

その時の荒磯の形のみつともなかった事、大おおなま鯰ますが瓢ひょうたん箆せんか

らすべり落ち、猪いのししが梯子はしごからころげ落ちたみたいの言語に絶した

ぶざまな恰好かつこうであつたと後々の里の人たちの笑い草にもなつた

程で、和尚はすばやく人ごみにまぎれて素知らぬ振りで山の庵に

帰り、さっぱりした気持で念仏を称となえ、荒磯はあばら骨を三本折

つて、戸板に乘せられて死んだようになって家へ帰り、師匠、あ

んまりだ、うらみます、とうわごとを言い、その後さまざま養生

してもはかどらず、看護の者を足で蹴け飛ばしたりするので、次第

にお見舞いをする者もなくなり、ついには、もったいなくも生み

の父母に大小便の世話をさせて、さしもの大^{だいひょう}兵肥満も骨と皮ばかりになつて消えるように息を引きとり、本朝二十不孝の番^{ばんづ}附^けの大横綱になつたという。

（本朝二十不孝、卷五の三、無用の力自慢）

猿塚さるづか

むかし筑前ちくぜんの国、太宰府だざいふの町に、白坂徳右衛門とくえもんとて代々酒屋を営み太宰府一の長者、その息女らんお蘭の美形ならびなく、七つ八つの頃ころから見る人すべて瞠どうじやく若し、おのれの鼻垂れの娘の顔を思い出してやけ酒を飲み、町内は明るく浮き浮きして、ことし十に六つ七つ余り、骨細く振袖ふりそでも重げに、春光ほのかに身邊をつつみ、生みの母親もわが娘に話かけて、ふと口を噤つぶんで見とれ、名花ほまれの誉は国中にかくわしく、見ぬ人も見ぬ恋に沈むという有様であつた。ここに桑盛次郎くわもりじろう右衛門とて、隣町の裕福な質屋わかだの若

旦那、醜男ぶおとこではないけれども、鼻が大きく目尻めじりの垂れ下った
 何のへんてつも無い律儀りちぎそうな鬚ひげ男おとこ、齒きりの綺麗きれなのが取柄とりえで
 笑顔にちよつと愛あい嬌きようのあるところがよかつたのか、或る日あの
 雨宿りが縁になつて、人は見かけに依よらぬもの、縁は異なるもの、
 馬鹿ばからしいもの、お蘭に慕われるという飛んでもない大果報を得
 たというのがこの物語の発端である。両方の親は知らず、次郎右
 衛門ひそかに、出入のさかなやの伝六に頼み、徳右衛門方に縁組
 の内相談を持ちかけさせた。伝六はかねがねこの質屋に一かたな
 らず面倒をかけている事として、次郎右衛門の言いにくそうな頼み
 を聞いて、向うは酒屋、うまく橋渡しが出来たら思うぞんぶん飲
 めるであろう、かつはこちらの質の利息払いの期限をのばしても

らうのはこの時と勇み立ち、あつかましくも質流れの紋服で身を飾り、知らぬ人が見たらどなたさまかと思うほどの分別ありげの様子をして徳右衛門方に乗り込み、えへへと笑い扇子を鳴らして庭の石を褒め、相手は薄気味悪く、何か御用でも、と言ひ、伝六あわてず、いや何、と言ひ、やがてそれとなく次郎右衛門の希望を匂^{にお}わせ、こちらさまは酒屋、向うさまは質屋、まんざら縁の無い御商売ではございませぬ、酒屋へ走る前には必ず質屋へ立寄り、質屋を出てからは必ず酒屋へ立寄るもので、謂^いわば坊主^{ぼうず}とお医者^{べと}の如^{ごと}くこの二つが親戚^{しんせき}だったら、鬼に金棒で、町内の者が皆殺されてしまいます、などとけしからぬ事まで口走り、一世一代の無い智慧^{ちえ}を絞^{しぼ}って懸命に取りなせば、徳右衛門も少し心が動き、

「桑盛様の御総領ならば、私のほうでも不足はございませんが、時に、桑盛さまの御宗旨ごしゅうしは？」

「ええと、それは、」意外の質問なので、伝六はぐつとつまり、
「はつきりは、わかりませぬが、たしか浄土宗で。」

「それならば、お断り申します。」と口を曲げて憎々しげに言い渡した。「私の家では代々の法華宗ほっけしゅうで、殊ことにも私の代になりましてから、深く日蓮にちれん様に帰依きゐ仕かまつて、朝夕南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようのお題目を怠らず、娘にもそのように仕込んでありますので、いまさら他宗へ嫁にやるわけには行きません。あなたも縁談の橋渡しをしようというほどの男なら、それくらいの事を調べてからおいでになつたらどうです。」

「いや、あの、私は、」と冷汗を流し、「私は代々の法華宗の日蓮様で、朝夕、南無妙法蓮華經と。」

「何を言っているのです。あなたに嫁をやるわけじやあるまいし、桑盛様が浄土宗ならば、いかほど金銀を積んでも、またその御総領が御発明で男振りがよくつても、私は、いやと申します。日蓮様に相すみません。あんな陰気くさい浄土宗など、どこがいいのです。よくもこの代々の法華宗の家へ、娘がほしいなんて申込めたものだ。あなたの顔を見てさえ胸くそが悪い。お帰り下さい。」

さんざんの不首尾で伝六は退散し、しよげ切つてこの由よしを次郎右衛門に告げた。次郎右衛門は気軽に、なんだ、そんな事は何でもない、こちらの宗旨を変えたらいい、家は代々不信心だから浄

土宗だつて法華宗だつてかまわないんだ、と言つて、にわかふさに総じゆずの長い珠数じゆずに持ちかえ、父母にもすすめて、朝夕お題目をあげて、父母は何の事かわからぬが子供に甘い親なので、とにかく次郎右衛門の言いつけどおりとなに、わきを見てあくびをしながら南無妙法蓮華經と称となえ、ふたたび伝六は、徳右衛門方におもむき、いまは桑盛様も一家中、日蓮様を信心してお題目をあげていますと得意満面で申し述べたが、徳右衛門はむずかしい男で、いやいや根拔きの法華でなければ信心が薄い、お蘭ほしさの改宗は見えずいて浅間あさまし、日蓮さまだつていい顔をなさるまい、ちよつと考えてもわかりそうな事だ、娘は或る知合いの法華の家へ嫁にやるようにきまっています、というむごい返事、次郎右衛門は聞いて仰天し

て、取敢^{とりあ}えずお蘭に、伝六なんの役にも立たざる事、ならびに、

お前がよその法華へ嫁^{とつ}ぐそうだが、畜生め、私はお前のために好きでもないお題目を称えて太鼓をたたき手に豆をこしらえたのだぞ、思えば私の次郎右衛門という名は、あずまの佐野の次郎左衛門に似ていて、かねてから氣になっていたのだが、やはり東西左右の振られ男であつた、私もこうなれば、刀を振りまわして百人斬^ぎりをするかも知れぬ、男の一念、馬鹿にするな、と涙を流して書き送れば、すぐに折り返しお蘭の便り、あなたのお手紙何が何やら合点^{がてん}が行かず、とにかく刀を振りまわすなど危い事はよして下さい、百人斬りはおろか一人も斬らぬうちにあなたが斬られてしまいます、あなたの身にもしもの事があつたなら、私はどうし

たらしいのでしよう、あまりおどかさないで下さい、よその縁談の事など、本当に私には初耳です、あなたはいつもお鼻や目尻の事を気にして自信が無く、何のかのと言つて私を疑うので困つてしまいます、私が今更どこへ行くものですか、安心していらつしやい、もしもお父さんが私をよそへやるようだったら私はこの家から逃げてもあなたのところへ行くつもり、女の一念、覚えていらつしやい、という事なので次郎右衛門すこし笑い、しかし、まだまだ安心はならぬと無理に顔をしかめて、とにかくお題目と今は本気に日蓮様におすがりしたくなつて、南無妙法蓮華經と大声でわめいて滅多矢鱈めったやたらに太鼓をたたく。

お蘭はその翌る日、徳右衛門の居間に呼ばれて、本町紙屋彦かみやひこさ

く作様と縁談ととのつた、これも日蓮様のおみちびき、有ありがた難く

とこしなえの祝しゅうげん言を結べ、とおごそかに言い渡せば、お蘭は

ぎよつとしたが色に出さず、つつしんで一礼して部屋から出て、

それから飛ぶようにして二階に駈かけ上り、一筆しめしまいらそうろうせ候、

来たわよ、いよいよ決行の日が来たわよ、私は逃げるつもりです、

今宵こよいのうちに迎えたのむ、拝む、としどろもどろに書き散らし、

丁稚でっちに言いつけて隣町へ走らせ、次郎右衛門はその手紙をざっと

一読してがたがた震え、台所へ行つて水を飲み、ここが思案のし

どころと座敷のまん中に大あぐらをかいてみたが、別に何の思案

も浮ばず、立ち上つて着物を着換え、帳場へ行つてあちこちの引

出しを掻きまわし、番頭に見とがめられて、いやちよつと、と言

い、何がしの金子きんすをそそくさと袂たもとにほうり込んで、もう眼に物が見えぬ気持で、片ちんばの下駄げたをはいて出て途中で気がついて、家へ引返すのもおそろしく、はきもの屋に立ち寄って、もうこれだけしかお金が無いのだと思うと、けちになつて一ばん安い草履を買い、その薄っぺらな草履をはいて歩くとぺたぺたと裸足はだしで地べたを歩いているような感じで心細く、歩きながら男泣きに泣いて、ようやく隣の徳右衛門の家の裏口にたどりつくと、矢のようにお蘭は走り出て、ものも言わず次郎右衛門の手を取りさつさと自分からさきに歩き出し、次郎右衛門はあんまの如く手をひかれて、ぺたぺたと歩いて、またも大泣きに泣くのである。ここまでは、分別浅い愚かな男女の、取るにも足らぬふざけた話である

が、もちろん物語はここで終らぬ。世の中の厳肅な労苦は、このさきにあるようだ。

二人は、その夜のうちに七里歩み、左方に博多はかたの海が青く展開するのを夢のように眺ながめて、なおも飲まず食わず、背後に人の足音を聞いたきびに追手かと胆きもをひやし、生きた心地こころも無くただ歩きに歩いて蹠そうろう跟そうろうとたどりついたところは其その名も盛じょう者しや必ひ衰すい、是ぜ生しょう滅めつ法の鐘が崎、この鐘が崎の山添の野をわけて次郎右衛門のほのかな知合いの家をたずね、案の如く薄情のあしらいを受けて、けれどもそれも無理のない事と我慢して、ぶしつけながら、とお金を紙に包んで差し出し、その日は、納屋なやに休ませてもらい、浅間しき身のなりゆきと今はじめて思い当あつて青く寔やれた顔を見

合せて溜息ためいきをつき、お蘭は、手飼いの猿さるの吉兵衛の背を撫なでながら、やたらに鼻をすすり上げた。この吉兵衛という名の猿は、小猿の頃からお蘭に可愛かわいがられて育ち、娘が男と一緒にひたすら夜道を急ぐ後を慕ってついて来て、一里あまり過ぎた頃、お蘭が見つけて叱しかって追つても、石を投げて追つてもひよこひよこついて来て、次郎右衛門は不憫ふびんに思い、せつかく慕って来たのだから仲間にいれておやり、と言ひ、お蘭は、おいで、と手招きすれば、うれしそうに駆け寄つて来て、お蘭に抱かれて眼をぱちぱちさせて二人の顔を気の毒そうに眺める。いまはもう二人の忠義な下僕げぼくになりすまして、納屋へ食事を持ちこぶやら、蠅はえを追うやら、櫛くしでお蘭のおくれ毛を掻かき上げてやるやら、何かと要らないお手

伝いをして、二人の淋^{さび}しさを慰めてやろうと畜生ながら努めてい
る。いかに世を忍ぶ身とは言え、いつまでも狭い納屋に隠れて暮
しているわけにも行かず、次郎右衛門はさらに所持のお金の大半
を出してその薄情の知合いの者にたのみ、すぐ近くの空地に見す
ばらしい庵^{いおり}を作ってもらい、夫婦と猿の下僕はそこに住み、わず
かな土地を耕して、食^{しょく}膳^{ぜん}に供するに足るくらいの野菜を作り、
ひまひまに亭^{ていしゆ}主^{しゅ}は煙草^{たばこ}を刻み、お蘭は木綿の枷^{かせ}というものを繰
つて細々と渡世し、好きもきらいも若い一時の阿呆^{あほう}らしい夢、親
にそむいて家を飛び出し連添^{れんぞん}つてみても、何の事はない、いまは
ただありふれた貧乏^{じやたい}世帯^{せたい}の、とと、かか、顔を見合せて、おか
しくもなく、台所がかたりと鳴れば、鼠^{ねずみ}か、小豆^{あずき}に糞^{ふん}されてはた

まらぬ、と二人血相かえて立ち上り、秋の紅葉も春の堇すみれも、何の
 面おも白しろい事もなく、猿の吉兵衛は主人の恩に報いるはこの時と、
 近くの山に出かけては柏かしわの枯枝や松の落葉を掻き集め、家に持ち
 帰かまどつて竈の下にしゃがみ、松葉の煙に顔をそむけながら渋団扇しぶうちわ
 を矢鱈にばたばた鳴らし、やがてぬるいお茶を一服、夫婦にすす
 めて可笑おかしき中にも、しおらしく、ものこそ言わね貧乏世帯に氣
 を遣い、夕食も遠慮して少量たべると満足の態ていでころりと寝て、
 次郎右衛門の食事がすむと駈け寄つて次郎右衛門の肩をもむやら
 足腰をさするやら、それがすむと台所へ行きお蘭の後片附のお手
 伝でんいをして皿さをこわしたりして実に面目なさそうな顔つきをして、
 夫婦は、せめてこの吉兵衛を唯ゆい一いつのなぐさみにして身の上の憂う

きを忘れ、そのとしも過ぎて翌年の秋、一子菊之助をもうけ、久し振りに草の庵から夫婦の楽しそうな笑声が漏れ聞え、夫婦は急に生きる事にも張合いが出て来て、それめめをさました、あくびをしたと騒ぎ立てると、吉兵衛もはねまわって喜び、山から木の実を取って来て、赤ん坊の手に握らせて、お蘭に叱られ、それでも吉兵衛には子供が珍らしくてたまらぬ様子で、傍そばを離れず寝顔を覗のぞき込み、泣き出すと驚いてお蘭の許もとに飛んで行き裾すそを引いて連れて来て、乳を吞のませよ、と身振みぶりで教え、赤子の乳を吞むさまを、きちんと膝ひざを折って坐って神妙に眺め、よい子守が出来たと夫婦は笑い、それにつけても、この菊之助も不憫なもの、もう一年さきに古里ふるさとの桑盛の家で生れたら、絹の蒲団ふとんに寝かせて、乳

母を二人も三人もつけて、お祝いの産衣うぶぎが四方から山ほど集り、
蚤のみ一匹も寄せつけず玉の肌はだのままで立派に育て上げる事も出来た
のに、一年おくれたばかりに、雨風も防ぎかねる草の庵に寝かさ
れて、木の実のおもちやなど持たされ、猿が子守とは、と自分た
ちの無分別な恋より起ったという事も忘れて、ひたすら子供をい
とおしく思い、よし、よし、いまはこのようにみじめだが、この
子の物心地のつく迄までは、何とか一財産つくって古里の親たちを見
かえしてやらなければならぬ、と次郎右衛門も、子への愛から発
奮して、近所の者に、この頃のよろしき商売は何、などと尋ね、
草の庵も去年にかわって活気を呈し、一子の菊之助もまるまると
太ってよく笑い、母親のお蘭に似て輝くばかりの器量よし、猿の

吉兵衛は野の秋草を手折^{たお}つて来て菊之助の顔ちかく差しのべて上手にあやし、夫婦は何の心配も無く共に裏の畑に出て大根を掘り、ことしの秋は、何かいい事でもあるか、と夫婦は幸福の予感にぬくまっていた。その頃、近所のお百姓から耳よりのもうけ話ありという事を聞き、夫婦は勇んで、或る秋晴れの日、二人そろつてその者の家へ行つてくわしく話の内容を尋ね問いなどしている留守に、猿の吉兵衛、そろそろお坊ちゃんの入浴の時刻と心得顔で立ち上り、かねて奥様の仕方を見覚えていたとおりに、まず竈の下を焚^たきつけてお湯をわかし、湯玉の沸き立つを見て、その熱湯を盥^{たら}にちようど一ぱいとり、何の加減も見るとも無く、子供を丸裸にして仔細^{しさい}らしく抱き上げ、奥様の真似^{まね}して子供の顔をのぞき

込んでやさしく二、三度うなずき、いきなりずぶりと盥に入れた。

喚わっという声ばかりに菊之助の息絶え、異様の叫びを聞いて夫婦

は顔を見合せて家に駆け戻れば、吉兵衛うろうろ、子供は盥の中

に沈んで、取り上げて見ればはや茹海老ゆでえびの如く、二目と見られぬ

むぎんの死骸しがい、お蘭はこけまろびて、わが身に代えても今一度も

との可愛い面影おもかげを見たと狂ったように泣き叫ぶも道理、呆ぼうぜ

然んたる猿を捕えて、とかく汝なんじは我が子の敵かたき、いま打殺すと女だ

てらに薪まきを振上げ、次郎右衛門も胸つぶれ涙とどまらぬながら、

ここは男の度量、よしこれも因果の生れ合せと観念して、お蘭の

手から薪を取上げ、吉兵衛を打ち殺したく思うも尤もつともながら、も

はや返らぬ事に殺せつしょう生するは、かえって菊之助が菩提ぼだいのため悪

し、吉兵衛もあさましや我等^{われら}への奉公と思ひてしたるべけれども、
さすが畜生の智慧^{ちえ}浅きは詮^{せん}方^{かた}なし、と泣き泣き諭^{さと}せば、猿の吉
兵衛も部屋^{すみ}の隅で涙を流して手を合せ、夫婦はその様を見るにつ
けいよいよつらく、いかなる前生の悪^{あくごう}業^{ごう}ありてかかる憂^{うれ}目^めに遭
うかと生きる望も消えて、菊之助を葬^{ほうむ}つた後には共にわずらい寝
たきりになつて、猿の吉兵衛は夜も眠らずまめまめしく二人を看
護し、また七日々々にお坊ちやんの墓所へ参り、折々の草花を手
折つて供え、夫婦すこしく恢^{かいふく}復^{ふく}せし百日に当る朝、吉兵衛しよ
んぼりお墓に参つて水心静かに手向け、竹の鉾^{ほこ}にてみずから喉^{のど}
笛^えを突き通して相果てた。夫婦、猿の姿の見当らぬを怪しみ、
杖^{つえ}にすがつてまず菊之助の墓所へ行き、猿のあわれな姿をひとめ

見て一切を察し、菊之助無き後は、せめてこの吉兵衛だけが世の慰めとたのんでいたのに、と恨み嘆き、ねんごろに葬い、菊之助の墓の隣に猿塚を建て、その場に於いて二人出家し、（と書いて作者は途方にくれた。お念仏かお題目か。原文には、かの庵に絶えず題目唱えて、法華読誦の声やまず、とある。徳右衛門の頑固な法華の主張がこんなところに顔を出しては、この哀話も、ぶちこわしになりそうだ。困った事になったものである。）ふたたび、庵に住むも物憂く、秋草をわけていずこへとも無く二人旅立つ。

（懐硯、ふところすずり、卷四の四、人真似は猿の行水）

人魚の海

後深草^{ごふかくさ} 天皇宝治元年^{ほうじ}三月二十日、津軽の大浦というところに

人魚はじめて流れ寄り、其^その形は、かしらに細き海草の如き緑の

髪ゆたかに、面^{おもて}は美女の愁え^{うれ}を含み、くれないの小さき鶏冠^{とさか}その

眉間^{みけん}にあり、上半身は水^{すい}晶^{しょう}の如く透明にして幽^{かす}かに青く、胸

に南天の赤き実を二つ並べ附^つけたるが如き乳あり、下半身は、魚

の形さながらにして金色の花びらとも見まがうこまかき鱗^{うろこ}すきま

なく並び、尾^お鰭^{ひれ}は黄色くすきとおりにて大いなる銀杏^{いちょう}の葉の如く、

その声は雲雀^{ひばり}笛^{ふえ}の歌に似て澄みて爽^{さわ}やかなり、と世の珍らしき

ためしに語り伝えられているが、とかく、北の果の海には、この
 ような不思議の魚も少からず棲息せいそくしているようである。むかし、
 松前まつまえの国の浦奉行うらぶぎよう、中堂金内ちゆうどうこんないとて勇あり胆あり、しかも
 生れつき実直の中年の武士、或あるとしの冬、お役目にて松前の浦
 々を見廻りみまわ、夕暮ちかく鮭川さけがわという入海いりうみのほとりにたどりつ
 き、そこから便船を求め、きょうのうちに次の港まで行くつもり
 で相客五、六人と北国の冬には珍らしく空もよく晴れ静かな海を
 船出して、汀みぎわから八丁ほど離れた頃ころ、風も無いのに海がにわか
 荒れ出して、船は木の葉の如く翻弄ほんろうせられ、客は恐怖のために
 土色の顔になつて、思う女の名を叫び出し、さらばよ、さらばよ、
 といやらしく悶もだえて見せる者もあり、笈おいの中より観音経かんのんぎようを取

出し、さかさとも知らず押しいただき、そのまま開いておろおろ読み上げる者もあり、瓢ひょうたん箆へらを引き寄せ中に満たされてある酒を大急ぎで口くちの呑みして、これを飲みのこしては死んでも死にきれぬ、からになった瓢箆は浮袋になります、と五寸にも足りぬその小さいひさごを、しさいらしい顔つきで皆に見せびらかす者もあり、なんの意味か、しきりに指先で額ひたいに唾つばをなすりつけている者もあり、いそがしげに財布を出して金勘定、一両足りぬと呟つぶやいてあたりの客をいやな眼つきで睨にらむ者もあり、いのちの瀬戸際せとぎわにも、足がさわったとやらで無用の口論をはじめる者もあり人さまざまに騒ぎ立て、波はいよいよ高く、船は上下に荒く震動し、いまは騒ぐ力も尽き、船頭がまず船底にたおれ伏し、おゆるしなされ、

と呻^{うめ}いて死んだようにぐたりとなれば、船中の客、総泣きに泣き伏して、いずれも正体を失い、中堂金内ただひとり、はじめから舷^{ふなばた}を背にしてあぐらを掻^かき、黙って腕組して前方を見つめていたが、やがて眼^めのさきの海水が金色に変わり、五色の水玉噴き散ると見えしと同時に、白波二つにわれて、人魚、かねて物語に聞いていたのと同じ姿であらわれ、頭を振って緑の髪をうしろに払い、水晶の腕で海水を一掻き二掻きすると蛇^{へび}の如く素早く金内の船に近づき、小さく赤い口をあけて一声爽やかな笛の音。おのれ船路のさまたげと、金内怒って荷物の中より半^{はんきゆう}弓^{きう}を取り出し、神に念じてひようと射れば、あやまたずかの人魚の肩先に当り、人魚は声もなく波間に沈み、激浪たちまち収まって海面はも

とのように静かになり、斜陽おだやかに船中にさし込み、船頭は
 間^{まぬ}抜け面^{づら}で起き上り、なんだ夢か、と言った。金内は、おのれの
 手柄^{てがら}を矢鱈^{やたら}に吹^ふ聴^いするような軽薄な武士でない。黙^{もく}つて微笑^{ほほえ}
 み、また前のように腕組みして舷によりかかつて坐^{すわ}っている。船
 客もそろそろ土色の顔を挙げ、てれ隠しにけたたましく笑う者あ
 り、せつかくの酒を何の興もなく飲んでしまつて、後の樂しみを
 無くした、と五寸ばかりのひさごをさかさに振つて、そればかり
 愚痴^うつている者もあり、或^{ある}いはまた、さいぜん留守宅の若いお妾^{めかけ}
 の名を叫んで身悶^ええしていた八十歳の隠居は、さてもおそろしや、
 とおもむろに衣紋^{えもん}を取りつくろい、これすなわち登^{のぼり}竜^{りゅう}に違^{ちが}い
 ござらぬ、と断じ、そもそもこの登竜^{えつちゅう}は越^え中^{ちゅう}越^え後^ごの海中に多

く見受けられるものにして、夏日に最もしばしばこの事あり、一群の黒雲虚空こくうより下り来れば海水それに吸われるが如く応じて逆さかまき

巻のぼり黒雲潮水一柱になり、まなこをこらしてその凄じき柱すさまを見れば、はたせるかな、竜の尾頭その中に歴々たりともの本にござった、また別の一書には、或る人、江戸より船にてのぼりに東海道の興津おきつの沖を過ぎる時に一むらの黒雲虚空よりかの船をさして飛来る、船頭大いに驚き、これは竜の此舟このを巻上げんとするなり、急に髪を切つて焼くべしとて船中の人々のこらず頭髮を切つて火にくべしに臭気ふんぷんと空にのぼりしかば、かの黒雲たちまちに散り失せたりとござったが、愚老もし若かつたら、さいぜんただちに頭髮を切るべきに生憎あいにく、と言つて禿はげた頭を

真面目まじめな顔して静かに撫なでた。へえ、そうですか、と観音経は、馬鹿ばかにし切ったような顔で、そつぽを向いて相槌あいづちを打ち、何もかも観音のお力にきまっていますさ、と小声で呟ささやき、殊勝しゅしょうげに瞑め目いもくして南無観世音大菩薩なむかんぜおんだいぼさつと称となえれば、やあ、ぜにはあつた！
と自分の懐ふところの中から足りない一両を見つけて狂喜する者もあり、金内は、ただにこにこして、やがて船はゆらゆら港へはいり、人々やれ命拾いと大恩人の目前にあるも知らず、互いに無邪気に慶祝し合つて上陸した。

中堂金内は、ほどなく松前城に帰着し、上役の野田武蔵のだむさしに、このたびの浦々巡視の結果をつぶさに報告して、それからくつろぎ、よもやまの旅の土産話のついでに、れいの人魚の一件を、少しも

誇張するところなく、ありのままに淡々と語れば、武蔵かねて金内の実直の性格を悉知^{しつち}しているゆえ、その人魚の不思議をも疑わず素直に信じ、膝^{ひざ}を打って、それは近頃めずらしい話、殊^{こと}にもそなたの沈着勇武、さつそくこの義を殿^{との}の御前に於^おいて御披露^{ごひろう}申し上げよう、と言うと、金内は顔を赤らめ、いやいや、それほどのも事でも、と言いかけるのかぶせて、そうではない、古来ためし無き大手柄、家^{かちゅう}中の若い者どものはげみにもなります、と強く言い切つて、まごつく金内をせき立て、共に殿の御前にまかり出ると、折よく御前には家中の重役の面々も居合せ、野田武蔵は大いに勢い附いて、おのおの方もお聞きなされ、世にもめずらしき手柄話、と金内の旅の奇談を逐一語れば、殿をはじめ一座の者、

膝をすすめて耳を傾ける中にひとり、あおさきひやくえもん青崎百右衛門とて、父親

の百之丞ひやくのしようが松前の家老として忠勤をはげんだお蔭かげで、親の歿ぼ

後も、その禄高ろくだかをそっくりいただき何の働きも無いくせに重役

のひとりに加えられ、育ちのよいのを鼻にかけて同輩をさげすみ、

なりあがり者の娘などはこの青崎の家に迎え容いれられぬと言つて

妻をめとらず道楽三昧さんまいの月日を送つて、ことし四十一歳、この

ごろは欲しいと言つたつて誰だれも娘をやろうとはせぬ有様、みずか

らの高慢のむくいではあるが、さすがに世の中が面おもしろ白くなく、

何かにつけて家中の者たちにいや味を言い、身のたけ六尺に近く

極度に瘦やせて、両手の指は筆の軸のように細く長く、落ち窪くぼんだ

小さい眼はいやらしく青く光つて、鼻は大きな驚わし鼻ほお、頬ほおはこけ

て口はへの字型、さながら地獄の青鬼の如き風貌ふうぼうをしていて、

一家中のきらわれ者、この百右衛門が、武蔵の物語を半分も聞かぬうちに、ふふん、と笑い、のう玄齋げんさい、と末座に丸くかしこまちやぼうずっている茶坊主の玄齋に勝手に話掛け、

「そなたは、どう思うか。こんな馬鹿らしい話を、わざわざ殿へ言上するなんて、ちと不謹慎だとは思わぬか。世に化物なし、不思議なし、猿さるの面つらは赤し、犬の足は四本にきまつている。人魚だなんて、子供のお伽とき噺ばなしではあるまいし、いいとしをしたお歴々が、額ひたいにはくれないの鶏冠とさかも呆あきれるじゃないか。」と次第に傍若無人の高声になつて、「のう、玄齋、よしその人魚とやらの怪しい魚類が北海に住んでいたとしてもさ、そんな古来ためしの無

い妖怪ようかいを射とめるには、こちらにも神通力が無くてはかなわぬ。

なまなかの腕では退治が出来まい。鳥に羽あり魚に鰭ひれありさ。な

かなかどうして、飛ぶ小鳥、泳ぐ金魚を射とめるのも容易の事じ

やないのに、そんな上半身水晶とやらの化物を退治するのには、

まず 弓矢ゆみや八幡大菩薩はちまんたいぼさつ、頼光らいこう、綱、八郎、田原藤太たわらとうた、みんなの

お力をたばにしたくらいの腕前でもなけれや、間に合いますまい。

いや、論より証拠、それがしの泉水の金魚、な、そなたも知って

いるだろう、わずかの浅水をたのしみにひらひら泳ぎまわってご

ざるが、せんだって退屈のあまり雀すずめの小弓で二百本ばかり射かけ

てみたが、これにさえ当らぬもの、金内殿も、おおかた海上でに

わかわかの旋風に遭い、動転して、流れ寄る腐木にはつしと射込んだ

のでなければ、さいわいだかのう。」と、当惑し切つてもじもじしている茶坊主をつかまえて、殿へも聞えよがしの雑言^{ぞうごん}。たまりかねて野田武蔵、ぐいと百石衛門の方に向き直り、

「それは貴殿の無学のせいだ。」と日頃の百石衛門の思い上った横着振りに対する鬱憤^{うつぶん}もあり、噛みつくような口調で言つて、

「とかく生半可^{なまはんか}の物識^{ものし}りに限つて世に不思議なし、化物なし、

と実^みもふたも無いような言い方をして澄^{すま}し込んでいるものですが、

そもそもこの日本の国は神国なり、日常の道理を越えたる不思議の眞実、炳^{へい}として存す。貴殿のお屋敷の浅い泉水とくらべられて

は困ります。神国三千年、山海万里のうちにはおのずから異風奇

態の生類^{しょうるい}あるまじき事に非^{あら}ず、古代にも、仁徳^{にんとく}天皇の御時、

飛驒ひだに一身両面の人出ずる、天武天皇てんむの御宇ぎように丹波たんばの山家やまがより十
二角の牛出ずる、文武天皇もんむの御時けいじ、慶雲四年六月十五日に、た
け八丈よこ一丈二尺一頭三面の鬼、異国より来きたる、かかる事ども
も有るなれば、このたびの人魚、何か疑うべき事に非ず。」と名
調子でもって一氣にまくし立てると、百右衛門、蒼あおい顔をさらに
蒼くして、にやりと笑い、

「それこそ生半可の物識り。それがしは、議論を好まぬ。議論は
軽輩、功をあせている者同志のやる事です。子供じやあるまい
し。青筋たてて空論をたたかわしても、お互い自説を更に深く固
執するような結果になるだけのものさ。議論は、つまらぬ。それ
がしは何も、人魚はこの世に無いと言っているのではござらぬ。」

見た事が無いと言っているだけの事だ。金内殿もお手柄ついでにその人魚とやらを、御前に御持参になればよかったのに。」と憎らしくうそぶく。武蔵たけり立って膝をすすめ、

「武士には、信の一字が大事ですぞ。手にとって見なければ信ぜられぬとは、さてさて、あわれむべき御心魂。それ心に信無くば、この世に何の実体かあらん。手に取って見れども信ぜずば、見ざるもひとしき仮寝の夢。実体の承認は信より発す。然^{しか}して信は、心の情愛を根源とす。貴殿の御心底には一片の情愛なし、信義なし。見られよ、金内殿は貴殿の毒舌に遭い、先刻より身をふるわし、血涙をしぼって泣いてござるわ。金内殿は、貴殿とは違って、うそなど言う仁^{じん}ではござらぬ。日頃の金内殿の実直を、貴殿はよ

もや知らぬとは申されますまい。」と詰め寄つたが、百右衛門は相手にせず、

「それ、殿がお立ちだ。御不興と見える。」といかめしい口調で言い、御奥へ引上げる城主に向つて平伏し、

「やれやれ、馬鹿どもには迷惑いたす。」と小声で呟いて立ち上り、「頭の血のめぐりの悪い事を実直と申すのかも知れぬが、夢や迷信をまことしやかに言い伝え、世をまどわすのは、この実直者に限る。」と言い捨て、猫ねこの如く足音も無く退出する。他の重役たちも、或いは百右衛門の意地悪を憎み、或いは武蔵の名調子を気障きざなりとしてどつちもどつちだと思い、或いは居眠りをして何の議論やらわけがわからず呆然ぼうぜんとして立ち上つて、一人去り

二人去り、あとには武蔵と金内だけが残されて、武蔵くやしく齒がみをして、

「おのれ、よくも、ほざいた。金内殿、お察し申す。そなたも武士、すでに御覚悟もあろうが、いついかなる場合も、この武蔵はそなたの味方です。いかにしても、きやつを、このままでは。」と力めば、金内は、そう言われて尚^{なお}の事、悲しくうらめしく、しばらくは一言の言葉も出ず、声も無く慟^{どう}哭^{こく}していた。不仕合せな人は、他人からかばわれ同情されると、うれしいよりは、いつそうわが身がつらく不仕合せに思われて来るものである。東西を失い男泣きに泣いて、いまはわが身の終りと観念し、涙をこぶしで拭^ふいて顔を挙げ、なおも泣きじやくりながら、

「かたじけなく存じます。さきほどの百右衛門のかずかずの悪口、聞き捨てになりがたく、金内輕輩ながら、おのれ、まつぶたつと思ひながらも、殿の御前なり、忍ぶべからざるを忍んで、ただ、くやし涙にむせていました、もはや覺悟のほどが極きまりました。ただいまこれより追おい駈かけて、かの百右衛門を一刀のもとに切り捨てるのは最も易やすい事です、それでは家中の人たちは、金内は百右衛門のために嘘うそを見破られて、くやしきの余り刃にんじょう傷に及んだと言ひ、それがしの人魚の話もいよいよろんの事になつて、御貴殿にも御迷惑をおかけする結果に相成りますから、どうせもう、すたりものになつたこの身、死におくれついでに今すこし命ながらえ、鮭川の入海を詮議せんぎして、弓矢八幡お見捨てなく、かの

人魚の死骸しがいを見つけた時は、金内の武運もいまだ尽きざる証拠、
是これを持参して一家中に見せ、しかるのち、百右衛門を心置きなく
存分に打ち据すえ、この身もうれしく切腹の覚悟。」と申せば武蔵
は、いじらしさに、もらい泣きして、

「武蔵が無用の出しやばりして、そなたの手柄てがらを殿に御披露した
のが、わるかった。わけもない人魚の論などはじめて、あたら男
を死なせねばならぬ。ゆるせ金内、来世は武士に生れぬ事じやの
う。」顔をそむけて立ち上り、「留守は心配ないぞ。」と強く言
つて広間から退出した。

金内の私宅には、八重ということし十六になる色白く目鼻立ち
鮮やかな大柄な娘と、鞠まりという小柄で伶俐れいりな二十一歳の召使いと

二人住んでいるだけで、金内の妻は、その六年前にすでに病歿していた。金内はその日努めて晴れやかな顔をして私宅へ帰り、父はまたすぐ旅に出かける、こんどの旅は少し永いかも知れぬから留守に気を付けよ、とだけ言つて、貯えの金子たくわほとんど全部をふところきんすにねじ込み、逃げるようにして家を出た。

「お父さまは、へんね。」と八重は、父を送り出してから、鞠に言つた。

「さようでございます。」鞠は落ちついて同意した、金内は、ひとをあざむく事は、下手である。いくら陽気に笑つてみせても、だめなのである。十六の娘にも、また召使いにも、看破されている。

「お金を、たくさん持って出たじゃないの。」お金の事まで看破されている。

鞠は、うなずいて、

「容易ならぬ事と存じます。」と、分別顔をして呟いた。

「胸騒ぎがする。」と言って、八重はりようそで両袖で胸をおお覆った。

「どのような事が起るかわかりませぬ。見苦しい事の無いように、これからすぐに家の内外をうちと綺麗に掃除いたしましょう。」と鞠は素早くたすき襷をかけた。

その時、重役の野田武蔵がお供も連れず、平服で忍ぶようにやって来て、

「金内殿は、出かけられましたか。」と八重に小声で尋ねた。

「はい。お金をたくさん持つて出かけました。」

武蔵は苦笑して、

「永い旅になるかも知れぬ。留守中、お困りの事があつたら、少しも遠慮なくこの武蔵のところへ相談にいらつしやい。これは、当座のお小遣い。」と言つて、かなりの金子を置いて立ち去る。

これはいよいよ父の身の上に何か起つたと合点して、八重も武士の娘、その夜から懷剣を固く抱いて帯もとかずに丸くなつて寝る。

一方、人魚をさがしに旅立つた中堂ちゅうどう金内こんない、鮭川の入海のとりにたどり着き、村の漁師をことごとく集めて、所持の金子をもつ残らず与え、役目を以てそちたちに申しつけるのではない、中堂

金内一身上の大事、内々の折入つての頼みだ、と物堅く公私の別をあきらかにして、それから少し口ごもり、頬ほおを赤らめ、ほろ苦く笑つて、そちたちは或いは信じないかも知れないが、と氣弱く前置きして、過ぎし日の人魚の一件を物語り、金内がいのに代えての頼みだ、あの人魚の死骸を是非ともこの入海の底から捜し出し、或る男に見せてやらなければこの金内の武士のいちぶん一分が立たぬのだ、この寒空に氣の毒だが、そちたちの全力を挙げてあの怪魚の死骸を見つけ出しておくれ、と折から雪の霏々ひひと舞い狂う荒磯で声をからして懇願すれば、漁師の古老たちは深く信じて同情し、若い衆たちは、人魚だなんて本当かなあと疑いながら、それでも少し好奇心にそそられ、とにかく大網を打つて、入海の底

をさぐつて見たけれども、網にはいつて来るものは、にしん、たら、かに、いわし、かれいなど、見なれた姿のさかなばかりで、かの怪魚らしいものは更に見当らず、翌^{あく}る日も、またその翌る日も、村中総出で入海に船を浮べ、寒風に吹きさらされて、網を打ったりもぐったり、さまざま難儀して捜査したが、いずれも徒勞に終り、若い衆たちは、はや不平を言い出し、あのさむらいの眼つきを見よ、どうしたって普通でない、氣違いだよ、氣違いの言う事をまに受けて、この寒空に海にもぐるのは馬鹿々々しい、おれはもう、やめた、あてもない海の人魚を捜すよりは、村の人魚にあたためられたほうが氣がきいている、と磯の焚火^{たきび}に立ちほだかり下品な冗談を大声で言つてどつと笑い囃^{はや}し、金内はひとり悲

しく、聞えぬ振りして、一心に竜りゅうじん神に祈念し、あの人魚うろこの鱗一枚、髪一筋でもいまこの入海から出たならば、それがしの面目はもとより武蔵殿も名誉、共に思うさま百右衛門をののしり、信義ひとたちの一太刀覚えたか、とまっこうみじんに天てんちゆう誅を加え、この胸のうらみをからりと晴らす事が出来るものを、と首を伸ばして入海を見渡す姿のいじらしさに、漁師の古老は思わず涙ぐんで傍そばに寄り、

「なあに、大丈夫だ。若い衆たちは、あんな事を言っているけれど、おれたちは、たしかにこの海に、おさむらいの射とめた人魚が沈んでいると見込んでいるだ。このあたりの海には、な、昔からいろいろな不思議なさがいまして、若い衆たちには、わか

らねえ事だ。おれたちの子供の頃にも、な、この沖に、おきなという大魚があらわれて、偉い騒ぎをしました。嘘でも何でも無い、その大きさは二、三里、いや、もっと大きいかも知れねえ。誰もその全身を見たものがねえのです。そのさかなが現われる時には、海の底が雷のように鳴って風もねえのに大波が起って、鯨くじらなんてやつも東西に逃げ走って、漁の船も、やあれ、おきなが来たぞう、と叫び合って早々に浜に漕こぎ戻もどり、やがて、おきなが海の上に浮んで、そのさまは、大きな島がにわかひれに沖にいくつも出来たみたいで、これは、おきなの背中や鰭が少しずつ見えたのでして、全体の大きさは、とてもとても、そんなもんじやありやしねえ。はかり知る事が出来ねえのだ。このおきなは、小さなさかなには見

むきもしねえで、もっぱら鯨ばかりたべて生きているのだそう
 して、二十尋^{ひろ}三十尋の鯨をたばにして呑み込んで、その有様は、
 鯨が鰯^{いわし}を呑むみたいだつてんだから凄^{すご}いじゃねえか。だから鯨は、
 海の底が鳴れば、さあ大変と東西に散つて逃げますだ。おつかな
 いさかなもあつたものさ。蝦夷^{えぞ}の海には昔から、こんな化物みた
 いなさかなが、いろいろあつただ。おさむらいの人魚の話だつて、
 おれたちは、ちつとも驚きやしねえ。それはきつと、この入海に
 いやがつたに違いねえのだ。なんの不思議もねえ事だ。二里三里
 のおきなが泳ぎ廻つていた海だもの、な、いまにおれたちは、き
 つとその人魚の死骸を見つけて、おさむらいの一分とやらを立て
 させてあげますぞ。」と木訥^{ぼくとつ}の口調で懸命になぐさめ、金内の

肩に積った粉雪を払ってやつたりするのだが、金内は、そのように優しくされると尚さら心細くなり、あああ、自分もとうとうこんな老爺ろうやの慈悲を受けるようなはかない身の上の男になったか、この老爺のいたわりの言葉の底には、何だかもう絶望してあきらめているような気配が感ぜられる、とひがみ心さえ起つて来て、荒々しく立ち上り、

「たのむ！ それがしは、たしかにこの入海で怪しい魚を射とめたのだ。弓矢八幡、誓言する。たのむ。なお一そう精出して、あの人魚の鱗一枚、髪一筋でも捜し当てておくれ。」と言い捨て、積雪を蹴けつて汀みぎわまで走って行き、そろそろ帰り支度をはじめている漁師たちの腕をつかんで、たのむ、もういちど、と眼つきをか

えて歎願^{たんがん}する。漁師たちは、お金をさきに受け取ってしまったて
いるし、もういい加減に熱意を失いかけている。ほんの申しわけ
みたいに、岸ちかくの浅いところへ、ぎぶりと網を打ったりなど
して、そうして、一人二人、姿を消し、いつのまにか磯には犬こ
ろ一匹もいなくなり、日が暮れてあたりが薄暗くなるといよいよ
朔風^{さくふう}が強く吹きつけ、眼をあいていられないくらいの猛吹雪に
なっても、金内は、鬼界ヶ島^{きかいしま}の流人^{るにん}俊寛^{しゅんかん}みたいに浪打際^{なみうちぎわ}を
足ずりしてうろつき廻り、夜がふけても村へは帰らず、寢床は、
はじめから水際近くの舟小屋の中と定めていて、その小屋の中で
少しまどろんでは、また、夜の明けぬうちに、汀に飛び出し、流
れ寄る藻屑^{もくず}をそれかと驚喜し、すぐにがっかりして泣きべそをか

いて、岸にかくに漂う腐木を、もしやと疑いざぶざぶ海にはいつて行つて、むなしく引返し、ここへ来てから、ろくろくものも食わずに、ただ、人魚出て来い、出て来いと念じて、次第に心魂朦もうろう

朧として怪しくなり、自分は本当に人魚を見たのかしら、射とめたなんて嘘だろう、夢じゃないか、と無人の白皚はくがい々の磯に立つてひとり高笑いしてみたり、ああ、あの時、自分も船の相客たちと同様にたわいなく気を失い、人魚の姿を見なければよかった、なまなかに気魂が強くて、この世の不思議を眼前に見てしまったからこんな難儀に遭うのだ、何も見もせず知りもせず、そうしてもつともらしい顔でそれぞれ独り合点して暮している世の俗人たちがうらやましい、あるのだ、世の中にはあの人たちの思いも及

ばぬ不思議な美しいものが、あるのだ、けれども、それを一目見たものは、たちまち自分のようにこんな地獄に落ちるのだ、自分には前世から、何か気味悪い宿しゆくごう業ごうのようなものがあつたのかも知れない、このうえ生きて甲斐かいない命かも知れぬ、悲惨に死ぬより他は無い星の下に生れたのだろう、いつそこの荒磯に身を投じ、来世は人魚に生れ變つて、などと、うなだれて汀をふらつき、どうやら死神にとりつかれた様子で、けれども、やはり人魚の事は思い切れず、しらじらと明けはなれて行く海を横目で見て、ああ、せめてあの老漁師の物語ったおきなとかいう大魚ならば、詮せ議ぎもひどく容易なのになあ、と真顔でくやしがつて溜息ためいきをつき、あたら勇士も、しどろもどろ、既に正気を失い命のほどもここ一

両日中ときえ見えた。

留守宅に於いては娘の八重、あけくれ神仏に祈つて、父の無事を願っていたが、三日経^たち四日経^ち、茶碗^{ちやわん}はわれる、草履の鼻緒は切れる、少しの雪に庭の松の枝が折れる、縁起の悪い事ばかり続いて、とても家の中にじつとして居られなくなり、一夜こっそり武蔵の家をたずねて、父は鮭川の入海のほとりにいるという事を聞いて、その夜のうちに身支度をして召使いの鞠と二人、夜道の雪あかりをたよりに、父の後を追って発足した。或いは民家の軒下に休み、或いは海岸の岩穴に女の主従がひたと寄り添って浪の音を聞きつつ仮寝して、八重のゆたかな頬も瘦^やせ、つらい雪道をまたもはげまし合っていそいでも、女の足は、はかどらず、

ようやく三日目の暮方、よろめいて鮭川の入海のほとりにたどり
 着いた時には、南無三宝、父は荒なむさんぼう 蓆あらむしろの上にあさましい冷いか
 らだを横たえていた。その日の朝、この金内の屍むくろが、入海の岸ち
 かくに漂つていたという。頭には海草が一ぱいへばりついて、か
 の金内が見たという人魚の姿に似ていたという。女の主従は左右
 より屍に取りつき、言葉も無くただ武者振りついて慟哭して、さ
 すがの荒くれた漁師たちも興覚める思いで眼をそむけた。母に先
 立たれ、いままた父に捨てられ、八重は人心地ひとこちも無く泣きに泣
 いて、やがて覚悟を極きめ、青い顔を挙げて一言、

「鞠、死のう。」

「はい。」

と答えて二人、しずかに立ち上った時、かっかっ憂々たる馬蹄ばていの響きが聞えて、

「待て、待てえ！」と野田武蔵のたのもししい蛮声。

馬から降りて金内の屍に頭を垂れ、

「えい、つまらない事になった。ようし、こうなったら、人魚の論もくそも無い。武蔵は怒った。本当に怒った。怒った時の武蔵には理窟りくつも何も無いのだ。道理にはずれていようが何であろうが、そんな事はかまわない。人魚なんて問題じゃない。そんなものはあつたつて無くつたつて同じ事だ。いまはただ憎い奴やつを一刀両断に切り捨ててゐるまでだ。こら、漁師、馬を貸せ。この二人の娘さんが乗るのだ。早く捜して来い！」と八つ当りに呶鳴どなり散らし、勢

いあまつて、八重と鞠を、はつたと睨み、

「その泣き顔が気に食わぬ。かたきのいるのが、わからんか。これからすぐ馬で城下に引返し、百右衛門の屋敷に躍り込み、首級しるしを挙げて、金内殿にお見せしないと武士の娘とは言わせぬぞ。めそめそするな！」

「百右衛門殿というと、」召使いの鞠は、ひそかにうなずき進み出て、「あの青崎、百右衛門殿の事でしようか。」

「そうよ、あいつにきまつている。」

「思い当る事がございます。」と鞠は落ちつき、「かねてあの青崎百右衛門殿は、いいとしをしながらお嬢様に懸想けそうして、うるさく縁組を申し入れ、お嬢様は、あのような驚わし鼻のお嫁になるく

らいなら死んだほうがいいとおっしゃるし、それで、旦那様も、

――

「そうか、それで事情が、はつきりわかった。きやつめ、一生独身主義だの、女ぎらいだのと抜かしていながら、蔭かげでは、なあんだ、振られた男じゃないか、だらしがない。いよいよ見下げ果てたやつだ。かなわぬ恋の仕返しに金内殿をいじめるとは、憎さが余って笑止千万！」と早くも朗らかに凱歌がいかを挙げた。

その夜、武蔵を先登せんとうに女ふたり長刀ながなたを持ち、百右衛門の屋

敷に駈け込み、奥の座敷でお妾めかけを相手に酒を飲んでゐる百右衛門の瘦せた右腕を武蔵まず切り落し、百右衛門すこしもひるまず左手で抜き合わすを鞠は踏み込んで両足を払えば百右衛門立膝たてひざに

なつてもさらに弱るところなく、八重をめがけて烈しく切りつけ、
 武蔵ひやりとして左の肩に切り込めば、百右衛門たまらず仰向け
 に倒れたが、一向に死なず、蛇の如く身をくねらせて手裏剣を
 鋭く八重に投げつけ、八重はひよいと身をかがめて危く避けたが、
 そのあまりの執念深さに、思わず武蔵と顔を見合せたほどであつ
 た。

めでたく首級を挙げて、八重、鞠の兩人は父の眠っている鮭川
 の磯に急ぎ、武蔵はおのれの屋敷に引き上げて、このたびの刃傷
 の始中終を事こまかに書き認め、殿の御許しも無く百右衛門
 を誅した大罪を詫び、この責すべてわれに在りと書き結び、あし
 たすぐ殿へこの書状を差上げよと家来に言いつけ、何のためらう

ところも無く見事に割腹して相果てたとはなかなか小気味よき武士である。女二人は、金内の屍に百右衛門の首級を手向け、ねんごろに父の葬とむらいをすませて、私宅へ帰り、門を閉じて殿の御裁きを待ち受け、女ながらも白無垢しろむくの衣服に着かえて切腹の覚悟、城中に於いては重役打寄り評議の結果、百右衛門こそ世にめずらしき悪人、武蔵すでに自決の上は、この私闘おかまいなしと定め、殿もそのまま許認し、女ふたりは、天晴あっぱれ父の仇かたき、主の仇しゆうを打ったけなげの者と、かえって殿のおほめにあずかり、八重には、重役の伊村作右衛門末子作之助の入縁仰せつけられて中堂みようせの名跡きをつがせ、召使いの鞠事は、歩行目付かちめつけの戸井市左衛門とて美男の若侍に嫁がせ、それより百日ほど過ぎて、北浦春日かすがみようじん明神

の磯より深夜城中に注進あり、不思議の骨格が汀に打ち寄せられています、肉は腐つて洗い去られ骨組だけでございますが、上半身はほとんど人間に近く、下半身は魚に違たがわず、いかにも無気味のものゆえ、取り敢あえず御急報申しあげますとの事、さつそく奉行をつかわし検分させたところが、その奇態の骨の肩先にまぎれもなく、中堂金内の誉ほまれの矢の根、八重の家にはその名の如く春かさなが重つたという、此段、信このずる力の勝利を説く。

（武道伝来記、卷二の四、命とらるる人魚の海）

破産

むかし美作みまさかの国に、蔵合ぞうごうという名の大長者があつて、広い屋敷には立派な蔵くらが九つも立ち並び、蔵の中の金銀、夜な夜なうめ呻き出して四隣の国々にも隠れなく、美作の国の人たちは自分の金でも無いのに、蔵合のその大財産を自慢し、薄暗い居酒屋でわずかの濁酒にこりざけに酔つては、

蔵合さまには及びもないが、せめて成りたや万屋よろずやに、

という卑屈うたの唄をあわれなふしで口ずさんで淋さびしそうに笑い合うのである。この唄に出て来る万屋というのは、美作の国で蔵合

につづく大金持、当主一代のうちに溜め込んだ金銀、何万両、何
 千貫とも見当つかず、しかも蔵合の如く堂々たる城郭を構える事
 なく、近隣の左官屋、炭屋、紙屋の家と少しも変らず軒の低い古
 ぼけた住居で、あるじは毎朝早く家の前の道路を掃除して馬糞ばふんや
 紐ひもや板切れを拾い集めてむだには捨てず、世には何染なにぞめ、何縞なにじま
 がはやろうと着物は無地の手織木綿一つと定め、元日にも智入むこいり
 の時に仕立てた麻袴あさばかまを五十年このかた着用して礼廻れいまわりに歩
 き、夏にはふんどし一つの姿で浴衣ゆかたを大事そうに首に巻いて近所
 へもらい風呂ふろに出かけ、初生はつなりの茄子なす一つは二文もん、二つは三文と
 近在の百姓が売りに来れば、初物はつもの食つて七十五日の永生きと皆
 々三文出して二つ買うのを、あるじの分別はさすがに非凡で、二

文を出して一つ買い、これを食べて七十五日の永生きを願つて、あとの一文にて、茄子の出盛りを待ちもつと大きいのをたくさん買いましようという抜け目のない算用、金銀は殖えるばかりで、まさに、それこそ「暗闇くらやみに鬼」の如き根強き身代しんだい、きらいなものは酒色の二つ、「下戸げこならぬこそ」とか「色好まざらむ男は」とか書き残した法師を憎む事しきりにて、おのれ、いま生きていたら、訴訟をしても、ただは置かぬ、と十三歳の息子の読みかけの徒然草つれづれぐさを取り上げてばり破り、捨てずに紙の皺しわをのぼして細長く切り、紙小縫かみこよりを作つて五十組の羽織紐を素早く器用に編んで引出しに仕舞い、これは一家の者以後十年間の普段の羽織紐、息子の名は吉太郎というが、かねてその色白くなよよした

からだつきが氣にくわず、十四歳の時、やわらかい鼻紙ふところを懷に入
れているのを見て、末の見込み無しと即座かんだうに勘当を言い渡し、
播州ばんしゅうには那波屋殿なばやという儉約の大長者がいるから、よそなが
らそれを見ならつて性根をかえよ、と一滴の涙もなく憎々しく言
い切つて、播州の網干あほしというところにいるその子の乳母の家に追
い遣りや、その後、あるじの妹の一子を家にいれて二十五、六まで
手代てだい同様にしてこき使い、ひそかにその働き振りを見るに、その
仕末のよろしき事、すりきれた草履ぞうりの藁わらは、畑のこやしになると
て手許てもとにたくわえ、ついでの人にたのんで田舎の親元へ送つてや
る程の珍らしい心掛けの若者であつたから、大いに氣にいり、こ
れを養子にして家を渡し、さて、嫁はどんなのがいいかと聞かれ

て、その養子の答えるには、嫁をもらつても、私だとして木石で
はなし、三十四十になつてからふつと浮氣うわきをするかも知れない、
いや、人間その方面の事はわからぬものです、その時、女房にようぼう
が亭主ていしゅに氣弱く負けていたら、この道樂はやめがたい、私はそ
んな時の用心に、氣違ひみたいなやきもち焼きの女房をもらつて
置きたい、亭主が浮氣をしたら出刃でばうちよう庖丁でも振りまわすくらい
の格氣りんきの強い女房ならば、私の生涯しょうがいも安全、この万屋の財産
も万歳だろうと思ひます、という事だったので、あるじは膝ひざを打
ち眼めを細くして喜び、早速四方に手をまわして、その父親が九十
の祖母とすこし長話をして、いやらし、やめよ、と顔色を変え
眼を吊り上げ立ちはだかつてわめき散らすという願つたり叶かなつた

りの十六のへんな娘を見つけて、これを養子の嫁に迎え、自分ら夫婦は隠居して、家の金銀のこらず養子に心置きなくゆずり渡した。この養子、世に珍らしく仕末の生れつきながら、量り知られぬおびただしき金銀をにわかにながものにして、さすがに上氣し、四十はおろか三十にもならぬうちに、つき合いと称して少し茶屋酒をたしなみ、がらにもなく髪を撫なでつけ、足袋、草履など吟味しはじめたので、女房たちまち顔色を変え眼を吊り上げ、向う三軒両隣りの家の障子が破れるほどの大声を挙げ、

「あれあれ、いやらし。男のくせに、そんなちぢれ髪に油なんか附つけて、鏡を覗のぞき込んで、きゅつと口をひきしめたり、につこり笑ったり、いやいやをして見たり、馬鹿ばかげたひとり芝居をして、

いったいそれは何の稽古けいこのつもりです、どだいあなたは正氣ですか、わかつていますよ、あさましい。あたしの田舎の父は、男というものは野良姿のらすがたのままで、手足の爪つめの先には泥どろをつめて、眼め脂やにも拭ふかず肥桶こえおけをかついでお茶屋へ遊びに行くのが自慢だ、それが出来ない男は、みんな茶屋女の男めかけになりたくて行くやつだ、とおっしゃっていたわよ、そんなちぢれ髪を撫でつけて、あなたはそれで茶屋の婆芸者の男めかけにでもなる気なのでしよう、わかつていますよ、けちんぼのあなたの事ですから、なるべくお金を使わず、婆芸者にでも泣きついて男めかけにしてもらつて、あわよくば向うからお小遣いをせしめてやろうという、いいえ、わかつていますよ、くやしかったら肥桶をかついでお出掛け

なさい、出来ないでしょう、なんだいそんな裏だか表だかわからないような顔をして、鏡をのぞき込んでにつこり笑ったりして、ああ、きたない、そんな事をするひまがあつたら鼻毛でも剪^つんだらどう？ 伸びていますよ、くやしかったら肥桶をかついで、」
とうるさい事、うるさい事。かねて、こんな時にこそ焼きもちを焼いてもらうために望んでめとつた女房ではあつたが、さて、実際こんな工合^{ぐあ}いに騒^{さわ}がしく愒^く気を起されてみると、あまりいい氣持のものでない。養父母の氣にいられようと思つて、愒^く氣の強い女房こそ所望でございます、などと分別顔して言い出したばかりに、これは、とんでもない事になった、と今はひそかに後悔した。ぶん殴^ぶつてやろうかとも思うのだが、隠居座敷の老夫婦は、嫁の

愀もや氣がはじまるともう嬉うれしくてたまらないらしく、老夫婦とも母屋はまで這い出して来て、うふふと笑いながら、まあまあ、などといい加減な仲裁をして、そうして惚ほれ惚ぼれと嫁の顔を眺ながめる仕末なので、ぶん殴るわけにもいかず、さりとて、肥桶をかついで遊びに出掛けるのも馬鹿々々しく思われ、腹いせに銭湯に出かけて、眼まいがするほど永く湯槽ゆふねにひたつて、よろめいて出て、世の中にお湯銭くらい安いものはない、今夜あそびに出掛けたら、どうしたって一両失う、お湯に酔うのも茶屋酒に酔うのも結局は同じ事さ、とわけのわからぬ負け惜しみの屁理窟へりくつをつけて瘦我慢やせがまんの胸をさすり、家へ帰つて一合の晩酌ばんしやくを女房の顔を見ないようにしてうつむいて飲み、どうにも面白おもしろくないので、やけくそに

大めしをくらつて、ごろりと寝ころび、出入りの植木屋の太吉たきちじ爺いを呼んで、美作の国の七不思議を語らせ、それはもう五十ぺんも聞いているので、腕まくらしてきよろきよると天井板を眺めて別の事を考え、不意に思いついたように小間使いを呼んで足をもませ、女房の顔を見ると、むらむらつとして来て、おい、茶を持つて来い、とつつけんどんに言いつけ、女房に茶碗ちやわんをささげ持たせたまま、自分はやはり寝ながら頭を少しもたげ、手も出さずにごくごく飲んで、熱い、とこごとを言い、八つ当りしても、大將が夜遊びさえしななければ家の中は丸くおさまり、隠居はくすくす笑いながら宵よいから楽寝、召使いの者たちも、將軍内にいらつしやるとて緊張して、ちよつと叔母のところへと怪しい外出をす

る丁稚でっちもなく、裏の井戸端いどばたで誰を待つやらうろろする女中もない。番頭は帳場で神妙を装い、やたらに大福帳をめぐつて意味も無く算盤そろばんをぱちぱちやつて、はじめは出鱈目でたらめでも、そのうちに少しの不審を見つけ、本気になつて勘定をし直し、長松は傍そばに行儀よく坐すわつてあくびを噛かみ殺しながら反古紙ほごがみの皺をのぼし、手習帳をつくつて、どうにも眠くてかなわなくなれば、急ぎ読本とくほんを取出し、奥に聞えよがしの大声で、徳は孤ならず必ず隣あり、と読み上げ、下男しもやうの九助は、破れた菰こもをほどいて銭差ぜにさしを緬なえば、下女のお竹は、いまのうちに朝のおみおつけの実でも、と重い尻しりをよいしょとあげ、穴倉へはいつて青菜を捜し、お針のお六は行あ燈んどんの陰で背中を丸くしてほどもきに余念がなさそうな振りを

して、猫^{ねこ}さえ油断なく眼を光らせ、台所にかたりと幽^{かす}かな音がしても、にやあと鳴き、いよいよ財産は殖えるばかりで、この家安泰無事長久の有様ではあったが、若大将ひとり怏^{おうおう}々として樂しまず、女房の毎夜の寝物語は味噌漬^{みそづけ}がどうしたの塩^{しお}鮭^{ざけ}の骨がどうしたのと呆^{あき}れるほど興覚めな事だけで、せつかくお金^{うな}が唸るほどありながら愀^{さう}氣の女房をもらったばかりに眼まいするほど長湯して、そうして味噌漬の話や塩鮭の話を拝聴していなければならぬ、おのれ、いまに隠居が死んだら、とけしからぬ事を考え、うわべは何気なさそうに立ち働き、内心ひそかによろしき時機をねらっていた。やがて隠居夫婦も寄る年波、紙小縵の羽織紐がまだ六本引出しの中に残ってあると言^{のこ}い遺して老父まず往生すれば、

老母はその引出しに羽織紐が四本しか無いのを氣に病み、これも程なく後を追ひ、もはやこの家に氣兼ねの者は無く、名実共に若大将の天下、まず愔氣の女房を連れて伊勢參宮、ついでに京大阪を廻り、都のしやれた風俗を見せ、野暮な女房を持ったばかりに亭主は人殺しをして牢へはいるという筋の芝居を見せて、女房の愔氣のつつしむべき所以ゆえんを無言の裡うちに教訓し、都のはやりの派手な着物や帶をどつさり買つてやったら女房は、女心のあさましく、国へ歸つてからも都の人に負けじと美しく装い茶の湯、活いけばな花など神妙らしく稽古けいこして、寝物語に米味噌の事を言い出すのは野暮とたしなみ、肥桶こをかついで茶屋遊びする人は無いものだといふ事もわかり、殊ことにも愔氣はあさましいものと深く恥じ、

「あたしだって、悋氣をいい事だとは思っていなかったのですけれど、お父さんやお母さんがお喜びになるので、ついあんな大声を挙げてゐるかったわね。」と言葉までさばけた口調になって、

「浮気は男の働きと言いますものねえ。」

「そうとも、そうとも。」男はここぞと強く相^{あいづち}槌を打ち、「そ

れについて、」ともつともらしい顔つきになり、「このごろ、ど

うも、養父養母が続いて死に、わしも、何だか心細くて、からだ

工合いに変になった。俗に三十は男の厄^{やくどし}年というからね、」そ

んな厄年は無い。「ひとつ、上^{かみがた}方へのぼって、ゆっくり気保養

でもして来ようと思うよ。」とんでもない「それについて」である。

「あいあい、」と女房は春風^{しゅんぷう}駘^{たい}蕩^{とう}たる面持^{おももち}で、「一年でも二年でも、ゆつくり御養生しておいでなさい。まだお若いのですものねえ。いまから分別顔して、けちくさく暮していたら、永生き出来ませんよ。男のかたは、五十くらいから、けちになるといいですよ。三十のけちんぼうは、早すぎます。見つともないわ。そんなのは、芝居では悪役ですよ。若い時には思い切り派手に遊んだほうがいいの。あたしも遊ぶつもりよ。かまわないでしょう？」と過激な事まで口走る。

亭主はいよいよ浮かれて、

「いいとも、いいとも。わしたちが、いくら遊んだって、ぐらつく財産じゃない。蔵の金銀にも、すこし日のめを見せてやらなく

ちや可哀想だ。かわいそう。それでは、お言葉に甘えて一年ばかり、京大阪

で気保養をして来ますからね。留守中は、せいぜい朝寝でもして、おいしいものを食べていなさい。上方のはやりの着物や帯を、どんどん送つてよこしますからね。」といやに優しい言葉遣いをして腹に一物いちもつ、あたふたと上方へのぼる。

留守中は女房、昼頃起きて近所のおかみたちを集めてわいわい騒ぎ、ごちそうを山ほど振舞つておかみたちの見え透いたお世辞に酔い、毎日着物を下着から全部取かえて着て、立つてくにやりとからだを曲げて一座の称しょうさん讃を浴びれば、番頭はどさくさまぎれに、おのれの妻子の宅にせつせと主人の金を持ち運び、長松は朝から晩まで台所をうろつき、戸棚とだなに首を突込んでつまみ食い、

九助は納屋なやにとじこもつて濁酒を飲んで眼をどろんとさせて何や

らお念仏に似た唄を口ずさみ、お竹は、鏡に向つて両肌もろはだを脱ぎ

すもうと角力取りが狐きつね拳けんでもしているような恰好かつこうでやつさもつさお

しろいをぬたくつて、化物のようになり、われとわが顔にあいそ

をつかしてめそめそ泣き出し、お針のお六は、奥方の古着を自分

の行李こうりにつめ込んで、ぎよろりとあたりを見廻し、きせるを取り

出して煙草たばこを吸い、立膝たてひざになつてぶつと鼻から強く二本の煙を

噴出させ、懐ふところ手てして裏口から出て、それつきり夜おそくまで

帰らず、猫ねこは鼠ねずみを取る事をたいぎがつて、寝たまま炉傍ろばたに糞をた

れ、家は蜘蛛くもの巣だらけ庭は草蓬ぼうぼう々、以前の秩序は見る影も無

くこわされて、旦那だんなはまた、上方に於いて、はじめは田舎者らし

くおっかなびつくり茶屋にあがつて、けちくさい遊びをたのしんでいたが、お世辞を言うために生れて来た茶屋の者たちに取りまかれて、ほんに旦那のようなお客ばかりだと私たちの商売ほど楽なものとはございません、男振りがようて若うて静かで優しくて思やりがあつて上品で、口数が少くて鷹揚おうようで喧嘩けんかが強そうでしたのもしくはお召物が粹いきで、何でもよくお氣がついて、はたらきがありそうで、その上、おほほほ、お金があつてあつさりして、と残りくまなくほめられて流石さすがに思慮分別を失い、天下のお大尽だいじんとは私の事かも知れないと思ひ込み、次第に大胆になつて豪遊を試み、金というものは使うためにあるものだ、使つてしまえ、と観念して、ばらりばらりと金を投げ捨て、さらにまた国元から莫ばくだ

大の金銀を取寄せ、こうなると遊びは氣保養にも何もならず、

都の粋客に負けたくないという苦しい意地だけになつて、眼つきは変り、顔も青く瘦やせて、いたたまらぬ思いで、ただ金を使い、

一年経たぬうちに、底知れぬ財力も枯こ渴かつして、国元からの使いが、

もはやこれだけと旦那の耳元に囁ささやけば、旦那は愕がく然ぜんとして、ま

だ百分の一も使わぬ筈はずだが、あああ、小判には羽が生えているの

か、無くなる時には早いものだ、ようし、これからが、わしの働

きの見せどころだ、養父からゆずられた財産で威張っているなん

て卑怯ひきような事だ、男はやっぱり裸一貫からたたき上げなければい

けないものだ、無くなつてかえつて氣がせいせいしたわい、など

と負け惜しみを言つて、空虚な笑声を発し、さあ今晚は飲みおさ

めと異様にはしやいで見せたが、廓くるわの者たちは不人情、しんとなつて、そのうちに一人立ち二人立ち、座敷の蠟燭ろうそくを消して行く者もあり、あたりが急に暗くなつて心細くなり、酒だ酒だ、と叫んで手をたたいても誰も来ず、やがて婆が廊下に立つたままで、きようはお役人のお見廻りの日ですからお静かに、と他人にものを言うようなあらたまつた口調で言い、旦那は呆あきれて、さすがは都だ、薄情すぎて、むしろ小気味がいい、見事だ、と婆をほめて立ち上り、もとよりこの男もただものでない、あの万屋よろずやのけちな大旦那に見込まれたほどの男である、なあに、金なんてものはその気にさえなれあ、いくらでも、もうけられるものだ、これから国元へ帰つて身を粉こにして働き以前にまさる大財産をこしらえ、

再び都へ来て、きょうの不人情のあだを打って見せる、婆、その時まで死なずに待つて居れ、と心の内で棄台詞すてぜりふを残して、足音荒く馴染なじみの茶屋から引上げた。

男は国へ帰ってまず番頭を呼び、お金がもうこの家に無いというけれども、それは間違い、必ずそのような軽はずみの事を言つてはならぬ、暗闇くらやみに鬼と言われた万屋の財産が、一年か二年でぐらつく事はない、お前は何も知らぬ、きょうから、わしが帳場に坐る、まあ、見ているがよい、と言つて、ただちに店のつくりを改造して両替屋を営み、何もかも自分ひとりで夜も眠らず奔走すれば、さすがに万屋の信用は世間に重く、いまは一文無しとも知らず安心してここに金銀をあずける者が多く、あずかった金銀

は右から左へ流用して、四方八方に手をまわし、内証を見すかされる事なく次第に大きい取引きをはじめて、三年後には、表むきだけではあるがとにかく、むかしの万屋の身代と変らぬくらいの勢いを取りもどし、来年こそは上方へのぼって、あの不人情の廓の者たちを思うさま恥ずかしめて無念をはらしてやりたいといさみ立って、その年の暮、取引きの支払いを首尾よく全部すませて、あとには一文の金も残らぬが、ここがかしこい商人の腕さ、商人は表向きの信用が第一、右から左と埒うちをあけて、内蔵はからっぽでも、この年の瀬さえしつぽを出さずに、やりくりをすませば、また来年から金銀のあずけ入れが呼ばなくつてもさきを争って殺到します、長者とはこんなやりくりの上手な男の事です、と女房

と番頭を前にして得意満面で言つて、正月の飾り物を一つ三文で売りに来れば、そんな安い飾り物は小店に売りに行くものだよ、家を間違つたか、と大笑いして追い歸して、三文はおろか、わが家には現金一文も無いのをいまさらの如く思い知つて内心ぞつとして、早く除夜の鐘が、と待つ間ほどなく、ごうん、と除夜の鐘、万金の重みで鳴り響き、思わずにつこりえびす顔になり、さあ、これでよし、女房、来年はまた上方へ連れて行くぞ、この二、三年、お前にも肩身の狭い思いをさせたが、どうだい、男の働きを見たか、惚^ほれ直せ、下戸^{げこ}の建てたる蔵は無いと唄にもあるが、ま、心祝いに一ぱいやろうか、と除夜の鐘を聞きながら、ほつとして女房に酒の支度を言いつけた時、

「ごめん。」と門に人の声。

眼のするどい痩せこけた浪人が、ずかずかはいって来て、あるじに向い、

「さいぜん、そなたの店から受け取ったお金の中に一粒、鷹にせの銀貨がまじっていた。取かえていただきたい。」と小粒銀一つ投げ出す。

「は。」と言って立ち上ったが、銀一粒どころか、一文だつて無い。「それはどうも相すみませんでした、もう店をしまいましたから、来年にしていただけませんか。」と明るく微笑ほほえんで何気なさそうに言う。

「いや、待つ事は出来ぬ。まだ除夜の鐘のさいちゆうだ。拙者も、

この金でことしの支払いをしなければならぬ。借金取りが表に待っている。」

「困りましたなあ。もう店をしまつて、お金はみな蔵の中に。」

「ふざけるな！」と浪人は大声を挙げて、「百両千両のかねではない。たかが銀一粒だ。これほどの家で、手許に銀一粒の替かえが無

いなど冗談を言つてはいけない。おや、その顔つきは、どうした。

無いのか。本当に無いのか。何も無いのか。」と近隣に響きわた

るほどの高声でわめけば、店の表に待っている借金取りは、はて

な？　といぶかり、両隣りの左官屋、炭屋も、耳をすまし、悪事

千里、たちまち人々の囁きは四方にひろがり、人の運不運は知れぬもの、除夜の鐘を聞きながら身代あらわれ、せつかくの三年の

苦心も水の泡^{あわ}、さすがの智者も矢弾^{やだま}つづかず、わずか銀一粒で大長者の万屋ぐわらりと破産。

（日本永代蔵、巻五の五、三匁五分曙^{あけぼの}のかね）

裸川

鎌倉山かまくらやまの秋の夕ぐれをいそぎ、青砥左衛門尉藤綱、駒を
 あゆませて滑川なめりがわを渡り、川の真中に於おいて、いささか用の事
 ありて腰の火打袋を取出し、袋の口をあけた途端に袋の中の銭十
 文もんばかり、ちやぼりと川浪かわなみにこぼれ落ちた。青砥、はつと顔色
 を変え、駒をとどめて猫背ねこぜになり、川底までも射透さんと稲妻いなずま
 の如ごとく眼めを光らせて川の面を凝視ぎようししたが、潺湲せんかんたる清流は夕
 陽うひを受けて照りかがやき、瞬時も休むことなく動き騒ぎ躍り、と
 ても川底まで見透す事は出来なかった。青砥左衛門尉藤綱は、馬

上に於いて身悶みもだえした。川を渡る時には、いかなる用があろうとも火打袋の口をあけてはならぬと子々孫々に伝えて家憲にしようと思つた。どうにも諦め切れぬのである。いつたい、何文落したのだろう。けさ家を出る時に、いつものとおり小錢四十文、二度くりかえして数えてたしかめ、この火打袋に入れて、それから役所で三文使つた。それゆえ、いまこの火打袋には三十七文残つていなければならぬ筈はずだが、こぼれ落ちたのは十文くらいであろうか。とにかく、火打袋の中の残金を調べてみるとわかるのだが、川の真中で錢の勘定は禁物である。向う岸に渡つてから、調べてみる事にしよう。青砥は惨めみじにしよげかえり、深い溜息ためいきをつき、うなだれて駒をすすめた。岸に着いて馬より降り、河原の上に大

あぐらをかき、火打袋の口を明けて、ざらざらと残金を膝ひざの間に
ぶちまけ、背中を丸くして、ひいふうみい、と小声で言つて数え
はじめた。二十六文残っていた。うむ、さすれば川へ落したのは、
十一文にきわまつた、惜しい、いかにも、惜しい、十一文といえ
ども国土の重宝、もしもこのまま捨て置かば、かの十一文はいた
ずらに川底に朽ちるばかりだ、もったいなし、おそるべし、とて
もこのままここを立ち去るわけにはいかぬいかぬ、たとえ地を裂
き、地軸を破り、りゆうぐう竜宮までも是非にたずねて取返さん、とひ
どい決意を固めてしまった。

けれども青砥は、決して卑いやしい守銭奴しゆせんどではない。質素儉約、
清せい廉れん潔白の官吏である。一いち汁じゅう一いっ菜さい、しかも、日に三度な

どは食べない。一日に一度たべるだけである。それでもからだは丈夫である。衣服は着たきりの一枚。着物のよごれが見えぬように、濃茶の色に染めさせている。真黒い着物は、かえって、よごれが目立つものだそうである。濃茶の色の、何だかひどく厚ぼつたい布地の着物だ。一生その着物いちまいで過した。刀の鞘さやには漆を塗らぬ。墨をまだらに塗つてある。主人の北条時頼ほうじょうときよりも、見るに見かねて、

「おい、青砥。少し給料をましてやろうか。お前の給料をもっとよくするようにと夢のお告げがありました。」と言ったら、青砥はふくれて、

「夢のお告げなんて、あてになるものじゃありません。そのうち

に、藤綱の首を斬れきというお告げがあつたら、あなたはとうしま
す。きつと私を斬る氣でしょう。」と妙な理窟りくつを言つて、加俸かほうを
断つた。慾よくの無い人である。給料があまつたら、それを近所の貧
乏な人たちに全部わけてやつてしまふ。だから近所の貧乏人たちは、
なまけてばかりいて、鯛たいの塩焼などを食べているくらいであ
つた。決して吝りん嗇しよくな人ではないのである。国のために質素儉
約を率先躬きゆうこう行していたわけなのである。主人の時頼というひ
ともまた、その母の松下まつした禅尼ぜんにから障子の切り張りを教えられて
育つただけの事はあつて、酒のさかなは味噌みそときめているほど、
なかなか、しまつのいいひとであつたから、この主従二人は氣が
合つた。そもそもこの青砥左衛門尉藤綱を拔擢ばつてきして引付衆ひきつけしゆう

にしてやったのは、時頼である。青砥が浪々ろうろうの身で、牛を吠鳴どなり、その逸事が時頼の耳にはいり、それは面白い男だという事になつて引付衆にぬきんでられたのである。すなわち、川の中で小便をしている牛を見て青砥は怒り、

「さてさて、たわけた牛ではある。川に小便をするとは、もったいない。むだである。畑にしたなら、よい肥料になるものを。」
と地団駄踏じだんだんで叫喚きょうかんしたという。

真面目まじめな人なのである。銭十一文を川に落して竜宮までもと力むのも、無理のない事である。残りの二十六文を火打袋におさめて袋の口の紐ひもを固く結び、立ち上つて、里人をまねき、懷中より別の財布を取り出し、三両出しかけて一両ひっこめ、少し考えて、

うむと首肯うなずき、またその一兩を出して、やっぱり三兩を里人に手

渡し、この金で、早く人足十人ばかりをかり集めて来るように言

いつけ、自分は河原に馬をつなぎ、悠然ゆうぜんと威儀をとりつくろつ

て大きな岩に腰をおろした。すでに薄暮である。明日にのぼした

らどういうものか。けれども、それは出来ない事だ。捜査を明日

にのぼしたならば、今夜のうちにもあの十一文は川の水に押し流

され、所在不分明となつて国土の重宝を永遠に失うというおそろ

しい結果になるやも知れぬ。銭十一文のちりぢりにならぬうち、

一刻も早く拾い集めなければならぬ。夜を徹したつてかまわぬ。

暗い河原にひとり坐すわつて、青砥は身じろぎもしなかった。

やがて集つて来た人足どもに青砥は下知して、まず河原に火を

焚かせ、それから人足ひとりひとりに松明たいまつを持たせ冷たい水にはいらせて錢十一文の捜査をはじめさせた。松明の光に映えて秋の流れは夜の錦にしきと見え、人の足手は、しがらみとなつて瀬々を立ち切るといふ壯観であつた。それ、そこだ、いや、もつと右、いや、いや、もつと左、つつこめ、などと声をからして青砥は下知するものの、暗さは暗し、落した場所もどこであつたか青砥自身にさえ心細い有様で、たとえ地を裂き、地軸を破り、竜宮までもと青砥ひとりはずりしてあせていても、人足たちの指先には一文の錢も当らず、川風寒く皮膚を刺して、人足すべて凍え死こごなこんばかりに苦しみ、ようようあちこちから不平の呟つぶやき声こゑが起つて来た。何の因果で、このような難儀に遭うか、と水底をさぐりな

がら、めそめそ泣き出す人足まで出て来たのである。

この時、人足の中に浅田小五郎という三十四、五歳のばくち打がいた。人間、三十四、五の頃は最も自惚うぬぼれの強いものだそうであるが、それでもこの浅田は、氏育ち少しくまされるを鼻にかけ、いまは落ちぶれて人足仲間にはいつていても、傲岸ごうがん不遜ふそんにして長上をあなどり、仕事をなまけ、いささかの奇智きちを弄ろうして悪銭を得ては、若年の者どもに酒をふるまい、兄貴は気前がよいと言われて、そうでもないが、と答えてまんざらでもないような大馬鹿ばか者のひとりであつた。かれはこの時、人足たちと共に片手に松明を持ち片手で川底をさぐっているような恰好かっこうだけにはしていたが、もとより本気に捜すつもりはない。いい加減につき

合つて手間賃の分配にあずかろうとしていただけであつたのだが、青砥は岸に焚火^{たきび}して赤鬼^{べこ}の如く顔をほてらし、眼^めをむいて人足どもを監視し、それ左、それ右、とわめき散らすので、どうにも、うるさくてかなわない。ちえ、けちな野郎だ、十一文がそんなに惜しいかよ、血相かえて騒いでいやがる、貧乏役人は、これだらいやだ、銭がそんなに欲しかったら、こつちからくれてやらあ、なんだい、たかが十文か十一文、とむらむら、れの気前のよいところを見せびらかしたくなつて来て、自分の腹掛けから三文ばかりつかみ出し、

「あつた！」と叫んだ。

「なに、あつた？ 銭はあつたか。」岸では青砥が浅田の叫びを

聞いて狂喜し、「銭はあつたか。たしかに、あつたか。」と背伸びしてくどく尋ねた。

浅田は、ばかばかしい思いで、

「へえ、ございました。三文ございました。おとどけ致します。」
と言つて岸に向つて歩きかけたら、青砥は声をはげまし、

「動くな、動くな。その場を捜せ。たしかにそこだ。私はその場に落したのだ。いま思い出した。たしかにそこだ。さらに八文ある筈だ。落したものは、落した場所にあるにきまつている。それ！ 皆の者、銭は三文見つかったぞ。さらに精出して、そこな下郎ろうの周囲を捜せ。」とたいへんな騒ぎ方である。

人足たちはそろそろと浅田の身のまわりに集り、

「兄貴はやっぱり勘がいいな。何か、秘伝でもあるのかね。教えてくれよ。おれはもう凍えて死にそうだ。どうしたら、そんなにうまく捜し出せるのか。」と口々に尋ねた。

浅田はもつともらしい顔をして、

「なあに、秘伝というほどの事でもないが、問題は足の指だよ。」
「足の指？」

「そうさ。おまえたちは、手でさぐるからいけない。おれのように、ほうら、こんな工合に足の指先でさぐると見つかる。」と言いながら妙な腰つきで川底の砂利を踏みにしり、皆がその足元を見つめているすきを狙^{ねら}ってまたも自分の腹掛けから二文ばかり取り出して、

「おや？」と呟き、その錢を握った片手を水中に入れて、

「あつた！」と叫んだ。

「なに、あつたか。」と打てば響く青砥の蛮声。「錢は、あつたか。」

「へえ、ございました。二文ばかり。」と浅田は片手を高く挙げて答えた。

「動くな。動くな。その場を捜せ。それ！ 皆の者、そこな下郎は殊勝であるぞ。負けず劣らず、はげめ、つつこめ。」と体を震わせて更にはげしく下知するのである。

人足たちは皆一様に、妙な腰つきをして、川底の砂利を踏みにじった。しやがまなくてもいいのだから、ひどくからだが楽であ

る。皆は大喜びで松明片手に舞いをはじめた。岸の青砥は、げせぬ顔をして、ふざけてはいかぬと叱^{しか}つたが、そのような恰好をすれば銭が見つかるという返事だったので、浮かぬ気持で、その舞いを眺^{なが}めているより他は無^{ほか}かった。やがて浅田は、さらに三文、一文と皆の眼をごまかして、腹掛けから取り出しては、

「あつた！」

「やあ、あつた！」

と真顔で叫んで、とうとう十一文、自分ひとりで拾い集めた振りをした。

岸の青砥は喜ぶ事がぎりなく、浅田から受け取った十一文を三度も勘定し直して、うむ、たしかに十一文、と深く首肯き、火打

袋にちやりんとおさめて、にやりと笑い、

「さて、浅田とやら、このたびの働きは、見事であつたのう。そちのお蔭かげで国土の重宝はよみがえつた。さらに一両の褒美ほうびをとらせる。川に落ちた銭は、いたずらに朽ちるばかりであるが、人の手から手へ渡つた金は、いつまでも生きて世にとどまりて人のまわり持ち。」としんみり言つて、一両の褒美をつかわし、ひらりと馬に乗り、憂々かつかつと立ち去つたが、人足たちは後を見送り、馬鹿な人だと言つた。智慧ちえの浅瀬を渡る下々の心には、青砥の深慮が解げしかね、一文惜しみの百知らず、と笑いののしつたとは、いつの世も小人はあさましく、救い難がたいものである。

とにかくに、手間賃の三両、思いがけないもうけなれば、今宵こよひ

は一つこれから酒でも飲んで陽気に騒ごうではないかと、下人の意地汚なさ、青砥が儉約のいましめも忘れて、いさみ立ち、浅田はれいの気前のよいところを見せて褒美の一両をあつさりと皆に寄附したので一同いよいよのぼせ上り、生れてはじめての贅沢ぜいたくな大宴会をひらいた。

浅田は何といつても一座の花形である。兄貴のおかげで今宵の極楽、と言われて浅田、よせばよいのに、

「さればさ、あの青砥はとんだ間抜けだ。おれの腹掛けから取り出した銭とも知らないで。」と口をまげてせせら笑った。一座あつと驚き、膝ひざを打ち、さすがは兄貴の発明おそれいった、世が世ならお前は青砥の上にも立つべき器量人だ、とあさはかなお世辞

を言い、酒宴は一そう派手に物狂わしくなつて行くばかりであつたが、真面目な人はどこにでもいる。突如、宴席の片隅かたすみから、浅田の馬鹿野郎！ という怒号が起つた。小さい男が顔を蒼あおくして浅田をにらみ、

「さいぜん汝なんじの青砥をだました自慢話を聞き、胸くそが悪くなり、酒を飲む気もしくなつた。浅田、お前はひどい男だ。つねからお前の伶俐りこうぶつた馬面うまづらが癪しゃくにさわつていたのだが、これほど、ふざけた奴やつとは知らなかつた。程度があるぞ、馬鹿野郎。青砥のせつかくの高潔な志も、お前の無智な小細工で、泥棒どろぼうに追銭みたいなばからしい事になつてしまった。人をたぶらかすのは、泥棒よりもなお悪い事だ。恥かしくないか。天命のほどもおそろし

い。世の中を、そんなになめると、いまにとんでもない事になるにきまつているのだ。おれはもう、お前たちとの附合つきあいはごめんこうむる。きょうよりのちは赤の他人と思つていただきたい。おれは、これから親孝行をするんだ。笑っちゃいけねえ。おれは、こんな世の中のあさましい実相を見ると、なぜだか、ふつと親孝行をしたくなつて来るのだ。これまでも、ちよいちよいそんな事はあつたが、もうもう、きょうというきょうは、あいそが尽きた。さつぱりと足を洗つて、親孝行をするんだ。人間は、親に孝行しなければ、犬畜生と同じわけのものになるんだ。笑っちゃいけねえ。父上、母上、きょうまでの不孝の罪はゆるして下さい。」などど、議論は意外のところまで発展して、そうしてその小男は声

を放つて泣いて、泣きながら家へ帰り、翌^{あく}る朝は未明に起き^{しば}柴刈^しり縄^{なわ}ない草鞋^{わらじ}を作り両親の手助けをして、あつぱれ孝子の誉^{ほま}れを得て、時頼公に召出され、めでたく家運隆昌に向つたという、これは後の話。

さて、浅田の狡智^{こうち}にだまされた青砥左衛門尉藤綱は、その夜たいへんの御機嫌^{ごきげん}で帰宅し、女房子供を一室に集めて、きょうこの父が滑川を渡しし時、火打袋をあけた途端に銭十一文を川に落し、国土の重宝永遠に川底に朽ちなん事の口惜しさに、人足どもを集めて手間賃三両を与え、地獄の底までも捜せよと下知したところが、ひとりの発明らしき顔をした人足が、足の指先を以て川底^{もつ}をさがり、たちまち銭十一文のこらず捜し出し、この者には特に一

両の褒美をとらせた、たった十一文の錢を搜すために四両の金を使ったこの父の心底がわかるか、と莞爾かんじと笑い一座を見渡した。一座の者はもじもじして、ただあいまいに首肯した。

「わかるであろう。」と青砥は得意満面、「川底に朽ちたる錢は国のまる損。人の手に渡りし金は、世のまわり持ち。」とさつき河原で人足どもに言い聞かせた教訓を、再びいい氣持で繰り返して説いた。

「お父さま、」と慚りはつ癢はつ癢はつそんな八つの娘が、眼をぱちくりさせて尋ねた。「落したお金が十一文だという事がどうしてわかりました。」

「おお、その事か。お律は、ませた子だの。よい事をたずねる。」

父は毎朝小錢を四十文ずつ火打袋にいれてお役所に行くのです。きようはお役所で三文使い、火打袋には三十七文残っていないければならぬ筈のところ、二十六文しか残っていませんでしたから、それ、落したのは、いくらになるであろうか。」

「でも、お父さまは、けさ、お役所へいらつしやる途中、お寺の前であたしと逢い、非人に施せといつて二文あたしに下さいました。」

「うん、そうであつた。忘れていた。」

青砥は愕然がくぜんとした。落した錢は九文でなければならぬ筈であつた。九文落して、十一文川底から出て来るとは、奇怪である。青砥だって馬鹿ではない。ひよつとしたら、これはあの浅田とや

らいうのつぱりした顔の人足が、何かたくらんだのかも知れぬ、と感附いた。考えてみると、手でさぐるよりも足でさぐったほうが早く見つかるなどというのもふざけた話だ。とにかく明朝、あの浅田とやらいう人足を役所に呼び出し、きびしく糺きゆうめい明してやろうと、頗る面白くない気持でその夜は寝た。

詐術さじゆつはかならず露顕するもののである。さすがの浅田も

九文落したのに十一文拾った事に就いて、どうにも弁明の仕様が無かった。青砥は烈火の如く怒り、お上をいつわる不屈者め、八つ裂きにも致したいところなれども、川に落した九文の銭の行末も気がかりゆえ、まずあれをお前ひとりで十年でも二十年でも一生かかって捜し出せ、ふたたびあさはかな猿智慧さるぢえを用い、腹掛け

などから銭を取出す事のないように、丸裸になつて捜し出せ、銭九文のこらず捜し出すまでは雨の日も風の日も一日も休む事なく河原におもむき、下役人の監視のもとに川床を残りくまなく掘り返せ、と万雷一時に落ちるが如き大声で言い渡した。真面目な人が怒ると、こわいものである。

その日から浅田は、下役人の嚴重な監視のもとに丸裸となつて川を捜した。十日目に一文、二十日経つて一文、川の柳の葉は一枚残らず散り落ち、川の水は枯れて蕭々たる冬の河原となり、浅田は黙々として鍬くわをふるつて砂利を掘り起し、出て来るものは銭にはあらで、割れ鍋なべ、古釘ふるくぎ、欠け茶碗かちやわん、それら廃品がむなしく河原に山と積まれ、心得顔した婆がよちよち河原へ降りて来て、

わしはいつぞやこの辺に、かんざしを一つ落したが、それはまだ出て来ませんか、と監視の下役人に尋ね、いつごろ落したのだと聞かれて、はつきりしませんが、わしがお嫁入りして間もなくの事だったから、六、七十年にもなりましょうか、と言って役人に叱られ、滑川もいつしか人に裸川と呼ばれて鎌倉名物の一つに数え上げられるようになった頃、すなわち九十七日目に、川筋三百間、鍬打ち込まぬ方寸の土も無くもの見事に掘り返し、やっと錢九文を拾い集めて青砥と再び対面した。

「下郎、思い知ったか。」

と言われて浅田は、おそるるところなく、こうべを挙げて、

「せんだって、あなたに差し上げた錢十一文は、私の腹掛けから

取り出したものでございますから、あれは私に返して下さい。」
と言ったとやら、ひかれ者の小唄こうたとはこれであろうかと、のちの
ち人の笑い話の種になった。

（武家義理物語、巻一の一、我が物ゆゑに裸川）

義理

義理のために死を致す事、これ弓馬の家のならい、むかし撰せつし州伊丹ゆういたみに神崎式部という筋目正しき武士がいた。伊丹の城主、荒木村重あらきむらしげにつかえて横目役を勤め、年久しく主家を泰山の安きに置いた。主家の御次男、村丸という若殿、御総領の重丸のよろず大人びて気立やさしきに似ず、まことに手にあまる腕白者にて、神崎はじめ重臣一同の苦勞の種であつたが、城主荒木は、優雅な御総領よりも、かえつてこの乱暴者の御次男を鼯ひいき負してその我儘わがままを笑つてお許しになるので、いよいよ増長し、ついに或ある時、

えぞ
蝦夷とはどのような国か、その風景をひとめ見たい、と途方もな

い事を言い出し、家来たちがなだめると尚更なおさら、図に乗つて駄々だだ

をこね、蝦夷を見ぬうちはめしを食わぬと言つてお膳ぜんを蹴飛けとばす

仕末であつた。かねて村丸鼯鼠の城主荒木は、このたびもまた笑

つて、よろしい、蝦夷一覽もよからう、行つておいで、若い頃の

長旅は一生の薬、と言つて事もなげにその我儘の願いを聞き容れ

てやった。御供は神崎式部はじめ、家中粒選かちゆうつぶよりの武士三十人。

そのお供の人数の中に、二人の少年が、御次男のお話相手とし

て差加えられていた。一人は神崎勝太郎とて十五歳、式部の秘蔵

のひとり息子で容貌ようぼう華麗、立居振舞い神妙あつぱの天晴れ父の名を恥

かしめぬ秀才の若武者、いまひとり式部の同役森岡丹後の三人

の男の子の中の末子丹三郎とて十六歳、勝太郎に較くらべて何から何
まで見劣りして色は白いが眼尻めじりは垂れ下り、唇厚くちびるく真赤で猪八ちよはつ
戒かいに似ているくせになかなかのおしやれで、額の面皰にきびを気にし
て毎朝ひそかに軽石でこすり、それがために額は紫色に異様にて
かてか光っている。でつぷりと太つて大きく、一挙手一投足のろ
くさく、武芸はきらい、色情はさかん、いぎたなく横坐よこざわりに坐
つて、何を思い出しているのか時々、にやりと笑つたりして、い
やらしいつたら無い子であつた。けれどもこの子は、どういふも
のか若殿村丸のお氣にいりで、蛸たこよ蛸よと呼ばれて、いつもお傍そば
ちかく侍はべつて若殿にけしからぬ事を御指南申したりして、若殿と
共にげらげら下品に笑い合つていのである。もとより式部はこ

の丹三郎を好かなかった。このたびの蝦夷見物のお供にもこの子を加えたく無かったのだが、自分の一子勝太郎が城主の言いつけでお供の一人に差加えられているし、同役の森岡丹後の子を無下にしりぞける事は出来なかった。同役への義理である。森岡丹後も親の慾目よくめから末子の丹三郎をそれほど劣った子とは思っていないらしく、

「神崎どの、このたびは運悪く私が留守番にまわりましたが、私のかわりに末子の丹三郎が仕合せとお供の端に加えられましたから、まあ、あれの土産話でも、たのしみにして待っている事に致しましょう。それにつけてもあれも初旅、なりばかり大きくてもまだほんの子供ゆえ、諸事よろしくたのみますぞ。」と親の真情、

びたりと畳に両手をついてお辞儀をしたのだ。いや、あの子はど
 うも、とは言われない。その上、若殿から蛸もぜひとの内命があ
 ったのだから、どうしても蛸をお供の人数に差加えないわけには
 ゆかぬ。しづしづ丹三郎を連れて国元を出発したが、京を過ぎて
 東路あずまじをくだり、草津くさつの宿しゆくに着いた頃には、そろそろ丹三郎、皆
 の足手まといになっていた。だいいち、ひどく朝寝坊だ。若殿と
 二人で夜おそくまで、宿の女中にたわむれて賭事かけごとやら狐拳きつねけん
 やら双六すうろくやら、いやらしく忍び笑いして打興じて、式部は流石さすが
 に見るに見兼ね、

「あすは早朝の出発ゆえ、もはや、おやすみなさるよう。」と思
 い切つて隣室から強く言つても、若殿は平気で、

「遊山ゆさんの旅だ。かまわぬ。のう、蛸め。」

「はあ。」と蛸は答えて、にやにや笑っている。そうして、翌朝、蛸は若殿よりもおそく起きる。この丹三郎ひとりの朝寝坊のために、一行の宿からの出発が、いつもおくれる。若殿は、のんきに「捨て置け。あとから追いつく。」と言い、蛸ひとりを宿に置いてさつさと発足しようとなさるが、神崎式部は丹三郎の親の丹後から、あの子をよろしくと、一言たのまれているのだ。捨て置いて発足するわけには行かぬ。わが子の勝太郎に言いつけて、丹三郎を起させる。勝太郎は丹三郎よりも一つ年下である。それゆえすこし遠慮の言葉使いで丹三郎を起す。

「もし、もし。御出発でございます。」

「へえ？　ばかに早いな。」

「若殿も、とうにお仕度がお出来になりました。」

「若殿は、あれから、ぐっすりお休みになられたらしいからな。

おれは、あれから、いろいろな事を考えて、なかなか眠られなかった。それに、お前の親爺おやじのいびきがうるさくてな。」

「おそれいます。」

「忠義もつらいよ。おれだって、毎夜、若殿の遊び相手をやらされて、へとへとなんだよ。」

「お察し申して居おります。」

「うん、まったくやり切れないんだ。たまには、お前が代ってくれてもよさそうなものだ。」

「は、お相手を申したく心掛けて居りますが、私は狐拳など出来ませんので。」

「お前たちは野暮だからな。固いばかりが忠義じゃない。狐拳くらい覚えて置けよ。」

「はあ、」と気弱く笑って、「それにしても、もう皆様が御出発でございますから。」

「何が、それにしても、だ。お前たちは、おれを馬鹿にしているんだ。ゆうべも、その事を考えて、くやしくて眠れなかったんだ。おれも親爺と一緒に来ればよかった。親から離れて旅に出ると、どんなに皆に気がねをしなけりやならぬものか、お前にはわかりまい。おれは国元を出発してこのかた、肩身のせまい思いばかり

している。人間って薄情なものだ。親の眼のとどこかないところで
は、どんなにでもその子を邪険に扱うんだからな。いや、お前た
ちの事を言っているんじゃない。お前たち親子は立派なものさ。
立派すぎて、おつりが来らあ。このたびの蝦夷見物がすんだなら、
おれはお前たち親子の事を逐一、国元の殿様と親爺にお知らせす
るつもりだ。おれには、なんでもわかつているんだ。お前の親爺
は、ずいぶんお前を可愛^{かわい}がっているらしいじゃないか。隠さなく
たつていい。ゆうべこの宿に着いた時、お前の親爺は、これ勝太
郎、足の豆には焼^{しょう}耐^{ちゅう}でも吹いて置け、と言ったのをおれは聞
いたぞ。おれには、あんな事は言わない。皆の见ている前では、
いやにおれに親切にしてみせるが、ヘン、おれにはちゃんとわか

っているんだ。実の親子の情は、さすがに争われないものだ。焼酎でも吹いて置け、か。あとでその残りの焼酎を、親子二人で仲良く飲み合つたろう、どうだ。おれには一滴も酒を飲ませないばかりか、狐拳さえやめさせようとしやがるんだから面白くないよ。ゆうべは、つくづく考えた。ごめんこうむつておれはもう少し寝るよ。」

襖越ふすまごしに神崎式部はこれを聞いていた。よつぽどこのまま捨て置いて発足しようかと思つた。本当に、うっちゃつて行つたほうがよかつたのだ。そうすれば、のちのさまざまの不幸が起らずにすんだのかも知れない。けれども、式部は義理を重んずる武士であつた。諸事よろしくたのむ、とぴたりと畳に両手について頼

んだ丹後の声が、姿が、忘れられぬ。式部はその日も黙って、丹三郎の起床を待った。

丹三郎の不仕鱈ふしだらには限りが無かった。草津、水口みなくち、土山つちやまを過ぎ、鈴鹿峠すずかとうげにさしかかった時には、もう歩けぬとわめき出した。

もともとから乗馬は不得手で、さりとしてその自分の不得手を人に見破くやされるのも口惜しく無理して馬に乗ってはみたが、どうにもお尻しりが痛くてたまらなくなつて、やっぱり旅は徒歩に限る、どうせ気散じの遊山旅だ、馬上の旅は固苦しい、野暮である、と言つて自分だけでは体裁が悪いので勝太郎にも徒歩をすすめて馬を捨てさせ、共に若殿の駕籠かごの左右に附添つてここまで歩いて来たのだが、峠にさしかかつて急に、こんどは徒歩も野暮だと言いはじ

めた。

「こうして、てくてく歩いているのも気のきかない話じゃないか。
。」 蛸は駕籠に乗って峠を越したかったのである。

「やっぱり、馬のほうがいいでしょうか。」 勝太郎には、どっちだつてかまわない。

「なに、馬？」 馬は閉口だ。とんでもない。「馬も悪くはないが、しかし、まあ一長一短というところだろうな。」 あいまいに誤魔^{ごま}化した。

「本当に、」と勝太郎は素直に首肯^{うなず}いて、「人間も鳥のように空を飛ぶ事が出来たらいいと思う事がありますね。」

「馬鹿な事を言っている。」 丹三郎はせせら笑い、「空を飛ぶ必

要はないが、「駕籠に乗りたいのだ。けれどもそれをあからさまに言う事は流石に少しはばかられた。「空を飛ぶ必要はないが、」とまた繰返して言い、「眠りながら歩く、という事は出来ないものかね。」と遠廻しに謎をかけた。

「それは、むずかしいでしょうね。」勝太郎には、丹三郎の底意がわからぬ。無邪気に答える。「馬の上なら、眠りながら歩くという事も出来ますけれど。」

「うん、あれは。」あれは、あぶない。蛸には、馬上で眠るなんて芸当は出来ない。眠ったら最後、落馬だ。「あれは、また、野暮なものだ。眼が覚めて、ここはどこか、と聞いても、馬は答えてくれないからね。」駕籠だと、駕籠かきが、へえ、もうそろそ

ろ桑名です、と答えてくれる。ああ、駕籠に乗りたい。

「うまい事をおっしゃる。」勝太郎には、蛸の謎が通じない。ただ無心に笑っている。

丹三郎はいまいましげに勝太郎を横目で睨^{にら}んで、

「お前もまた、野暮な男だ。思いやりというものがない。」とあらたまつた口調で言つた。

「はあ？」と勝太郎はきよんとしている。

「見ればわかるじゃないか。おれはもう、歩けなくなっているのだ。おれはこんなに太っているから股^{また}ずれが出来て、人に知られぬ苦勞をして歩いているのだ。見れば、わかりそうなものだ。」
と言つて急に顔を苦しげにしかめ片足をひきずつて歩きはじめた。

「肩を貸してやれ。」とお駕籠の後に扈從こじゆうしていた神崎式部は、その時、苦笑して勝太郎に言いつけた。

「はい。」と言つて勝太郎は、丹三郎の傍に走り寄り、蛸の右手を執とつたら、蛸は怒つて、

「ごめんこうむる。こう見えても森岡丹後の子だ。お前のような年少の者の肩にしなだれかかつて峠を越えたという風聞がもし国元に達したならば、父や兄たちの面目が丸つぶれじゃないか。お前たち親子はぐるになつて、森岡の一家を嘲ちやうろう弄する気なのであろう。」とやけくそみたいに、わめき立てた。神崎親子は、顔色を変えた。

「式部、」と駕籠の中から若殿が呼んで、「蛸にも駕籠をやれ。」

と察しのいいところを見せた。

「は、ただいま。」と式部は平伏する。蛸は得意だ。

それから、関、かめやま亀山、よっかいち四日市、桑名、宮、岡崎、赤坂、御ご

油、吉田、蛸は大威張りで駕籠にゆられて居眠りしながら旅をつ

づけた。宿に着けば相変らず夜ふかしと朝寝である。この丹三郎

ひとりのために、国元を発足した時の旅の予定より十日ちかくも

おくれて、うづき卯月のすえ、ようようきようの旅泊りは駿河するがの国、島

田の宿と、いそぎ掛かけがわ川を立ち、さよ小夜の中山にさしかかった頃か

ら豪雨となつて途中の菊川も氾濫はんらんし濁流は橋をゆるがし道を越

え、しかも風さえ加つて松しょうらい籟いものすごく、一行の者の袖合そでがっ

羽はの裾吹すそきかえされて千切れんばかり、は這うようにして金谷かなやの

宿にたどりつき、ここにて人数をあらため一行無事なるを喜び、
 さて、これから名高い難所の大井川を越えて島田の宿に渡らなけ
 ればならぬのだが、式部は大井川の岸に立って川の気色を見渡し、
 「水かさ刻一刻とつる様子なれば、きようはこの金谷の宿に一
 泊。」とお供の者どもに言いつけた。

けれども、乱暴者の若殿には、式部のこの用心深い処置が気に
 いらなかつた。川を眺めてせせら笑い、

「なんだ、これがあの有名な大井川か。淀川よどがわの半分も無いじゃ
 ないか。国元の猪名川いながわよりも武庫川むこがわよりも小さいじゃないか。の
 う、蛸。これしきの川が渡れぬなんて、式部も耄碌もうろくしたようだ

。」

「いかにも、」と蛸は神崎親子を横目で見てにやりと笑い、「私などは国元の猪名川を幼少の頃より毎日のように馬で渡つてなれて居りますので、こんな小さい川が、たといどんなに水を増してもおそろしいとは思ひませぬが、しかし、生れつき水癲癩みずてんかんと申して、どのように弓馬の武芸に達していても、この水を見るとおそろしくぶるぶる震えるという奇病があつて、しかもこれは親から子へ遺伝するものだそうです。」

若殿は笑つて、

「奇妙な病気もあるものだ。まさか式部は、その水癲癩とやらいふ病気でもあるまいが、どうだ、蛸め、われら二人抜け駈がけてこの濁流に駒こまをすすめ、かの宇治川先陣、佐々木と梶原かじわらの如ごとく、

相競つて共に向う岸に渡つて見せたら、
臆病おくびようの式部はじめ供

の者たちも仕方なく後からついて来るだろう。なんとしてもきよ
うのうちに、この大井川を渡つて島田の宿に着かなければ、西国
武士の名折れだぞ。蛸め、つづけ。」と駒に打ち乗り、濁流めが
けて飛び込もうとするので式部もここは必死、篠しのつく雨の中を蓑
も笠かさもほうり投げて若殿の駒の轡くつわに取り縋すがり、

「おやめなさい、おやめなさい。式部かねて承るに大井川の川底
の形状変転常なく、その瀬その淵ふちの深浅は、川越しの人夫さえ踏ふ
みみたが違ちがえることしばしば有りとの事、いわんや他国のわれら、抜ばつぎ
山んの勇ありといえども、血気だけでは、この川渡ることむずか

しく、式部はきよう一日、その水癩癩とやら奇病にでも何にでも

相成りますから、どうか式部の奇病をあわれに思召して、川を越える事はあすになさつて下さい。」と涙を流して懇願した。

まことの臆病者の丹三郎は、口ではあんな偉そうな事を言つたものの、蛸め、つづけ！ と若殿に言われた時には、くらくらと眩暈がして、こりやもうどうしようと、うろうろしたが、式部が若殿をいさめてくれたので、ほつとして、真青な顔に奇妙な笑いを無理に浮べ、「ちえ、残念。」と言つた。

それがいけなかつた。その出鱈目の言葉が若殿の氣持をいつそ^{でたらめ}う^{たけ}猛り立たせた。

「蛸め。式部は卑怯だ。^{ひきよう}かまわぬ、つづけ！」と式部の手のゆるんだすきを見て駒に^{ひとむち}鞭あて、暴虎馮河^{ぼうこひようが}、ざんぶと濁流に

身をおどらせた。式部もいまはこれまでと観念し、

「それ！ 若殿につづけ。」とお供の者たちに烈しく下知した。

いずれも屈強の供の武士三十人、なんの躊躇も無くつぎつぎ

と駒を濁流に乗り入れ、大浪をわけて若殿のあとを追った。

岸には、丹三郎と跡見役の式部親子とが残った。丹三郎は、ぶるぶる震えながら勝太郎の手を固く握り、

「若殿は野暮だ。思いやりも何も無い。おれは実は馬は何よりも苦手なのだ。何もかも目茶苦茶だ。」と泣くような声で訴えた。

式部は静かにあたりを見廻し、跡に遺漏のものの無きを見とどけ、さて、丹三郎に向い、

「これも皆、あなたの言葉から起った難儀です。でもまあいまは、

そんな事を言っていたって仕様がありません。すぐに若殿の後を追いましょう。わしたちは果して生きて向う岸に行き着けるかどうか、この大水では、心もとない。けれども、わしは国元を出る時、あなたの親御の丹後どのから、丹三郎儀はまだほんの子供、しかも初旅の事ゆえ、諸事よろしくたのむと言われました。その一言が忘れかね、わしはきょうまで我慢に我慢を重ねて、あなたの世話を見て来ました。いまこの濁流を渡って、あなたの身にもしもの事があつたなら、きょうまでのわしの苦労もそれこそ水の泡^{あわ}になります。馬は一ばん元氣のいいのを、あなたのために取って置きました。せがれの勝太郎を先に立て、瀬踏みさせますから、あなたは何でもただ馬の首にしがみついて勝太郎の後につい

て行くといい。すぐあとに、わしがついて守って行きますから、心配せず、大浪をかぶつてもあわてず、馬の首から手を離したりせぬように。」とおだやかに言われて流石の馬鹿も人間らしい心にかえったか、

「すみません。」と言つて、わつと手放して泣き出した。

諸事頼むとの一言、ここの事なりと我が子の勝太郎を先に立て、次に丹三郎を特に吟味して選^えび置きし馬に乗せて渡らせ、わが身はすぐ後にひたと寄添つてすすみ渦^{うず}巻く激流を乗り切つて、難儀の末にようやく岸ちかくなり少しく安堵^{あんど}せし折も折、丹三郎いささかの横浪をかぶつて馬の鞍^{くら}覆^つえり、あなやの小さい声を残してはるか流れて浮き沈み、騒ぐ間もなくはや行方しれずになつてし

まった。

式部、ぼうぜん呆然たるうちに岸に着き、見れば若殿は安泰、また我

が子の勝太郎も仔細しさいなく岸に上つて若殿のお傍はべに侍はべっている。

世に武家の義理ほどかなしきは無し。式部、覚悟を極きめて勝太郎を手招き、

「そちに頼みがある。」

「はい。」と答えて澄んだ眼で父の顔を仰ぎ見ている。家中随一の美童である。

「流れに飛び込んで死んでおくれ。丹三郎はわしの苦勞の甲斐かいも無く、横浪をかぶつて鞍がくつがえり流れに吞のまれて死にました。そもそもあの丹三郎儀は、かの親の丹後どのより預きたり来れる義理

のある子です。丹三郎ひとりが溺れ死んで、お前が助かったとあれば、丹後どのの手前、この式部の武士の一分いちぶんが立ちがたい。ここを聞きわけておくれ。時刻をうつさずいますぐ川に飛び込み死んでおくれ。」と面を剛くして言い切れば、勝太郎さすがは武士の子、あ、と答えて少しもためらうところなく、立つ川浪に身を躍らせて相果てた。

式部うつむき涙を流し、まことに武家の義理ほどかなしき物はなし、ふるさとを出でし時、人も多きに我を扶えらびて頼むとの一言、そのままに捨てがたく、万事に劣れる子ながらも大事に目をかけここまで来て不慮の災難、丹後どのに顔向けなりがたく、何の罪とがも無き勝太郎をむざむざ目前まへに於いて死なせたる苦しさ、さ

りとは、うらめしの世、丹後どのには他の男の子ふたりあれば、
 歎^{なげ}きのうちにもまぎれる事もありなんに、それがしには勝太郎ひ
 とり。国元の母のなげきもいかばかり、われも寄る年波、勝太郎
 を死なせていまは何か願いの楽しみ無し、出家、と観念して、表
 面は何気なく若殿に仕えて、首尾よく蝦夷見物の大役を果し、そ
 の後、城主にお暇^{いとま}を乞い、老妻と共に出家して播^{ばん}州^{しゅう}の清水の
 山深くかくれたのを、丹後その経緯を聞き伝えて志に感じ、これ
 もにわかにお暇^{いとま}を乞い請^うけ、妻子とも四人いまさらこの世に生き
 て居られず、みな出家して勝太郎の菩提^{ぼだい}をとむらつたとは、いつ
 の世も武家の義理ほど、あわれにして美しきは無しと。

（武家義理物語、卷一の五、死なば同じ浪^{なみまくら}枕とや）

女賊

後ごかしわばら柏原天皇大たいえい永年みちのく間、陸奥一円にかくれなき瀬越の何が
 しという大賊、仙なとりがわ台名取川の上流、笹谷峠ささやとうげの附近に住み、往
 来の旅人をあやめて金銀荷物おうりよう押領し、その上、山賊にはめず
 らしく吝りんしよく嗇の男で、むだ使いは一切つつしみ、三十歳を少し
 出たばかりの若さながら、しこたまためて底知れぬ大長者になり、
 立派な口髭くちひげを生やして挙きよそ措動作も重々しく、山賊には附つき物の
 熊くまの毛皮などは着ないで、紬つむぎの着物に紋附もんつきのお羽織をひっかけ、
 謡曲なども少ししたしなみ、そのせいか言葉つきも東北の方言と違

っ
て
い
て、何々そうろうにて候、などといかめしく言い、女ぎらいいか未だ
 に独身、酒は飲むが、女はてんで眼中に無い様子で、かつて一度
 も好色の素振りを見せた事は無く、たまに手下の者が里から女を
 さらつて来たりすると眉まゆをひそめ、いやしき女にたわむれるは男
 子の恥辱に候、と言ひ、ただちに女を里に返させ、手下の者たち
 が、親分の女ぎらいは玉に疵きずだ、と無遠慮に批評するのを聞いて
 にやりと笑い、仙台には美人が少く候、と呟つぶやいて何やら溜息ためいきを
 つき、山賊に似合こまわぬ高邁こうまいの趣味を持つてゐる男のようにも見
 えた。この男、或ある年の春、容貌ようぼう見にくからぬ手下五人に命じ
 て熊の毛皮をぬがせ頬ほ被おかぶりを禁じて紋服を着せ仙せん台だい平へいの袴はかまを
 はかせ、これを引連れて都にのぼり、自分は東あづまの田舎大尽だいじんの如ごと

くすべて鷹揚おうように最上等の宿舎に泊り、毎日のんきに京の見物、
 日頃ひごろけちくさくため込んだのも今日この日の為ためらしく、惜しげも
 無く金銀をまき散らし、やがてもの言わぬ花にも厭あきて、島原しまばら
 に繰り込み、京で評判の名妓めいぎをきら星の如く大勢ならべて眺め、
 好色の手下の一人は、うむと呻うめいて口に泡あわを噴きどうとうしろに
 倒れてそれお水それお薬、お袴をおぬぎなさつたら、などと大騒
 ぎになったのも無理からぬほど、まばゆく見事な景趣ではあつた
 が、大尽は物憂ものうそうな顔して溜息をつき、都にも美人は少く候、
 と呟く。広い都も、人の噂うわさのために狭く、この山賊の奢おごりは逸いちは
 早く京中に拡ひろまり、髭ひげそうろうの大尽と言われて、路みちで逢あう人
 ことごとくがこの男に会えしやく釈するようになったが、この男一向に

浮かぬ顔して、やがて島原の遊びにもどうやら厭きた様子で、毎日ぶらりぶらりと手下を引連れて都大路を歩きまわり、或る日、古い大きな家の崩れかかった土塀どべいのわれ目から、ちらと見えた女の姿に足をとどめ、手にしていた扇子せんすをはたと落して、小山の動くみたいに肩で烈はげしく溜息をつき、シばらスイ、と思わず東北訛なまりをまる出しにして呻き、なおもその、花盛りの梨なしの木の下でその弟とも見える上品な男の子と手鞠てまりについて遊んでいる若い娘の姿に、阿呆あほうの如く口をあいて見とれていた。翌あくる日、髭あひそうろうの大尽は、かの五人の手下に言いふくめて、金銀綾あやにしき錦きんのたぐいの重宝をおびただしく持参させ、かの土塀どべいの家に遣つかし、お姫様を是非とも貰もらい受けたしと頗すこぶる唐突ながら強硬の談判を開始させた。

その家の老主人は、いささか由緒ゆいしよのある公卿くげの血筋を受けて、

むかしはなかなか羽振りのよかつた人であるが、名誉心が強すぎて、なおその上の出世を望み、附合つけあいを派手にして日夜頭官に饗きようおう

応おし、かえつて馬鹿にされておまけに財産をことごとく失い、

何もかも駄目だめになり、いまは崩れる土塀を支える力も無く中風の
気味さえ現われて来て、わななく手でさてもこの世は夢まぼろし
などとへたくその和歌を鼻紙の表裏に書きしたためて、その日そ
の日の憂うさを晴らしている有様だったので、この突然の申込みに
はじめは少からず面くらつたものの、さて、眼前に山と積まれた
金銀財宝を眺めて、これだけあれば、ふたたび大官に饗応し、華
やかに世に浮び上る事が出来るぞと、れいの虚栄心がむらむらと

起り、髭そうろうの大尽といえ、いま此この京でも評判の男、な
んでも遠いあずまの大金持ちの若旦那わかだんなだとかいう話だ、田舎者
だつて何だつて金持ちなら結構、この縁談は悪くない、と貧すれ
ば貧どんすの例にもれず少からず心が動いて、その日はお使者に大い
に愛嬌あいきようを振りまき、確答は後日という事にして、とにかくき
ようのお土産の御礼にそちらの御主人の宿舎へ明日参上致します、
という返辞。手下たちは、しめた、あの工合ぐあいではもう大丈夫、
と帰る途々みちみちうなず首肯うなずき合ひ、主人にその様子を言上すれば、山賊の
統領はにやりと凄くすご笑い、案外もろく候、と言つた。その翌る日、
土塀の老主人は、烏帽子えぼしなどかぶつてひどくもったいぶつた服装
で山賊の京の宿舎を訪ね、それこそほんものの候言葉で、昨日の

お礼を申し、統領の鷹揚な挙措や立派な口髭に一目で惚れ込み、お礼だけ言う筈はずのところを、つい、ふつつかな娘ながら、ところらのほうから言い出して、山賊の統領もさすがに都の人の輕薄に苦笑して、それでもその日の饗応は山の如く、お土産も前日にまさる多額のもので、土塀のあるじはただもう雲中を歩む思いで烏帽子を置き忘れて帰宅し、娘を呼んで、女三さん界がいに家なし、ここはお前の家ではない、お前の弟がこの家を継ぐのだからお前はこの家には不要である、女三界に家なしとはこここのところだ、とひどい乱暴な説教をして娘を泣かせ、何を泣くか、お父さんはお前のために立派な婿むこを見つけて来てあげたのに、めそめそ泣くとは大不孝、と中風の気味で震える腕を振りあげて娘を打つ真似まねをし

て、都の人は色は白いが貧乏でいけない、あずまの人は毛深くて
間の抜けた顔をしているが女にはあまいようだ、行きなさい、す
ぐに山奥へでもどこへでも行きなさい、死んだお母さんもよろこ
ぶだろう、お父さんの事は心配するな、わしはこれからまた一旗
挙げるのだ、承知か、おお、承知してくれるか、女三界に家なし、
どこにいたって駄目なものだよ、などと変な事まで口走り、婿の
氏素性をろくに調べもせず、とにかくいま都で名高い髭そうろ
うの大尽だから間違ひ無しと軽率にひとり合点して有頂天のうち
にこの縁談をとりきめ、十七の娘は遠いあずまのそれも蝦夷の土
地と聞く陸奥へ嫁がなければならぬ身の因果を歎き、生きた心地
も無くただ泣きに泣いて駕籠に乗せられ、父親ひとりは浅間しく

大はしやぎで、あやうい腰つきで馬に乗り都のはずれまで見送り、
ひたすら自分の今後の立身出世を胸中に思い描いてわくわくして、
さらば、さらば、とわかれの挨拶あいさつも上の空で言い、家へ帰って
五日目に心臓麻痺まひを起して頓死とんししたとやら、ひとの行末は知れぬ
もの。一方、十七の娘は、父のあわれな急死も知らず駕籠にゆら
れて東路あずまじをくだり、花婿の髭をつくづく見ては言いようのない
恐怖におそわれて泣き、手下の乱暴な東北言葉に胆きもをつぶして泣
き、江戸を過ぎてようよう仙台ちかくなって春とはいえ未だ山に
は雪が残っているのを見て泣き、山賊たちをひどく手こずらせて、
古巣の山寨さんさいにたどり着いた頃には、眼を泣きはらして猿さるの顔の
ようになり、手下の山賊たちは興覚めたが、統領はやさしくみず

から看護して、その眼のなかつた頃には娘も、統領に少しなつて
 落ちつき、東北言葉もだんだんわかるようになって、山賊の手
 下たちの無智むちな冗談に思わず微笑ほほえみ、やがて夫の悪い渡世を知る
 に及んで、ぎくりとしたものの、女三界に家なし、ここをのがれ
 ても都の空の方角さえ見当つかず、女はこうなると度胸がよい、
 ままよと観念して、夫には優しくされ手下の者たちには姐御あねごなど
 と言われてかしくされると、まんざら悪い気もせず、いつとはな
 しに悪にそまり、亭主ていしゅのする事なす事なんでも馬鹿ばからしく見え
 て仕様のない女房にようぼうもあり、また、亭主の行為がいちいち素晴
 らしい英雄的なものに見えてたまらない女房もあり、いずれも悪
 妻、この京育ちの美女は後者に属しているらしく、夫の憎むべき

所業も見馴れるに随い何だか勇しくたのもしく思われて来て、亭主が一仕事して帰るといそいそ足など洗つてやり、きょうの獲物は何、と笑つて尋ね、旅人から奪つて来た小袖をひろげて、これは私には少し派手よ、こんどはもう少し地味なのをたのむわ、と言つてけろりとして、手下どものむごい手柄話を眼を細めて聞いてよろこび、後には自分も草鞋をはいて夫について行き、平気で悪事の手伝いをして、いまは根からのあさましい女山賊になりさがり、顔は以前に変わらず美しかったが眼にはいやな光りがあり、夫の山刀を井戸端にしゃがんで熱心に研いでいる時の姿などには鬼女のような凄い気配が感ぜられた。やがてこの鬼女も身ごもり、生れたのは女の子で春枝と名づけられ、色白く唇小さく赤い、京

風の美人、それから二年経^たつて、またひとり女の子が生れ、お夏と呼ばれて、父に似て色浅黒く眼が吊^つり上ったきかぬ氣の顔立ちの子で、この二人は自分の母が京の公卿の血を受けたひとだという事など知る筈もなく、氏より育ちとはまことに人間のたより無さ、生れ落ちたこの山奥が自分たちの親代々の故郷とのんきに合点して、鬼の子らしく荒々しく山坂を駈^かけ廻^{まわ}つて遊び、その遊びもままごとなどでは無く、ひとり旅人、ひとり山賊、おい待て、命が惜しいか金が惜しいかとひとり言え、ひとり助けで！ と叫んでけわしい崖^{がけ}をするする降りて逃げるを、待て待てと追つてつかまえ大笑いして、母親はこれを見て悲しがるわけもなく、かえつて薙^{なぎ}刀^{なた}など与えて旅人をあやめる稽古^{けいこ}をさせ、

天を恐れぬ悪業、その行末もおそろしく、果せる哉、かな春枝十八お夏十六の冬に、父の山賊に天罰下り、雪崩なだれの下敷になつて五体の骨々微塵みじんにくだけ、眼もあてられぬむごたらしい死にざまをして、母子なげく中にも、手下どもは悪人の本性をあらわして親分のしこたまためた金銀財宝諸道具食料ことごとく持ち去り、母子はたちまち雪深い山中で暮しに窮した。

「何でもないさ。」と勝気のお夏は威勢よく言つて母と姉をはげまし、「いままで通り、旅人をやつつけようよ。」

「でも、」と妹にくらべて少しおとなしい姉の春枝は分別ありげに、「女ばかりじゃ、駄目よ。かえつてあたしたちのほうで着物をはぎとられてしまうわよ。」

「弱虫、弱虫。男の身なりをして刀を持って行けばなんでもない。やいこら、とこんな工合いに男のひとみたいな太い声で呼びとめると、どんな旅人だつて震え上るにきまつている。でも、おさむらいはこわいな。じいさんばあさんか、女のひとり旅か、にやけた商人か、そんな人たちを選んでおどかしたら、きつと成功するわよ。面白^{おもしろ}いじゃないの。あたしは、あの熊の毛皮を頭からかぶつて行こう。」無邪氣と悪魔とは紙一重である。

「うまくいくといいけど、」と姉は淋^{さび}しげに微笑んで、「とにかくそれじゃ、やって見ましょう。あたしたちは、どうでもいいけど、お母さんにお怪^{けが}我があつては大変だから、お母さんはお留守番して、あたしたちの獲物をおとなしく待っているのよ。」と母

に言い、山育ちの娘も本能として、少しは親を大事にする気持があるらしく、その日から娘二人は、山男の身なりで、おどけ者の妹は鍋墨なべずみで父にそっくりの口髭くちひげなど描いて出かけ、町人里人の弱そうな者を捜し出してはおどし、女心はこまかく、懐中の金き子んすはもとより、にぎりめし、鼻紙、お守り、火打石、爪楊子つまようじのはてまで一物も余さず奪い、家へ帰って、財布の中の金銀よりは、その財布の縞柄しまがらの美しきを喜び、次第にこのいまわしき仕事にはげみが出て来て、もはや心底からのおそろしい山賊になってしまったものの如く、雪の峠をたまに通る旅人を待ち伏せているだけでは獲物が少くてつまらぬなどと、すっかり大胆になつて里近くまで押しかけ、里の女をつまらぬ櫛くし笄こうがいでも手に入れると有

頂天になり、姉の春枝は既に十八、しかも妹のお転婆てんぱにくらべて
少しやさしく、自身の荒くれた男姿を情無く思う事もあり、熊の
毛皮の下に赤い細帯などこっそりしめてみたりして、さすがにわ
かい娘の心は動いて、或る日、里近くで旅の絹商人をおどして得
た白絹二反、一反ずつわけていそいそ胸に抱いて夕暮の雪道を急
ぎ帰る途中に於いて、この姉の考えるには、もうそろそろお正月
も近づいたし、あたしは是非とも晴衣はれぎが一枚ほしい、女の子はた
まには綺麗きれいに着飾らなければ生きている甲斐かいが無い、この白絹を
藤色ふじいろに染め、初春の着物を仕立てたいのだが裏地が無い、妹に
わけてやった絹一反あれば見事な衾あわせが出来るのに、と矢もたても
たまらず、さいぜんわけてやった妹の絹が欲しくなり、

「お夏や、お前この白絹をどうする気なの？」と胸をどきどきさせながら、それとなく聞いてみた。

「どうするって、姉さん、あたしはこれで鉢巻はちまきをたくさんこしらえるつもりなの。白絹の鉢巻は勇しくって、立派な親分さんみたいに見えるわよ。お父さんも、お仕事の時には絹の白鉢巻をしてお出かけになったわね。」とたわい無い事を言っている。

「まあ、そんな、つまらない。ね、いい子だから、姉さんにそれをゆずってくれない？　こんど、何かまたいいものが手にはいつた時には姉さんは、みんなお前にあげるから。」

「いやよ。」と妹は強く首を振った。「いや、いや。あたしは前から真白な鉢巻をほしいと思っていたのよ。旅人をおどかすのに、

白鉢巻でもしてないと氣勢があがらなくて工合いがわるいわ。」

「そんな馬鹿な事を言わないで、ね、後生ごしやうだから。」

「いや！ 姉さん、しつっこいわよ。」

へんに気まずくなつてしまった。けれども姉はそんなに手きびしく断られるといよいよ総身が燃え立つように欲しくなり、妹に較くらべておとなしいとはいふものの、普段おとなしい子こそ思いつめた時にかえつて残酷のおそろしい罪を犯す。殊ことにも山賊の父から兇きやうあく悪の血を受け、いまは父の真似して女だてらに旅人をおどしてその日その日を送り迎えている娘だ。胸がもやもやとなり、はや、人が変り、うわべはおだやかに笑いながら、

「ごめんね、もう要らないわよ。」と言つてあたりを見廻し、こ

の妹を殺して絹を奪おう、この腰の刀で旅人を傷つけた事は一度ならずある、ついでに妹を斬^きつて捨てても、罪は同じだ、あたしは何としても、晴衣を一枚つくるのだ、こんどに限らず、帯でも櫛でもせつかくの獲物をこんな本当の男みたいな妹と二人でわけるのは馬鹿らしい、むだな事だ、にくい邪魔、突き刺して絹を取り上げ、家へ帰ってお母さんに、きようは手剛^{てこわ}い旅人に逢^あい、可^かわいそう
哀^{わい}想に妹は殺されましたと申し上げれば、それですむ事、そう
だ、少しも早くと妹の油断を見すまし、刀の柄^{つか}に手を掛けた、途
端に、

「姉さん！ こわい！」と妹は姉にしがみつки、

「な、なに？」と姉はうろたえて妹に問えば妹は夕闇^{ゆうやみ}の谷底を

指差し、見れば谷底は里人の墓地、いましも里の仏を火葬のさいちゆう、人焼く煙は異様に黒く、耳をすませば、ぱちぱちはぜる気味悪い音も聞えて、一陣の風はただならぬ匂い^{にお}を吹き送り、さすがの女賊たちも全身鳥肌^{とりはだ}立って、固く抱き合い、姉は思わずお念仏を称え^{とな}、人の末は皆このように焼かれるのだ、着物も何もはかないものだとふつと人の世の無常を観じて、わが心の恐しさに今更ながら身震いして、とかくこの一反の絹のためさもしい考えを起すのだ、何も要らぬと手に持っている反物を谷底の煙めがけて投げ込めば、妹もすぐに投げ込み、わつと泣き出して、

「姉さん、ごめん、あたしは悪い子よ。あたしは、姉さんをたつたいままで殺そうと思っていたの。姉さん！ あたしだって、も

う十六よ。綺麗な着物を欲しいのよ。でも、あたしはこんな不器量な子だから、お洒落しゃれをすると笑われるかと思つて、わざと男の子みたいな事ばかり言っていたのよ。ごめんね。姉さん、あたしはこのお正月に晴衣が一枚ほしくて、あたしの絹を紅梅に染めて、そうして姉さんの絹を裏地にしようと思つて、姉さん、あたしはいけない子よ、姉さんを刀で突いてそうしてお母さんには、姉さんが旅人に殺されたと申し上げるつもりでいたの。いまあの火葬の煙を見たら、もう何もかもいやになつて、あたしはもう生きて行く気がしなくなつた。」と意外の事を口走るので、姉は仰天して、

「何を言うの？ ゆるすもゆるさぬも、それはあたしの事ですよ。

あたしこそ、お前を突き殺して絹を奪おうと思つて、あの煙を見たら悲しくなつて、あたしの反物を谷底へ投げ込んだのじやないの。」と言つて、さらに妹を固く抱きしめてこれも泣き出す。

かつは驚き、かつは恥じ、永からぬ世に生れ殊に女の身としてかかる惡逆の暮し、後世ごせのほども恐ろし、こんにちこれぎり浮世の望みを捨てん、と二人は腰の刀も熊の毛皮も谷底の火焰かえんに投じて、泣き泣き山寨に帰り、留守番の母に逐一事情を語り、母にもお覺悟のほどを迫れば、母も二十年の惡夢から醒めさ、はじめて母のいやしからぬ血筋を二人に打ち明け、わが身の現在のあさましさを歎き、まつさきに黒髪を切り、二人の娘もおくれじと剃てい髪はつして三人比丘尼びくに、汚濁の古巢を焼き払い、笹谷峠のふもとの寺に

行き老僧に向つて懺悔ざんげしその衣ころもの裾すそにすがつてあけくれ念仏を称え、これまであやめた旅人の菩提ぼだいを弔とむらつたとは頗すこぶる殊勝しゆしょうに似たれども、父子二代の積せき悪あくはたして如来にょらいの許たまし給たまうや否いなや。

(新可笑記しんかせうき、卷五の四、腹からの女追剥をんなおひはぎ)

赤い太鼓

むかし都の西陣にしじんに、織物職人の家多く、軒をならべておのおの織物の腕を競い家業にはげんでいる中に、徳兵衛とくべえとて、名こそ福徳の人に似ているが、どういふものか、お金が残らず胆きもを冷やしてその日暮し、晩酌ばんしやくも二合を越えず、女房にようぼうと連添うて十九年、他ほかの女にお酌をさせた経験も無く、道楽といえ、たまに下職したしよくを相手に将棋をさすくらいのもので、それもひまを惜しんで目まぐるしい早将棋一番かぎり、約束の仕事の日限たがを違えた事はいちども無く万事に油断せず精出して、女房も丈夫、子供

はたち

も息災、みずからは二十の時に奥歯一本虫に食われて三日病んだ他には病気というものを知らず、さりとしてけちで世間の付き合いの義理を欠くというわけではなく職人仲間に律儀者りちぎものの評判を取り、しかも神仏の信心深く、ひとつとして悪事なく、人生四十年を過して来たものの、どういうわけか、いつも貧乏で、世の中には貧乏性といってこのような不思議はままある事ながら、それにしても、徳兵衛ほどの善人がいつまでも福の神に見舞われぬとは、浮世にはわからぬ事もあるものだ、町内の顔役たちは女房に寝物語してひそかにわが家の内福に安堵あんどするというような有様であった。そのうちに徳兵衛の貧乏いよいよ迫り、ことしの暮は夜逃げの他に才覚つかず、しのびしのび諸道具売払うを、町内の顔役

たちが目ざとく見つけ、永年のよしみ、捨て置けず、それとなく徳兵衛に様子を聞けば、わずか七、八十両の借金に首がまわらず夜逃げの覚悟と泣きながら言う。顔役は笑い、

「なんだ、たかが七、八十両の借金で、先代からのこの老舗しにせをつぶすなんて法は無い。ことしの暮は万事わしたちが引受けますから、もう一度、まあ、ねばってみなさい。来年こそは、この身しんだ

代いにも一花咲かせて見せて下さい。子供さんにも、お年玉を奮

発して、下職への仕着しきせも紋無しあさぎの浅黄にするといまからでも間に

合いますから、お金の事など心配せず、まあ、わしたちに委まかせて、

大船に乗った気で一つ思い切り派手に年越しをするんだね。お内儀も、そんな、めそめそしてないで、せつかくのいい髪をもった

いない、ちゃんと綺麗きれいに結つて、おちめを人に見せないとところが女房の働き。正月の塩しお鮭さけもわしの家で三本買つて置いたから、一本すぐにとどけさせます。笑う門には福が来る。どうも、この家は陰気でいけねえ。さあ、雨戸をみんなあけて、ことしの家中の塵ちりあくと芥かいをさっぱりと掃き出して、のんきに福の神の御入来を待つがよい。万事はわたしが引受けました。」と景氣のいい事ばかり言い、それから近所の職人仲間と相談の上、われひと共にいそがしき十二月二十六日の夜、仲間十人おのおの金子きんす十両と酒し肴ゆこうを携え、徳兵衛の家を訪れ、一升ます枰ひらを出させて、それに順々に十両ずつばりばりと投げ入れて百両、顔役のひとりごとは福の神の如く陽気に笑い、徳兵衛さん、ここに百両あります、これを

もとでに千両かせいでごらんなさい、と差し出せば、またひとり
 の顔役は、もつともらしい顔をして梶かみだなを神棚にあげ、ぱんぱん
 と拍手かしわでを打ち、えびす大黒にお願い申す、この百両を見覚え置
 き、利に利を生ませて来年の暮には百倍千倍にしてまたこの家に
 立ち戻もどらせ給え、たまさもなくば、えびす大黒もこの金横領のとがに
 んとして縄なわを打ち、川へ流してしまいます、と言え、また大笑
 いになり、職人仲間の情愛はまた格別、それより持参の酒肴にて
 年忘れの宴、徳兵衛はうれしく、意味も無く部屋中をうろうろ歩
 きまわり重箱を蹴け飛ばし、いよいよ恐縮して、あちらこちらに矢
 鱈たらにお辞儀して廻まわり、生れてはじめて二合以上の酒を飲ませても
 らい、とうとう酔い泣きをはじめ、他の職人たちも、人を救った

というしびれるほどの興奮から、ふだん一滴も酒を口にせぬ人まで、ぐいぐいと飲み酒乱の傾向を暴露して、この酒は元来わしが持参したものだ、飲まなければ損だ、などとまことに興覚めないやしい事まで口走り、いきな男は、それを相手にせず、からだを前後左右にゆすぶって小唄をうたい、鬚面ひげづらの男は、声をひそめて天下国家の行末を憂い、また隅すみの小男は、大声でおのれの織物の腕前を誇り、他のやつは皆へたくそ也なりとののしり、また、頬ほお被りぶして壁塗り踊りと称するへんてつも無い踊りを、誰だれも見えないのに、いやに緊張して口をひきしめいつまでも呆れるほど永く踊りつづけている者もあり、また、さいぜんから襖ふすまによりかかつて、顔面蒼白そうはく、眼めを血走らせて一座を無言で睨みにら、近くに

坐^{すわ}つてゐる男たちを薄気味悪がらせて、やがて、すつくと立ち上
 ったので、すわ喧嘩^{けんか}と驚き制止しかかれば、男は、ううと呻^{うめ}いて
 廊下に走り出て庭先へ、げえと吐いた。酒の席は、昔も今も同じ
 事なり、しまいには、何が何やら、ただわあとなつて、骨の無い
 動物の如く、互いに背負われるやら抱かれるやら、羽織を落し、
 扇子を忘れ、草履^{ぞうり}をはきちがえて、いや、めでたい、めでたい、
 とうわごとみたいに言いながらめいめいの家へ帰り、あとには亭^て
 いしゅ
 主ひとり、大風の跡の荒野に伏せる狼^{おおかみ}の形で大^{おお}鼾^{いびき}で寝て、
 女房は呆然^{ぼうぜん}と部屋のまんなかに坐り、とにかく後片附けは明日
 と定め、神棚の桝を見上げては、うれしさ胸にこみ上げ、それに
 つけても戸じまりは大事と立って、家中の戸をしめて念い^{しん}りに錠^{じょう}

をおろし、召使い達をさきに寝かせて、それから亭主の徳兵衛を

静かにゆり起し、そんな大軒で楽寝をしている場合ではありませ

ん、ご近所の有^{ありがた}難いお情を無にせぬよう、今夜これから、こと

しの諸払いの算用を、ざつとやって見ましよう、と大福帳やら算^そ

ろばん

盤を押しつけければ、亭主は眼をしぶくあけて、泥^{でいすい}酔の夢にも

債鬼に苦しめられ、いまふつと眼がさめると、われは百両の金持

なる事に氣附いて、勇氣百千倍、むつくり起き上り、

「よし来た、算盤よこせ、畜生め、あの米屋の八右衛門^{はちえもん}は、わし

の先代の別家なのに、義理も恩も人情も忘れて、どこよりもせわ

しく借りを責め立てやがって、おのれ、今に見ろと思つていたが、

畜生め、こんど来たら、あの皺^{しわづら}面に小判をたたきつけて、もう

来年からは、どんなにわしにお世辞を言っても、聞かぬ振りして米は八右衛門の隣りの与七の家から現金で買って、帰りには、あいつの家の前で小便でもして来る事だ。とにかく、あの神棚の桧をおろせ。久しぶりで山吹の色でも拝もう。」と大あぐらで威勢よく言い、女房もいそいそと立つて神棚から一升桧をおろして見ると、桧はからつぽ、一枚の小判も無い。夫婦は仰天して、桧をさかさにしたり叩いて^{たた}みたり、そこら中を^は這い廻ってみたり、神棚を全部引下して、もったいなくも御神体を裏がえしたりひっくりかえしたり、血まなこで搜しても一枚の小判も見当らぬ。

「いよいよ無いにきまった。」と亭主は思い切つて、「もうよい、搜すな。桧一ぱいの小判をまさか鼠^{ねずみ}がそっくりひいて行つたわけ

でもあるまい。福の神に見はなされたのだ。よくよく福運の無い家と見える。」と言ったが口惜くやしさ、むらむらと胸にこみあげ、「いい笑い草だ。八右衛門の勘定はどうなるのだ。むだな喜びをしただけに、あとのつらさが、こたえるわい。」と腹をおさえて涙を流した。

女房もおろおろ涙声になつて、

「まあ、どうしましょう。ひどい、いたずらをなさる人もあるものですねえ。お金を下さつてよろこばせて、そうしてすぐにまた取り上げるとは、あんまりですわねえ。」

「何を言う。そなたは、あの、誰か盗んだとも思っているのか。」

「ええ、疑うのは悪い事だけれども、まさか小判がひとりでふつと溶けて消えるわけは無し、宵よいからこの座敷には、あの十人のお客様のほかに入りました人も無し、お帰りになるとすぐにあたしが表の戸に錠をおろして、——」

「いやいや、そのようなおそろしい事を考えてはいけない。小判は神隠しに遭つたのだ。わしたちの信心の薄いせいだ。あのよう情深いご近所のお方たちを疑うなどは、とんでもない事だ。百両のお金をちらと拝ませていただいただけでも、有難いと思わなければならぬ。それに、生れてはじめてあれほどの大酒を飲む事も出来たし、もともとお金は無いものとあきらめて、」と分別ありげな事を言いながらも、明日からの暮しを思うと、地獄へまっ

さかさまに落ち込む心地で、（こころ）「ああ、それにしても、一夜のうちに笑ったり泣いたり、なんてまあ馬鹿（ばか）らしい身の上になったのだろう。」と鼻をすすする。

女房はたまらず泣き崩れて、

「いいなぶりものにされました。百両くださると見せかけて、そつとお持ち帰りになって、いまごろは赤い舌を出して居られるのに違いない。ええ、十人が十人とも腹を合せて、あたしたちに百両を見せびらかし、あたしたちが泣いて拝む姿を楽しみながら酒を飲もうという魂胆だったのですよ。人を馬鹿にするにもほどがある。あなたは、口惜しくないのですか。あたしはもう恥ずかしくて、この世に生きて居られない。」

「恩人の悪口は言うな。この世がいやになったのは、わしも同様。しかし、人を恨んで死ぬのは、地獄の種だ。お情の百両をわが身の油断から紛失した申しわけに死ぬのならば、わしにも覚悟はあるが。」

「理窟^{りくつ}はどうだって、いいじゃないの。あたしは地獄へ落ちたつていい。恨み死を致します。こんなひどい仕打ちをされて、世間のもの笑いになってなお生き延びるなんて事はとても出来ません。」

「よし、もう言うな。死にやいいんだ。かりそめにも一夜の恩人たちを訴えるわけにもいかず、いや疑う事さえ不埒^{ふらち}な事だ、さりとてこのまま生き延びる工夫もつかず、女房、何も言わずに、わ

しと一緒^{いっしょ}に死^しのうじやないか。この世ではそなたにも苦勞をかけ
たが、夫婦は二世^{にせ}と言うぞ。」

一寸^{いちゆん}さきは闇^{やみ}の世の中、よろこびの宴^{うたげ}の直後^{ちくご}に、徳兵衛夫婦は
死ぬる相談^{さうだん}、二人の子供も、道づれと覺悟^{かくご}を極^きめ、女房は貧^{ひん}のう
ちにも長持^{ながぢ}の底に残^{のこ}してあつた白^{しろ}小袖^{こそで}に身を飾^かり、鏡^{かがみ}に向い若
い時から人にほめられた黒髪^{くろかみ}を撫^なでつけながら、まことに十九年
のなじみ此^このあけぼのの夢^{ゆめ}と歎^{なげ}き、氣を取り直^{ただ}して二人の子供を
しずかに引起^{よこ}せば、上の女の子は、かかさま、もうお正月^{しんげつ}か、と
寝^ね呆^ぼけ、下の男の子は、坊^{ぼく}の独樂^{どくがく}はきよう買^かつてくれるかと言う。
夫婦は涙^{なみだ}に目くらみ、ものも言えず、子供を仏壇^{ぶつだん}の前に坐^まらせ、
わななきわななき御燈明^{ごとうみょう}をあげ、親子四人、先祖の靈^{たま}に手を合

せて、いまはこれまでと思うところに、子守女どたばたと走り出
て、二人の子供を左右にひしとかかえて頬ずりして、あんまりだ、
あんまりだ、旦那^{だんな}さまたちは何をなさるだ、われはさつきからお
前様たちの話を残らず聞いていただ、死ぬならお前様たちだけで
死ねばいいだ、こんな可愛^{かわい}い坊ちやま嬢ちやまに何の罪とががあ
るだ、むごい親だ、あんまりだ、坊ちやま嬢ちやまは、おらがも
らって育てるだ、死ぬならお前様たちだけでさつきと死ねばいい
だ、とあたりはばからぬ大声で泣きわめいて、隣近所の人もその
騒ぎに起き出して、夫婦の自害もうやむやになり、顔役はやがて
事情を聞いて驚き、これは大事とひとり思案し、いかにも夫婦の
言うとおり、あの夜われら十人のほか部屋に出入りした人は無し、

小判が風に吹き飛んだという例も聞かず、まさかわれら腹黒くしめし合せ、あの夫婦をなぶりものにするなんてのは滅相めつそうも無い事、十人が十人とも義に勇んであのいそがしい年末の一夜、十両の合ごうりき力を気前よく引受けたのだ、誰をも疑うわけに行かぬ、下手な事を言い出したら町内の大騒動、わが身の潔白を示そうとして腹を切る男など出て来ないとも限らぬ、さりとて百両といえ少からぬ金額、あの夫婦の行末も気の毒、このまま捨て置くわけにも行くまい、とにかくこの事件はわれらが手に余ると分別を極め、ひそかに役人に訴え申し、金の詮議せんぎを依頼した。

この不思議な事件の吟味を取扱った人は、時の名判官板倉殿、年内余日も無く皆々渡世のさわりもあるべし、正月二十五日に詮

索をはじめ、そのあいだ、かの十人の者ひとりも他国^{つかまつ}仕るな、

という仰^{おお}せがあり、やがて初春の二十五日に、お役所からお達し

があり、かの十人の者ども各々^{おのおの}その女房を召連れてまかり出ず

べし、もし女房無き者は、その姉妹、あるいは姪^{めい}伯母、かねて最

も近親の女をひとり同道して出頭致すべしとの上意。情をかけて

こんな迷惑、親爺^{おやじ}の遺言に貧乏人とは附合うなとあつたが、なる

ほどこのところだ、十両の大金を捨て、そのうえお役所へ呼び

出されるとはつまらぬ、とかく情は損のもと也、と露骨な卑^{いや}しい

愚痴を言うものもあり、とにかく女房を連れておそるおそるお白^し

洲^{らす}に出ると、板倉殿は笑いながら十人の者に鬪^{くじ}引きをさせて、一、

二の順番をきめ、その順序のとおりに十組の名を大きな紙に書き

したためて番附を作り、お役所の前に張出させて、さて威儀を正していかめしく申し渡すよう、

「このたび百両の金子紛失の件、とにかくにも、そちたちの過怠、その場に居合せながら大金の紛失に氣附かざりしとは、察するところ、意地汚く酒を過し、大酔に及んだがためと思われる。

飲酒の戒もさる事ながら、人の世話をするなら、素知らぬ振りし

てあつさりやったらよからう。救われた人を眼の前に置いてしつっこく、酒など飲んでおのれの慈善をたのしむなどは浅間しい。

早く夫婦二人きりにさせて諸支払いの算用をさせるようにしむけてやるのが、まことの情だ。なまなかの情は、かえつて人を罪におとす。以後は氣を附けよ。罰として、きょうからあの表に張り

出してある番附の順序に従つて一日に一組ずつ、ここにある太鼓に棒をとおして、それぞれ女房と二人でかつぎ、役所の門を出て西へ二丁歩いて、すぎばやし杉林の中を通り抜け、さらに三丁、畑の間の細道を歩き、さらに一丁、坂をのぼつて八幡宮はちまんどうに参り、八幡宮のお札ふだをもらつて同じ道をまつすぐに歸つて来るよう、固く申しつける。」との事で、一同これは世にためし無き異なお仕置きと首をかしげたが、おかみのお言いつけなれば致し方なく、ばかばかしくもその日から、夫婦で太鼓をかついで八幡様へお参りして来なければならなくなつた。耳ざとい都の人にはいち早くこの珍妙の裁判の噂うわさがひろまり、板倉殿ももうろく耄碌したか、紛失の金子の行方も調べずに、ただ矢鱈やたらに十人を叱しかつて太鼓をかつがせお宮

参りとは、滅茶苦茶だ、おおかた智慧者の板倉殿も、このたびの不思議な盗難には手の下し様が無く、やけっぱちで前代未聞の太鼓のお仕置きなど案出して、いい加減にお茶を濁そうという所存に違いない、と物識り顔で言う男もあれば、いやいやそうではない、何事につけても敬神崇仏、これを忘れるなという深いお心、むかし支那に、夫婦が太鼓をかついでお宮まいりをして親の病気の平癒を祈願したという美談がある、と真面目な顔で嘘を言う古老もあり、それはどんな書物に出ています、と突込まれて、それは忘れたがとにかくある、と平気で嘘の上塗りをして、年寄りの話は黙って聞け、と怒ってぎよろりと睨み、とにかく都の評判になり、それ見に行けとお役所の前に押しかけ、夫婦が太鼓をかつ

いでしずしずと門から出て来ると、わあつと歓声を挙げ、ばんざいと言う者もあり、よう御両人、やけます、と黄色い声で叫ぶ通人もあり、いずれも役人に追い払われ、このたびのお仕置きは、諸見物の立寄る事かたく御法度、ごはつとときびしく申しわたされ、のこり惜しそうに、あとを振り返り振り返り退散して、夫婦はそれどころで無く大不平、なんの因果で、こんな太鼓をかついでのこのこ歩かなければならぬのか、思えば思うほど、いまいまして、かまいそうこにも女は、はじめから徳兵衛の事などかくべつ可哀想とも思おおみそかわず、一銭の金でも惜しい大晦日に亭主が勝手に十両などという大金を持ち出し、前後不覚に泥酔して帰宅して、何一ついいことが無かった上に亭主と共に白洲に呼び出され、太鼓なんか担かつが

せられて諸人の恥さらしになるのだから、面白くない事おびた
しい。おまけにこの太鼓たるや、氣まりの悪いくらい真赤な塗
で、天女の舞う図の金時絵きんまきえがしてあつて、陽ひを受けて燦然さんぜんと
輝き、てれくさくつて思わず顔をそむけたいくらい。しかも大
さは四斗樽しとだるほどあつて、棒を通して二人でかついでも、なかな
かい。女房はじめは我慢して神妙らしく担いでいても、町はずれ
に出て、杉林にさしかかる頃からは、あたりに人ひとりいないし、
そろそろ愚痴が出て来る。

「ああ、重い。あなたは、どうなの？ 重くないの？ ばかにう
れしそうに歩いているわね。お祭りじゃないんですよ。子供じゃ
あるまいし、こんな赤い太鼓をかついでお宮まいりだなんて、板

倉様も意地が悪い。もうもう、あたしは、人の世話なんてごめんですよ。あなたたちは、人の世話にかこつけて、お酒を飲んで騒ぎたいのでしょうか？　ばかばかしい。おまけにこんな赤い太鼓をかつがせられて、いい見せ物にされて、――」

「まあ、そう言うな。ものは考え様だ。どうだい、さっきの、お役所の前の人出は。わしは生れてから、あんなに人に囃はやされた事は無い。人気があるぜ、わしたちは。」

「何を言ってるの。道理であなたは、けさからそわそわして、あの着物、この着物、と三度も着かえて、それから、ちよつと薄化粧なさってたわね。そうでしょう？　白状しなさい。」

「馬鹿な事を言うな。馬鹿な。」と亭主は狼狽ろうばいして、「しかし、

いい天気だ。」とよそ話をした。

また翌日の一組は、れいの発起人の顔役とその十八の娘。

「お父さん、」と十八の娘は、いまは亡き母にかわって家事の担当、父の身のまわりの世話を焼いているので、鼻息が荒い。「亡くなったお母さんが、あたしたちのこんない^{かつこう}恰好を見て、草葉の蔭^{かげ}で泣いていらつしやるでしょうねえ。お父さんは、まあ、自業自得で仕方がないとしても、あたしにまで、こんな赤い太鼓の片棒かつがせて、チンドン屋みたいな事をさせてさ、お母さんはきつと、お父さんをうらんで、化けて出るわよ。」

「おどかしちゃいけねえ。何も、わしだって好きでかついでいるわけじゃないし、また、年頃のお前にこんな判じ物みたいなもの

を担がせるのも、心苦しいとは思っている。」

「あんな事を言っている。心苦しいだなんて、そんな気のきいた言葉をどこで覚えて来たの？ おかしいわよ。お父さんには、この太鼓がよく似合つてよ。お父さんは派手好きだから、赤いものが、とてもよく似合うわ。こんど、真赤なお羽織を一枚こしらえてあげましょうね。」

「からかつちやいけねえ。だるまじやあるまいし、赤い半纏はんでんなんてのはお祭りにだつて着て出られるわけのものじゃない。」

「でも、お父さんは年中お祭りみたいにそわそわしている、あんなのをお祭り野郎つてんだと陰口たたいていた人があつたわよ。」

「誰だだれ、ひでえ奴だやつ、誰がそんな事を言つたんだ。そのままには

して置けねえ。」

「あたしよ、あたしが言ったのよ。何のかのと近所に寄合いをこしらえさせてお祭り騒ぎをしようとかくらんばかりいるんだもの。いい気味だわ。ばちが当たんだわ。お奉^{ぶぎよう}行様は、やつぱりえらいな。お父さんのお祭り野郎を見抜いて、こらしめのため、こんな真赤なお祭りの太鼓をかつがせて、改心させようと思つていらつしやるのに違いない。」

「こん畜生！ 太鼓をかついでいなければ、ぶん殴つてやるんだが、えい、徳兵衛ふびんさに、持前の親分肌^{はだ}のところを見せてやったばかりに、つまらねえ事になった。」

「持前だって。親分肌だって。おかしいわよ、お父さん。自分で

そんな事を言うのは、毫碌の証拠よ。もっと、しつかりしなさいね。」

「この野郎、黙らんか。」

またその翌日の夫婦は、

「あなたも、しかし、妙な人ですね。ふだんあんなにけちで、お客さんの煙草たばこばかり吸っているほどの人が、こんどに限って、馬鹿にあっさり十両なんて大金を出したわね。」

「そりやあね、男の世界はまた違ったものさ。義を見てせざるは勇なき也。常日頃つねひごろの儉約も、あのような慈善に備えて、——」

「いい加減を言ってるわ。あたしや知っていますよ。あなたは前から、あの徳兵衛さんのおかみさんを、へんにほめていらつしや

ったわね。おぼしめ思召しがあるんじゃない？ いいとしをして、まあ、

そんな鬼がくしやみして自分でおどろいてるみたいな顔をして、

思召しも呆れるあきじやないの、いいえ、あたしや知っていますよ、

あなた、としを考えてごらんさい、孫が三人もあるくせに、お

隣りのおかみさんにへんな色目を使ったりなんかして、あなたは

それでも人間ですか、人間の道を知っているのですか、いいえ、

あたしには、わかっていますよ、おかげでこんな重い太鼓なんか

担がせられて、あいたたた、あたしやまた神経痛が起つて来た。

あしたから、あなたが、ごはんをたくのですよ。まき薪も割つてもら

わなくちやこまるし、糠味ぬかみそ噌もよく搔かきまわして、井戸は遠いか

らいい気味だ、毎朝手桶ておけに五はいくんで来て台所の水甕みずがめに、あ

いたたた、馬鹿な亭主を持ったばかりに、あたしは十年寿命をち
 ぢめた。」と喚わめき、その翌あくる日の組も同じ事、いずれも女は不平
 たらたら、男はひとしく口汚くののしられて、女子と小人は養やにわい
 難がたしと眼をかたくつぶって観念する者もあり、家へ歸つて矢庭に
 女房をぶん殴つて大立廻りを演じ離縁騒ぎをはじめた者もあり、
 運悪く大雪の日の番に当つた一組は、ひとしお女房の歎のろきやら呪
 いやらが猛烈を極め、共に風邪をひき、家へ歸つて床を並べて寝
 込んでしまつて咳せきにむせかえりながらも烈はげしく互いに罵倒ばとうし合い、
 太鼓の仕置きも何の事は無い、女の口の悪さを暴露したという結
 果に終つただけのようであつた。十組のお仕置きが全部すんでか
 ら、また改めて皆にお呼び出しがあり、一同不機嫌ふきげんのふくれつら

でお白州にまかり出ると、板倉殿はにこにこ笑い、

「いや、このたびは御苦勞であつた。太鼓の担ぎ賃として、これは些さ少ながら、それがしからの御礼だ。失礼ではあろうが、笑つて受取つてもらいたい。風邪をひいて二、三日寝込んだ夫婦もあつたとか、もはや本服したろうが、お見舞いとして別に一封包んで置いた。こだわり無く収めていただきたい。このたび仲間の窮迫を見かねて金十両ずつ出し合つて救つたとは近頃めずらしい美拳、いつまでもその心掛けを忘れぬよう。それにもかかわらず、あのような重い太鼓をかつがせ、その上、男どもは、だいぶ女連にやられていたようで、気の毒に思っている。まあ、何事も水に流して、この後は仲良く家業にはげむよう。ところで、この中の

一組、太鼓をかついで杉林にさしかかった頃から女房が悪鬼に憑つ
 かれたように物狂わしく騒ぎ立て、亭主の過去のふしだらを一つ
 一つ挙げてののしり、亭主が如何いかになだめても静まらず、いよいよ
 大声で喚き散らすゆえ、亭主は困却し果て、杉林を抜けて畑に
 さしかかった頃、あたりをはばかり小さい声で、騒ぐな、うらむ
 な、太鼓の難儀もいましばしの辛抱、百両の金は、わしたちのもの、
 家へ帰ってから戸棚とだなの引出しをあけて見ろ、と不思議な事を
 言つた。言つた者には、覚えのある筈はず。いや、それがしは神通力
 も何も持っていない。あの赤い太鼓は重かつたであろう。あの中
 に小坊主こぼうずひとりいれて置いた。委細はその小坊主から聞いて知つ
 た。言つた者を、いまここで名指しをするのは容易だが、この者

とて、はじめは眞の情愛を以てこのたびの美挙に参加したのに違
いなく、酒の酔いに心が乱れ、ふつと手をのぼしただけの事と思
われる。命はたすける。おかみの慈悲に感じ、今夜、人目を避け
て徳兵衛の家の前にかの百両の金子を捨てよ。然る後は、^{しか}当人の
心次第、恥を知る者ならば都から去れ。おかみに^お於いては、とや
かくの指図無し。一同、立て。以上。」

（本朝桜陰比事、卷一の四、太鼓の中は知らぬが因果）

粹人

「ものには堪かん忍にんという事がある。この心掛けを忘れてはいけない。ちつとは、つらいだろうが我慢をするさ。夜の次には、朝が来るんだ。冬の次には春が来るさ。きまり切っているんだ。世の中は、陰陽、陰陽、陰陽と続いて行くんだ。仕合せと不仕合せとは軒続きさ。ひでえ不仕合せのすぐお隣りは一陽来復の大吉さ。ここの道理を忘れちゃいけない。来年は、これあ何としても大吉にきまつた。その時にはお前も、芝居の変り目ごとに駕籠かごで出掛けるさ。それくらいぜいたくの贅沢は、ゆるしてあげます。かまわない

から出掛けなさい。」などと、朝飯を軽くすましてすぐ立ち上り、つまらぬ事をもつともらしい顔して言いながら、そそくさと羽織をひっかけ、脇差^{わきざし}さし込み、きようは、いよいよ大晦日^{おおみそか}、借金だらけのわが家から一刻も早くのがれ出るふんべつ。家に一銭でも大事の日なのに、手箱の底を掻^かいて一歩^{いちぶ}金二つ三つ、小粒銀三十ばかり財布に入れて懷中にねじ込み、「お金は少し残して置いた。この中から、お前の正月のお小遣いをのけて、あとは借金取りに少しずつばらまいてやって、無くなったら寝ちまえ。借金取りの顔が見えないように、あちら向きに寝ると少しは気が楽だよ。ものには堪忍という事がある。きよう一日の我慢だ。あちら向きに寝て、死んだ振りでもしているさ。世の中は、陰陽、陰陽。」

と言ひ捨て、小走りに走つて家を出た。

家を出ると、急にむずかしき顔して衣紋えもんをつくろい、そり身に

なつてそろりそろりと歩いて、物持の大旦那おおだんながしもじもの景氣、

世のうつりかわりなど見て廻まわつているみたいな余裕ありげな様子

である。けれども内心は、天神様や観音様、南無八幡大菩薩なむはちまんたいぼさつ、

不動明王まりしてん摩利支天、べんてん大黒、仁王におうまで滅茶苦茶めっちゃにありとあ

らゆる神仙のお名を称となえて、あわれきよう一日の大難のがれさせ

給たまえ、たすけ給えと念じて眼めのさき真暗、全身鳥肌とりはだ立って背筋

から油汗がわいて出て、世界に身を置くべき場所も無く、かかる

地獄の思ひの借財者の行きつくところは一つ。花街である。けれ

どもこの男、あちこちの茶屋に借りがある。借りのある茶屋の前

は、からだをななめにして蟹かにのように歩いて通り抜け、まだいち

ども行つた事の無い薄汚い茶屋の台所口からぬつとはいり、

「婆はいるか。」と大きく出た。もともとこの男の人品じんぴん骨こつ柄がら

は、いやしくない。立派な顔をしている男ほど、借金を多くつく

っているものである。悠然ゆうぜんと台所にあがり込み、「ほう、ここ

はまだ、みそかの支払いもすまないと見えて、あるわ、あるわ、

書附かきつけが。ここに取りちらかしてある書附け、全部で、三、四十

両りょうくらいのものか。世はさまざま、しめて三、四十両の支払いをす

ます事も出来ずに大晦日を迎える家もあり、また、わしの家のよ

うに、呉服屋の支払いだけでも百両、お金は惜しいと思わぬが、

奥方いしやうのあんな衣裳いしやう道楽は、大勢の使用人たちの手前、しめしの

つかぬ事もあり、こんどは少しひかえてもらわなくては困るです。こらしめのため、里へかえそうかなどと考えているうちに、あいにくと懷妊^{かいにん}で、しかも、きようこの大晦日のいそがしい中に、産氣づいて、早朝から家中が上を下への大混雜。生れぬさきから乳母を連れて来るやら、取揚婆^{とりあげばば}を三人も四人も集めて、ばかばかりかしい。だいたい、大長者から嫁をもらったのが、わしの不覺。奥方の里から、けさは大勢見舞いに駈^かけつけ、それ山伏、それ祈^き禱^{とう}、取揚婆をこつちで三人も四人も呼んで来てあるのに、それでも足りずに医者^{なべ}を連れて来て次の間に控えさせ、これは何やら早め薬とかいって鍋^{なべ}でぐつぐつ煮てござる。安産のまじないに要るとか言つて、子安貝^{こやすがい}、海馬^{かいば}、松茸^{まつたけ}の石づき、何の事やら、わ

けのわからぬものを四方八方に使いを走らせて取寄せ、つくづく金持の大袈裟おおげさな騒ぎ方にあいそがきました。旦那様は、こんな時には家にいぬものだと言われて、これさいわい、すたころここへ逃げて来ました。まるでこれでは、借金取りに追われて逃げて来たような形です。きようは大晦日だから、そんな男もあるでしょうね。気の毒なものだ。いったいどんな気持だろう。酒を飲んでも酔えないでしょうね。いやもう、人さまさま、あはははは。」と力の無い笑声を発し、「時にどうです。言うも野暮だが、もちろん大晦日の現金払いで、子供の生れるまで、ここで一日あそばせてくれませんか。たまには、こんな小さい家で、こつそり遊ぶのも悪くない。おや、正月の鯛たいを買いましたね。小さい。家が小

さいからって遠慮しなくたっていいでしょう。何も縁起ものだ。もつと大きいのを買ったらどう？」と軽く言つて、一步金一つ、婆の膝ひざの上に投げてやった。

婆は先刻から、にこにこ笑つてこの男の話に相槌あいづちを打つてい

たが、心の中で思うよう、さてさて馬鹿ばかな男だ、よくもまあそん

な大嘘おおうそがつけたものだ、お客の口先を真に受けて私たちの商売

が出来るものか。酔狂のお旦那がわざと台所口からはいつて来て、

私たちをまごつかせて喜ぶという事も無いわけではないが、眼つ

きが違いますよ。さつき、台所口から覗のぞいたお前さんの眼つきは、

まるで、とがにんの眼つきだった。借金取りに追われて来たのさ。

毎年、大晦日になると、こんなお客が二、三人あるんだ。世間に

は、似たものがたくさんある。玉虫色のお羽織に白柄しらつかの脇差、
 知らぬ人が見たらお歴々と思うかも知れないが、この婆ばあの目から
 見ると無用の小細工。おおかた十五も年上の老女にようぼう房ばうをわず
 かの持参金を目当てにもらい、その金もすぐ使い果し、ぶよぶよ
 太ふつて白髪頭しらがあたまの女房が横坐ずわりに坐つて鼻の頭に汗を掻かきながら
 晩酌ばんしやくの相手もすさまじく、稼かせぎに身がはいらず質しちばち八置いて、
 もつたいなくも母親には、黒米からうすの碓うすをふませて、弟には煮豆売り
 に歩かせ、売れ残りの酸すくなった煮豆は一家のお惣菜そうざい、それも
 母御ぼあの婆ばあさまが食べすぎると言つて夫婦でじろりと睨にらむやつさ。
 それにしても、お産の騒さわぎとは考えた。取揚婆が四人もつめかけ、
 医者いしやは次の間で早め薬とは、よく出来た。お互いに、そんな身分

になりたいたいのさね。大阿呆め。おおあほう お金は、それでもいくら持

っているようだし、現金払いなら、こちらは客商売、まあ、ごゆるりと遊んでいらつしやい。とにかく、この歩金、いただいて置きましょう、にせがね 贋金でもないようだ。

「やれうれしや、」と婆はこぼれるばかりの愛嬌あいきようを示して、

歩金を押しいただき、「鯛など買わずに、この金は亭主ていしゅに隠

して置いて、あたしの帯でも買しましょう。おほほほ。ことしの

年の暮は、貧乏神と覚悟していたのに、このような大黒様が舞い込んで、これで来年中の仕合せもきまりました。お礼を申し上げますよ、旦那。さあ、まあ、どうぞ。いやですよ、こんな汚い台所などにお坐りになっていらしては。洒落しやれすぎますよ。あんまり

恐縮で冷汗が出るじゃありませんか。なんぼ何でも、お人柄にか
かりますよ。どうも、長者のお旦那に限って、台所口が大好き
で、困ってしまいます。貧乏所帯の台所が、よつぽどもの珍らし
いと見える。さ、^{すい}粋にも程度がございます。どうぞ、奥へ。」世
におそろしきものは、茶屋の婆のお世辞である。

お旦那は、わざとはに cand 頭を搔き、いやもう婆にはかなわ
ぬ、と言つてなよなよと座敷に上り、

「何しろたべものには、わがままな男ですから、そこは油断なく、
たのむ。」と、どうにもきざな事を言つた。婆は内心いよいよ呆^{あき}
れて、たべものの味がわかる顔かよ。借金で首がまわらず青息吐
息で、火を吹く力もないような情ない顔つきをしている癖に、た

べものにわがままは大笑いだ。かゆの半杯も喉のどには通るまい。料理などは、むだな事だ、と有合せの卵二つを銅壺どうこに投げ入れ、一ばん手数のかからぬ料理、うで卵にして塩を添え、酒と一緒に差出せば、男は、へんな顔をして、

「これは、卵ですか。」

「へえ、お口に合いますか、どうですか。」と婆は平然たるものである。

男は流石さすがに手をつけかね、腕組みして渋面づくり、

「この辺は卵の産地か。何か由緒ゆいしよがあらば、聞きたい。」

婆は嘖き出したいのを怵こらえて、

「いいえ、卵に由緒も何も。これは、お産に縁があるかと思つて、

婆の志。それにまた、おいしい料理の食べあきたお旦那は、よく、うで卵など、酔興に召し上りますので、おほほ。」

「それで、わかった。いや、結構。卵の形は、いつ見てもよい。いつその事、これに目鼻をつけてもらいましょうか。」と極めてまずい洒落を言った。婆は察して、売れ残りの芸者ひとりを呼んで、あれは素性の悪い大馬鹿の客だけれども、お金はまだいくらか持っているようだから、大晦日の少しは稼ぎになるだろう、せいぜいおだててやるんだね、と小声で言いふくめて、その不細工の芸者を客の座敷に突き出した。男は、それとも知らず、

「よう、卵に目鼻の御入来。」とはしゃいで、うで卵をむいて、食べて、口の端に卵の黄味をくつつけ、或^{ある}いはきようは惚^ほれられ

るかも知れぬと、わが家の火の車も一時わすれて、お酒を一本飲み、二本飲みしているうちに、何だかこの芸者、見た事があるよ
うな気がして来た。馬鹿ではあるが、女に就いての記憶は悪強い
男であつた。女は、大晦日の諸支払いの胸算用をしながらも、う
わべは春の如く、^{ごと}ただ矢鱈^{やたら}に笑つて、客に酒をすすめ、

「ああ、いやだ。また一つ、としをとるのよ。ことしのお正月に、
十九の春なんて、お客さんにかかわれ、羽根を突いてもたのし
く、何かいい事もあるかと思つて、うかうか暮しているうちに、
あなた、一夜明けると、もう二十じやないの。^{はたち}はたちなんて、い
やねえ。たのしいのは、十代かぎり。こんな派手な振袖^{ふりそで}も、も
う来年からは、おかしいわね。ああ、いやだ。」と帯をたたいて、

悶^{もだ}えて見せた。

「思い出した。その帯をたたく手つきで思い出した。」男は記憶力の馬鹿強いところを発揮した。「ちょうどいまから二十年前、お前さんは花屋の宴会でわしの前に坐り、いまと同じ事を言い、そんな手つきで帯をたたいたが、あの時にもたしか十九と言った。それから二十年経^たっているから、お前さんは、ことし三十九だ。十代もくでもない、来年は四十代だ。四十まで振袖を着ていたら、もう振袖に名残^{なごり}も無かろう。からだが小さいから若く見えるが、いまだに十九とは、ひどいじゃないか。」と粹人も、思わず野暮の高声になって攻めつけると、女は何も言わずに、伏目になって合掌した。

「わしは仏さんではないよ。縁起でもない。拝むなよ。興覚めるね。酒でも飲もう。」手をたたいて婆を呼べば、婆はいち早く座敷の不首尾に氣附いて、ことさらに陽気に笑いながら座敷に駆けつけ、

「まあ、お旦那。おめでとうございます。どうしても、御男子ときました。」

「何が。」と客はげんな顔。

「のんきでいらつしやる。お宅のお産をお忘れですか。」

「あ、そうか。生れたか。」何が何やら、わけがわからなくなつて来た。

「いいえ、それはわかりませんが、いまね、この婆がたたみざん畳算で

占^{うらな}つてみたところ、あなた、三度やり直しても同じ事、どうして

も御男子。私の占いは当りますよ。旦那、おめでとうございます。
。」と両手をついてお辞儀をした。

客は、まぶしそうな顔をして、

「いやいや、そう改つてお祝いを言われても痛みいる。それ、こ
れはお祝^{しゅうぎ}儀。」と、またもや、財布から、歩金一つ取り出し
て、婆の膝元に投げ出した。とても、いまましい気持である。

婆は歩金を押しいただき、

「まあ、どうしましょうねえ。暮から、このような、うれしい事
ばかり。思えば、きよう、あけがたの夢に、千羽の鶴^{つる}が空に舞い、
四海波^{しかいなみ}押しわけて万亀^{ばんき}が泳ぎ、」と、うつとりと上目使いして物

語をはじめながら、お金を帯の間にしまい込んで、「あの、本当でございますよ、旦那。眼がさめてから、やれ不思議な有難い夢よ、とひどく気がかりになつていたところにあなた、いきなお旦那が、お産のすむまで宿を貸せと台所口から御入来ですものねえ、夢は、やっぱり、正夢、まさゆめこれも、日頃のお不動信心のおかげでございましょうか。おほほ。」と、ここを先途と必死のお世辞。せんど

あまりと言えば、あまりの齒の浮くような見え透いたお世辞ゆえ、客はたすからぬ氣持で、

「わかつた、わかつた。めでたいよ。ところで何か食うものはないか。」と、にがにがしげに言い放つた。

「おや、まあ、」と婆は、大袈裟にのけぞつて驚き、「どうかと

心配して居おりましたのに、卵はお氣に召したと見え、残らずおあがりになつてしまつた。すいなお方は、これだから好きさ。たべものにあきたお旦那には、こんなものが、ずいぶん珍らしいと見える。さ、それでは、こんど何を差し上げましょうか。数の子など、いかが？」これも、手数がかからなくていい。

「数の子か。」客は悲痛な顔をした。

「あら、だつて、お産にちなんで数の子ですよ。ねえ、つぼみさん。縁起ものですものねえ。ちよつと洒落た趣向じやありませんか。お旦那は、そんな酔興なお料理が、いちばん好きだつてさ。」
と言ひ捨てて、素早く立ち去る。

旦那は、いよいよ、むずかしい顔をして、

「いまあの婆は、つぼみさん、と言ったが、お前さんの名は、つぼみか。」

「ええ、そうよ。」女は、やぶれかぶれである。つんとして答える。

「あの、花の蕾つぼみの、つぼみか。」

「くだいわねえ。何度言つたつて同じじゃないの。あなただつて、頭の毛が薄いくせに何を言つてるの。ひどいわ、ひどいわ。」と言つて泣き出した。泣きながら、「あなた、お金ある？」と露骨な事を口走った。

客はおどろき、

「すこしは、ある。」

「あたしに下さい。」色気も何もあつたものでない。「こまつて
いるのよ。本当に、ことしの暮ほど困つた事はない。上の娘をよ
そにかたづけて、まず一安心と思つていたら、それがあなた、一
年経つか経たないうちに、乞食こじきのような身なりで赤子をかかえ、
四、五日まえにあたしのところへ歸つて来て、亭主が手拭てぬぐいをさ
げて銭湯へ出かけて、それつきり他ほかの女のところへ行つてしまつ
た、と泣きながら言うけれど、馬鹿らしい話じゃありませんか。
娘もぼんやりだけど、その亭主もひどいじゃありませんか。育ち
がいいとかいって、のつぺりした顔の、俳諧はいかいだか何だかお得意
なんだそうで、あたしは、はじめっから気がすすまなかつたのに、
娘が惚れ込んでしまっているものだから、仕方なく一緒にさせた

ら、銭湯へ行つてそのまま家へ帰らないとは、あんまり人を踏みつけていますよ。笑い事じゃない。娘はこれから赤子をかかえて、どうなるのです。」

「それでは、お前さんに孫もあるのだね。」

「あります。」とにこりともせず言い切つて、ぐいと振り挙げた顔は、凄^{すげ}かった。「馬鹿にしないで下さい。あたしだって、人間のはしくれです。子も出来れば、孫も出来ます。なんの不思議も無いじゃないか。お金を下さいよ。あなた、たいへんなお金持だつていうじやありませんか。」と言つて、頬^{ほお}をひきつらせて妙に笑つた。

粹人には、その笑いがこたえた。

「いや、そんなでもないが、少しなら、あるよ。」とうろたえ氣味で、財布から、最後の一步金を投げ出し、ああ、いまごろは、わが家の女房、借金取りに背を向けて寝て、死んだ振りをしてい
るであろう、この一步金一つでもあれば、せめて三、四人の借金
取りの笑顔を見る事は出来るのに、思えば、馬鹿な事をした、と
後悔やら恐怖やら焦しょうそう躁やらで、胸がわくわくして、生きて居
られぬ氣持になり、

「ああ、めでたい。婆の占いが、男の子とは、うれしいね。なか
なか話せる婆ではないか。」

とかすれた声で言つてはみたが、蕾は、ふんと笑つて、

「お酒でもうんと飲んで騒ぎましょうか。」と万事を察してお銚ち

子ようしを取りに立った。

客はひとり残されて、暗あん懣たん、憂愁、やるかたなく、つい、苦しまぎれのおならなど出て、それもつまらない思いで、立ち上つて障子をあけて匂においを放散させ、

「あれわいさのさ。」と、つきもない小唄こうたを口ずさんで見たが一向に氣持が浮き立たず、やがて、三十九歳の蕾を相手に、がぶがぶ茶碗酒ちやわんざけをあおつても、ただ兩人まじめになるばかりで、顔を合せては溜息ためいきをつき、

「まだ日が暮れぬか。」

「冗談でしょう。おひるにもなりません。」

「さてさて、日が永い。」

地獄の半日は、竜宮^{りゅうぐう}の百年千年。うで卵のげつぷばかり出

て悲しさ限りなく、

「お前さんはもう帰れ。わしはこれから一寝入りだ。眼が覚めた頃には、お産もすんでいるだろう。」と、いまは、わが嘘にみずから苦笑し、ごろりと寝ころび、

「本当にもう、帰ってくれ。その顔を二度とふたたび見せてくれるな。」と力無い声で歎願^{たんがん}した。

「ええ、帰ります。」と蕾は落ちついて、客のお膳^{ぜん}の数の子を二つ三つ口にほうり込み、「ついでに、おひるごはんを、ここでごちそうになりましょう。」と言った。

客は眼をつぶっても眠られず、わが身がぐるぐる大渦卷^{おおうずまき}の底

にまき込まれるような氣持で、ばたんばたと寝返りを打ち、南な無阿弥陀むあみだ、と思わずお念仏が出た時、廊下に荒き足音がして、

「やあ、ここにいた。」と、丁稚でっちらしき身なりの若い衆二人、部屋に飛び込んで来て、「旦那、ひどいじゃないか。てつきり、この界限かいわいと見込みをつけ、一軒一軒さがして、いやもう大骨折さ。無いものは、いただこうとは申しませんが、こうしてのんきそうに遊ぶくらいのお金があったら、少しはこつちにも廻してくるものですよ。ええと、ことしの勘定は、」と言って、書附けを差出し、寝ているのを引起して、詰め寄って何やら小声で談判ひとしきりの後、財布の小粒銀ありつたけ、それに玉虫色のお羽織しらつか、白柄しらつかの脇差、着物までも脱がせて、若衆二人それぞれ風呂敷ふろしきに

包んで、

「あとのお勘定は正月五日までに。」と言ひ捨て、いそがしそうに立ち去った。

粹人は、下着一枚の奇妙な恰好かつこうで、氣味わるくにやりと笑ひ、「どうもねえ、友人から泣きつかれて、判を押してやったが、その友人が破産したとやら、こちらまで、とんだ迷惑。金を貸すとも、判は押すな、とはこここのところだ。とかく、大晦日には、思わぬ事がしゅったい致す。この姿では、外へも出られぬ。暗くなるまで、ここで一眠りさせていただきましょう。」と、これはまたつらい狸寝入りたぬきねい、陰陽、陰陽と念じて、わが家の女房と全く同様の、死んだ振りの形となった。

台所では、婆と蕾が、「馬鹿というのは、まだ少し脈のある人の事」と話合つて大笑いである。とかく昔の浪花ななわあたり、このよ
うな粹人とおそろしい茶屋が多かつたと、その昔にはやはり浪花
の粹人のひとりであつた古老の述懐。

（胸算用、むねさんよう巻二の二、うそ訛言も只は聞かぬ宿）

遊興戒

むかし^{かみがた}上方の三粹人、吉郎兵衛、六右衛門、甚^{じん}太夫とて、
 としは若^{わか}し、家に金あり、親はあまし、男振りもまんざらでなし、
 しかも、話にならぬ阿呆^{あほう}というわけでもなし、三人さそい合つて
 遊び歩き、そのうちに、上方の遊びもどうも手ぬるく思われて来
 て、生き馬の目を抜くとかいう東国の荒っぽい遊びを風聞してあ
 こがれ、或^あるとし秋風に吹かれて江戸へ旅立ち、途中、大笑いの
 急がぬ旅をつづけて、それにしても世の中に美人は無い、色が白
 ければ鼻が低く、眉^{まゆ}があざやかだと思えば顎^{あご}が短い、いつそこう

なれば女に好かれるよりは、きらわれない、何とかして思い切り
 むごく振られてみたいものさ、などと天を恐れぬ雑言ぞうごんを吐き散
 らして江戸へ着き、あちらこちらと遊び廻まわつても、別段、馬
 の目を抜く殺伐なけしきは見当らず、やはりこの江戸の土地も金
 次第、どこへ行つても下にも置かずもてなされ、甚はなはだ拍子抜けが
 して、江戸にもこわいもの無し、どこかに凄すげい魔性のものはいな
 いか、と懐手ふところして三人、つまらなそうな様子で、上野黒門くろもん
 より池いけの端はたのほうへぶらりぶらり歩いて、しんちゅう屋いぢえの市右衛
 門もんとて当時有名な金魚屋の店先にふと足をとどめ、中庭を覗のぞけば
 綺麗きれな生簀いけすが整然と七、八十もならび、一つ一つの生簀には清水
 が流れて水底には緑の藻もがそよぎ、金魚、銀魚、藻をくぐり抜け

て鱗を光らせ、中には尾鰭おひれの長さ五寸以上のものもあり、生意氣な三粹人も、その見事さには無邪氣に眼めを丸くして驚き、日本の美人をここで見つけたと騒ぎ、なおも見ていると、その金魚を五両、十両の馬鹿ばか高い値段で、少しも値切らず平気で買って行く人が次々とあるので、やっぱり江戸は違う、上方には無い事だ、あの十両の金魚は大名の若様のおもちやであろうか、三日養つて猫ねこに食われてそれでも格別くやしそうな顔もせずまたこの店へ来て買うのであろうな、いかさま武蔵野むさしのは広い、はじめて江戸を見直したわい、などと口々に勝手な事を言つて単純に興奮し、これを見ただけでも江戸へ来たかいがあつた、上方へのよい土産話が出来た、と互いによろこび首肯うなずき合っているところへ、賤いやしい身

なりの小男が、小桶こおけに玉網たまもを持ち添えてちよこちよこと店へやつて来て、金魚屋の番頭ばんとうにやたらにお辞儀しげいをしてお追つい従しやう笑いなどしている。小桶を覗いてみると無数のぼうふらがうようよ泳いでいる。

「金魚のえさか。」とひとりが興覚め顔つぶやして呟つぶやいた。

「えさだ。」もうひとりも、溜息ためいきをついて言つた。

何だか白けた真面目まじめな気持ちになつてしまった。たかが金魚を、一つ十両で平然と買つて行く人もあり、また一方では、その餌えさのぼうふらぼうふらを売つて、ほそぼそと渡世わたりよめしている人もある。江戸は底知れずおそろしいところだ、と苦勞知らずの三粹人も、さすがに感無量の態ていであつた。

小桶に一ぱいのぼうふらを、たった二十五文で買ってもらつて、それでも嬉し^{うれ}そうに、金魚屋の下男にまで、それではまた、と卑^{いや}しい愛^{あい}嬌^{きよう}を振り撒^まきいそいと立ち去るその小男のうしろ姿を見送つてひとりが、

「おや、あれは、利左^{りざ}じゃないか。」と言つたので、他^{ほか}の二人は、ぎよつとした。

月夜の利左という浮名を流し、それこそ男振りはよし、金はあり、この三粹人と共に遊んで四天王と呼ばれ、数年前に吉州という評判の名妓^{めいぎ}を請出^{うけだ}し、ふつと姿をかくした利左衛門^{りざえもん}、それが、まさか、と思えども見れば見るほど、よく似ている。

「利左だ、間違いない。」とひとりは強く断定を下し、「あの右

肩をちよつと上げて歩く癖は、むかしから利左の癖で、あれがまた小粋こいきだと言つて、わしにも右肩を上げて歩けとうるさくすすめる女があつて閉口した事がある。利左に違いない。それ、呼びとめろ。」

三人は走つて、ぼうふら売りをつかまえてみると、むざんや、まさしく利左がなれの果。

「利左、お前はひどい。吉州には、わしも少し惚ほれていたが、何もお前、そんな、わしはお前を恨みに思つたりなんかしてやしないう。黙つて姿を消すなんて、水くさいじゃないか。」

と吉郎兵衛が言えば、甚太夫も、

「そうよ、そうよ。どんなつらい事情があつたつて、一言くらい

わしたちに挨拶あいさつして行くのが本当だぞ。困った事が起つた時には、お互い様さ。茶屋酒のんで騒ぐばかりが友達じゃない。見れば、ひでえ身なりで、まあ、これがあの月夜の利左かい。わしたちにたった一言でも知らせてくれたら、こんな事になりはしなかつたのに、ぼうふら売りとは洒落しゃれが過ぎらあ。」と悪口を言いながら涙を流し、六右衛門は分別顔して、利左衛門の瘦やせた肩たを叩たたき、

「利左、でも、逢あえてよかった。どこへ行つたかと心配していたのだ。お前がいなくなったら、淋さびしくてなあ。上方の遊びもつまらなくなつて、こうして江戸へ出て来たが、お前と一緒にでないと、どこの遊びも面白おもしろくない。ここで逢あうたが百年目さ。どうだい、

これから、わしたちと一緒に上方へ歸つて、また昔のように四人で派手に遊ぼうじゃないか。お金の事や何かは心配するな。口はばつたいが、わしたち三人が附ついている。お前の一生は引受けた。
。」

と頼もしげな事を言つたが、利左は、顔を青くしてふんと笑い、そつぽを向きながら、

「何を言つていやがる。人の世話など出来る面つらかよ。わざわざこの利左をなぶりに上方からやつて来たのか。御苦労な事だ。こつちらは、これが好きでやっているのさ。かまわないでくれ。遊びの果は皆こんなものだ。ふん。いまにお前たちだつて、どんな事になるかわかつたものじゃない。一生引受けたは笑わせやがる。で

もまあ昔の馴染なじみがい甲斐いに江戸の茶碗酒ちやわんざけでも一ぱい振舞つてやろうか。利左は落ぶれてもお前たちのごちそうにはならんよ。酒を飲みたかったら附いて来い。あはは。」と空虚な笑い方をして、小桶を手をさげてすたすた歩く。三人は、氣まずい思いで顔を見合せ、とにかく利左の後を追つて行くと、利左はひどく汚い居酒屋へのこのこはいつて行つて、財布をさかさに振り、

「おやじ、これだけある。昔の朋輩ほうばいにおごつてやるんだ。茶碗で四はい。」と言つて、昔に變らず氣前のいいところを見せたつもりで、先刻の二十五文を残らず投げ出せば、入口でうろうろしている三人は、ああ、あの金は利左の妻子が今夜の米代としてあてにして、いまごろは鍋なべを洗つて待っているだろうに、おちぶれ

ても、つまらぬ意地と見栄みえから、けちでないところを見せたつもりかも知れないが、あわれなものだ、と暗然とした。

「おい、まごまごしてないで、ここへ腰かけて飲めよ。茶碗酒の味も忘れられぬ。」と口をゆがめて苦笑いしながら、わざと下品にがぶがぶ飲み、手の甲で口のまわりをぐいとぬぐって、「ああ、うめえ。」とまんざら嘘うそでもないように低く呻うめいた。三人も、おそろおそろ店の片隅かたすみに腰をおろして、欠けた茶碗を持ち無言で乾盃かんぱいして、少し酔って来たので口も軽くなり、

「時に利左、いまでも、やはり吉州と？」

「いまでも、とは何だ。」と利左は言葉を荒くして聞きとがめ、
「粹人らしくもねえ。口のききかたに気をつける。」と言って、

すぐまた卑屈ににやりと笑い、「その女ゆえに、御覽のとおりのおうふら売りさ。悪い事は言わねえ。お前たちもいい加減に茶屋遊びを切り上げたほうがいいぜ。上方一と言われた女も、手活の花として眺めると、三日経てば萎れる。いまじや、長屋の、かかになって、ひとつき風呂へ行かなくても平気でいる。」

「子供もあるのか。」

「あたりめえよ。間の抜けた事を聞くな。親にも似ねえ猿みみたいな顔をした四つの男の子が、根っからの貧乏人の子らしく落ちついて長屋で遊んでいやがる。見せてやろうか。少しはお前たちのいましめになるかも知れねえ。」

「連れて行ってくれ。吉州にも逢いたい。」と吉郎兵衛は本音を

吐いた。利左は薄気味悪い微笑を頬ほおに浮べて、

「見たら、あいそが尽きるぜ。」と言ひ、蹠そうろう蹠と居酒屋を出た。

やなか

谷中の秋の夕暮は淋しく、江戸とは名ばかり、このあたりは大

おたけやぶ

うぐいす

すずめ はつねちよう

竹藪風にざわつき、鶯ならぬむら雀の初音町のはずれ、薄暗

くじめじめした露路を通り抜けて、額におしめの滴しずくを受け、かほ

ちやの蔓つるを跨またぎ越え、すえ葉も枯れて生垣いけがきに汚くへばりついて

いる朝顔の実一つ一つ取り集めている婆ばばの、この種を植えてまた

来年のたのしみ、と来年どころか明日知れぬ八十あまりらしい見

るかげも無き老軀ろうくを忘れて呟よいている慾の深さに、三人は思わず

顔を見合せて呆あきれ、利左ひとり、何ともない顔をして小腰をか

がめ、婆さま、その朝顔の実を一つ二つわしの家へもわけて下さ

いまし、何だか曇つてまいりましていけませぬ、など近所のよし
み、有合せのつらいお世辞を言い、陰干しの煙草たばこをゆわえた細ほそな
縄わの下をくぐつて突き当りのあばらやの、窓から四歳の男の子
が、やあれ、ととさまが、ぜぜ持つてもどらしやった、と叫ぶも
ふびん、三人の足は一樣に立ちすくんだ。利左は平氣を装い、
「ここだ、この家だ。三人はいつたら、坐すわるところが無いぞ。」
と笑い、「おい、お客さまだぞ。」と内儀に声を掛けければ、内よ
り細き声して、

「そのお三人のうち、伊豆屋吉郎兵衛いずやさま、お帰り下さいまし。
そのお方には昔お情にあずかった事がございます。」という。吉
郎兵衛へどもどして、

「いや、それはお固い。昔の事はさらりと水に流して。」と言え
ば、利左も、くるしそうに笑い、

「そうだ、そうだ。長屋の嬢かかにお情もなくもあるものか。自惚うぬぼれち
やいけねえ。」とすさんだ口調で言い、がたぴし破戸やれどをあけて三
人を招き入れ、「座蒲団ざぶとんなんて洒落たものはねえぞ。お茶くらい
は出す。」

女房にようぼうは色青ざめ、ぼろの着物の裾すそをそそくさと合せて横坐
りに坐つて乱れた髪を掻かき上げ、仰向いて三人の顔を見て少し笑
い、

「まあ。」と小さい声で言つたきり、お辞儀をするのも忘れてい
る。亭主ていしゅはいそがしそうに狭い部屋を歩きまわり、仏壇の戸び

らの片方はずれているのを引きむしり、菜切庖丁で打ち割つて、七輪しちりんにくべてお茶をわかし、先刻窓から顔を出していた子供はと見れば、いつの間にか部屋の隅の一枚蒲団にこぶ巻になつて寝ている。どうやらまっぱだかの様子で、唇くちびるを紫にしてがたがた寒さにふるえている。

「坊やは、寒そうだな。」と客のひとりが、つい口をすべらしたら、内儀は坐つたまま子供のほうを振り返つて見て、「着物を着るのがいやなんですって。妙な癖で、着物を着せてもすぐ脱いで、ああしてはだかで寝るんです。疳かんの虫のせいでしょうよ。」とさり気なく言つたが、坊やは泣き声を出して、

「うそだ、うそだ。坊は、さつき溝どぶへ落ちて、着るものが無くな

ったから、こうして寝かされて、着物のかわくのを待っているのだ。」という。内儀も氣丈な女ながら、ここに到^{いた}つてこらえかね、人前もはばからず、泣き伏す。亭主は七輪の煙にむせんだ振りをして眼をこする。三人の客は途方に暮れ、無言で眼まぜして帰り仕度をはじめ、挨拶もそこそこに草履^{ぞうり}をつつかけて門口に出て、それから小声^{ささや}で囁き合い、三人の所持の金子^{きんす}全部、一歩^{いちぶ}金三十八、こまがね七十目ばかり取り集め、門口に捨てられてある小皿^{こざら}の上に積みかさね、足音を忍ばせて立ち去った。狭い露路から出て、三人一緒にほっと大きい溜息をついた途端に、

「ふざけた真似^{まね}をするな！」と背後に利左の声、ぎよつとして振りむくと利左衛門は金子を載せた小皿を持ち息せき切つて、「人

の家へやって来て、お茶も飲まずに帰り、そのうえ、こんな犬の糞くそみたいなものを門口に捨てやがって、人間の付き合いの法も知らねえ鼻ったれ小僧め。よくもよくも、月夜の利左をなめやがったな。もう二度とふたたびお前たちの鼻の下の長いつらを見たくねえ。これを持つてとつとと帰れ！」と眼の色をかえて喚わめき、「馬鹿にするな！」と件の小皿くだんを地べたにたたきつけて、ふつと露路の夕闇ゆうやみに姿を消した。

「いや、ひどいめに遭った。」と吉郎兵衛は冷汗をぬぐい、「それにしても、吉州も、きたない女になりやがった。」

「色しきそく即是空ぜくくうか。」と甚太夫はひやかした。

「ほんとうに、」吉郎兵衛は、少しも笑わず溜息をつき、「わし

はもう、きょうから遊びをやめるよ。卒堵婆小町^{そとばこまち}を眼前にありありと見ました。」

「出家でもしたいところだね。」と六右衛門はひとりごとのように言い、「わしはもう殺されるのではないかと思った。おちづれた昔の友達ほどおそろしいものはない。路^{みち}で逢つても、こちらから言葉をかけるのは遠慮すべきものかも知れない。誰だい、一ばん先に言葉をかけたのは。」

「わしではないよ。」と吉郎兵衛は口をとがらせて言い、「わしは、ただ、吉州にひとめ逢いたくて、それで。」と口ごもった。

「お前だよ。」と甚太夫は冷静な口調で、「お前が一ばんさきに走つて行つて、一ばんさきに声をかけて、おまけに、また、あい

つの家へ連れて行ってくれなんて、つまらぬ事を言い出したのも、みんなお前じやないか。つつしむべきは好色の念だねえ。」

「面目ない。」と吉郎兵衛は、素直にあやまり、「以後はふつとり道楽をやめる。」

「改心のついでに、その足もとに散らばっているお金を拾い集めたらどうだ。」と六右衛門は、八つ当りの不機嫌ふきげんで、「これだつて天下の宝だ。むかし青砥左衛門尉藤綱さまが、」

「滑なめりがわ川を渡りし時、だろう。わかった、わかった。わしは土どかたにんそく

方人足というところか。さがしますよ、拾いますよ。」と吉郎

兵衛は尻端折しりばしよりして薄暗闇の地べたを這はい一歩金やらこまがねやらを拾い集めて、「こうして一つ一つにして拾ってみると、お金

のありがたさがわかつて来るよ。お前たちも、少し手伝つてごらん。まじめな気持ちになりますよ。」

さすが放埒^{ほうちやう}の三人も、昔の遊び友達の利左の浅間しい暮しを見ては、うんざりして遊興も何も味気ないものに思われ、いささか分別ありげな顔になつて宿へ帰り、翌^{あくる}日から殊勝らしく江戸の神社仏閣をめぐつて拝み、いよいよ明日は上方へ帰ろうという前夜、宿の者にたのんで少からぬ金子を谷中の利左の家へ持たせてやり、亭主は受け取るまいから、内儀にこつそり、とくどいくらいに念を押して言い含めてやったのだが、その使いの者は、しばらくして気の毒そうな顔をして帰り、お言いつけの家をたずねましたが、昨日、田舎へ立ちのいたとやら、いろいろ近所の者に

たずねて廻つても、どこへ行つたのかつに行先き突きとめる事が出来ませんでしたという口上で、三人はそれを聞いて利左の行末を思い、いまさらながら、ぞつとして、わが身の上も省^{かえり}られ、ああ、もう遊びはよそう、と何だかわけのわからぬ涙を流して誓約し、いよいよ寒さのつる木枯しに吹きまくられて、東海道を急ぎに急ぎ、おのおのわが家に帰りついてからは、人が變つたみたいにけち臭くよろずに油断のない男になり、ために色街は一時さびれたという、この章、遊興もほどほどに止むべしとの戒^{いましめ}歟^か。

（置土産、卷二の二、人には棒振虫同前に思はれ）

吉野山

拝啓。その後は、ごぶさたを申して居おります。めでたく御男子
御出生よしの由、大慶に存じます。いよいよ御家運ごりゆう御隆昌しょうの兆と、
おうらやましく思います。御一家いきいきと御家業にはげみ、御
夕食後の御団ごだん欒らんはまた格別の事でありましょう。このお正月は
御男子御出生と二つお目出度めいさなが重り、京の初春もわがものと思おもひ
召めし、ひとしお御一家の笑声も華やかに、昔の遊び仲間も集り、
都の極上の酒を酌くみかわ交し、とかく楽しみは京の町人、それにつけ
ても先年おろかな無分別を起して出家し、眼夢とやら名を変えて

吉野の奥にわけ入った九平太は、いまどうしているかしらんと、さだめし一座の笑草になさった事でございましょうね。いや味を申し上げているのではありません。眼夢、かくの如く、いまはつくづく無分別の出家遁世を後悔いたし、冬の吉野の庵室に寒さに震えて坐つて居ります。思えば、私の遁世は、何の意味もなく、ただ親兄弟を泣かせ、そなた様をはじめ友人一同にも、無用の発心やめ給え、と繁く忠告致されましたが、とめられると尚更、意地になつて是が非でも出家遁世しなければならぬような気持ちになり、とめるな、とめるな、浮世がいやになり申した、明日ありと思う心の仇桜、など馬鹿な事を喚いて剃髪してしましまして、それからすぐそつと鏡を覗いてみたら、私には坊

うずあたま

主頭が少しも似合わず、かねがね私の最も軽蔑けいべつしていた横丁

の藪やぶ医者の珍斎にそっくりで、しかも私の頭のあちこちに小さ

い禿はげがあるのを、

その時はじめて発見つかまつし、うんざりして、実は

既にその時から少し後悔していたのです。白状のしついでに私の

出家遁世の動機をも、いまは包まず申し上げますが、私はあなた

様たちのお仲間にいれてもらって一緒にお茶屋などに遊びにまい

りましたも、ついに一度も、もてた事はなく、そのくせ遊びは好

きで、あなた様たちの楽しそうな様子を見るにつけても、よし今

夜こそはと店の金をごまかし血の出るような無理算段して、私の

ほうからあなた様たちをお誘い申し、そうしてやつぱり、私だけ

もてず、お勘定はいつも私が払い、その面白おもしろくない事、

或るあ夜

やぶれかぶれになつて、女に向い、「男は女にふられるくらいでなくちや駄目だめなものだ」と言つたら、その女は素直うなずに首肯うなずき、

「本当に、そのお心掛けが大事ですわね」と真面目まじめに感心したよ
うな口調で申しますので、立つ瀬せが無く、「無礼者！」と大喝だいかつ

して女を力まかせに殴り、諸行無常を觀じ、出家にならねばならぬと覺悟を極きめた次第で、今日つらつら考えると私のような野暮やぼで物欲しげで理窟りくつっぽい男は、若い茶屋女に好かれる筈はずはなく、

親爺おやじのすすめる田舎女でも、おとなしくもらつて置けばよかつた
とひとりて苦笑致して居ります。まことに山中のひとり暮しは、
不自由とも何とも話にならぬもので、ごはんの煮たきは氣持ちも
まぎれて、まだ我慢も出来ますが、下着の破れを大あぐら搔かいて

繕い、また井戸端いどばたにしゃがんでふんどしの洗濯せんたくなどは、御不浄の仕末以上にもの悲しく、殊勝らしくお経をあげても、このお経というものも、聞いている人がいないとさっぱり張合いの無いもので、すぐ馬鹿らしくなって、ひとりで嘖き出したりして、やめてしまいます。立ち上って吉野山の冬景色を見渡しても、都の人たちが、花と見るまで雪ぞ降りけるだの、春に知られぬ花ぞ咲きけるだの、いい気持ちで歌っているのとは事違い、雪はやっぱり雪、ただ寒いばかりで、あの嘘うそつきの歌人めが、とむらむら腹が立って来ます。このように寒くては、墨染の衣一枚ではとてもしのぎ難がたく、墨染の衣の上にどてらをひっかけ、犬の毛皮を首に巻き、坊主頭もひやひやしますので寝ても起きてても頬ほ被おりし

て居ります。この犬の毛皮は、この山の下に住む里人から熊くまの皮だどだまされて、馬鹿高い値段で買わされたのですが、尻尾しっぽがへんに長くてその辺に白い毛もまじっていますので、これは、白と黒のぶちの犬の皮ではないか、と後で里人に申しますと、その白いところは熊の月の輪という部分で、熊に依よつては月の輪がお尻しりのほうについている、との返事で、あまりの事に私も何とも言葉が出ませんでした。本当に、この山の下の里人は、たちが悪くて、何かと私をだましてばかり居ります。諸行無常を觀じて世を捨てた人には、金銭など不要のものと思いのほか、里人が持つて来る米、味噌みその値段の高い事、高いと言えば、むつと怒ったような顔をして、すぐに品物を持帰るような素振りを見せて、お出家様が

御不自由していらつしやるかと思つて一日ひまをつぶしてこんな山の中に重いものを持ち運んで来るだ、いやなら仕方が無い、とひとりごとのように言い、私も、この品が無ければ餓死するより他は^{ほか}無いし、山を降りて他の里人にたのんでも同じくらいの値段を言い出すのはわかり切っていますし、泣き泣きその高い米、味噌を引きとらなければならぬのです。山には木の実、草の実が一ぱいあつて、それを気ままにとつて食べてのんきに暮すのが山居の楽しみと心得ていましたが、聞いて極楽、見て地獄とはこの事、この辺の山野にはいずれも歴とした持主がありまして、ことの秋に私がうっかり松^{まつたけ}茸を二、三本取つて、山の番人からもう少して殴り殺されるようなひどい目に遭いました。この方丈の

庵いおりも、すぐ近くの栗林くりばやしの番小屋であつたのを、私が少からぬ

家賃で借りて、庵の裏の五坪ばかりの畑だけが、まあ、わずかに

私の自由になるくらいのもので、野菜も買うとなるとなかなか高

いので、大根人蔘にんじんの種を安くゆずってもらつてこの裏の五坪の

畑に播まき、まことに興覚めな話で恐縮ですが、出家も尻端折しりばしりで

肥柄杓こえびしやくを振りまわさなければならぬ事もあり、その収穫は冬に

備えて、縁の下に大きい穴を掘つて埋めて置かなければならず、

目前に一目千本の樹海を見ながら、薪まきはやつぱり里人から買わな

いと、いやな顔をされるし、ここへ来てにわか浮世の辛酸を嘗な

め、何のための遁世やら、さつぱりわけがわからなくなりました。

遁世してこのようにお金がかかるものとは思ひも寄らず、そんな

にお金も持って来ませんでしたので、そろそろ懷中も心細くなり、何度下山を思い立ったかわかりません。けれども、一旦、いったん濁じよく世^せを捨てた法師が、またのこのこ濁世の親御の家へ帰って泣いておわびをするなどは古今に例の無い事のようにも思われますし、これでも、私にはまだ少し恥を知る気持も意地もあり、また、ここを立ちのくにしても、里人への諸支払いがだいぶたまつて居りますし、いま借りて使っている夜具や炊事道具を返すに当たってもまた金銭のややこしい問題が起るのではなからうかと思えば、下山の決心にもぶります。と言え、少していさいもいいけれども、実はもう一つ、とても私がいますぐ下山できないつらい理由があるので。京の私の家のことし八十八歳になるばさまが、大事

のへそくりの百両を、二十年ほど前に小さい茶壺ちやつぽにいれて固く蓋ふたをして、庭の植込みの奥深く、三本ならびの杉すぎの木の下に昔から屋敷に伝っているささやかなお稲荷いなりのお堂があつて、そのお堂の縁の下にお盆くらいの大きさの平たい石があるのですが、その石の下にです、れいの茶壺を埋めて置いて、朝から日の暮れるまでに三度、夜寝る前に一度、日に都合四度ずつ竹の杖つえについて庭を見廻みまわる振りをして、人知れず植込みの奥に眼めを光らせてはいつて行き、その隠し場所の安泰をたしかめ、私がまだ五つ六つの時は、ばばさまにたいへん可愛かわいがられてもいましたし、また私をほんの子供と思つて気をゆるしていたのでございましょう、或る日、私を植込みの奥に連れて行き、その縁の下のの石を指差して、

あの下に百両あるぞ、ばばを大事にした者に半分、いやいや一割あげるぞ、としわが噎れた声で言いました、私はそれ以来どうにもその石の下が気になってたまらず、二十年後あなた様たちに遊びを教えられて、たちまち金に窮して悪心起り、とうとう一夜、月の光をたよりに石の下を掘り起し、首尾よく茶壺を見つけて、その中から三十両ばかり無断で拝借して、またもつのように茶壺を埋め、上に石を載せて置き、ばばさまに見つかると、ひやひやしてしばらくは御飯ものにとおらず、天を拝し地に伏してひたすら無事を念じ、ばばさまはやっぱりお年のせいかな、あのように眼を光らせても石の下まで見抜く事は出来なかった様子で、毎日四度ずつ調べに行っても平気な顔で帰って来るので、私も次第に大胆に

なり、その後も十両、二十両と盗み、やがて無常を觀じて出家する時には、残っている金をそっくり行きがけの駄賃だちんとして拝借して旅立つたようなわけで、あのばばさまの生きていらつしやる限り、私はおそろしくて家へ歸る事が出来ないのです。ばばさまは、まだきつとあの茶壺のからっぽな事にはお氣きづ附きなさらず、相變らず日に四度ずつ見廻りに行っている事でありましたが、お氣附きなさらぬままで頓死とんしでもなさったならば、ばばさまも仕合せ、また私の罪も永遠にうやむやになって、大手を振って家へ歸れるというわけになるのです。けれども、ばばさまのあのお元氣では、きつと百まで生きるでしょうし、頓死など待っているうちに、孫の私のほうが山中の寒さに凍こごえ死にするような事になるかも知れ

ません。思えば思うほど、心細くなります。昔の遊び友達、ある
 いは朝湯で知合った人、または質屋の手代^{てだい}、出入りの大工、駕籠^{かご}
 かきの九郎助にまで、とにかく名前を思い出し次第、知っている
 人全部に、吉野山の桜花の見事さを書き送り、おしなべて花の盛
 りになり^{はごと}にけり山の端毎^{はごと}にかかる白雲、などと古人の歌を誰^{だれ}の歌
 とも言わず、ちよつと私の歌みたいに無雑作らしく書き流し、遊
 びに来て下さい、と必ず書き添えて、またも古人の歌「吉野山や
 がて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらむ」と思わせぶり
 に書き結び、日に二通も三通も里人に頼んで都に送り、わがまこ
 との心境は「吉野山やがて出でんと思ふ身を花散る頃はお迎へた
 のむ」というような馬鹿げたものにて、みずから省みて苦笑の他

なく、けれども、かかるせつなき真赤な嘘もまた出家の我慢忍にんに

辱くと心得、吉野山のどこに住み易やすげに四方八方へ書き送り、さ

て、待てども待てども人ひとり訪ねて来るどころか、返事さえ無

く、あの駕籠かきの九郎助など、かねがね私があればたくさん

酒手をやり、どこへ行くにも私のお供で、若旦那わかだんなが死ねばおら

も死にますなどと言っていたくせに、私があればどていねいな手

紙を書き送ってやったのに一片の返事も寄こさぬとは、ひどいじ

やありませんか。九郎助に限らず、以前あんなに私を気前がいい

の、正直だの、たのもしいだのと褒ほめていた遊び仲間たちも、ど

うした事でしょう、私が出家したら、ぱったり何もお便りを下さ

らず、もう私が何もあの人たちのお役に立たない身の上になった

から、それにくるりと背を向けたというわけなのでしょいか、それにしても、あまり露骨でむごいじゃありませんか。こんなに皆から爪はじきつまされるとは心外です。私はいったいどんな悪い事をしたのでしよう。ばばさまのへそくりを拝借したとしても、それは一家の内の事で、また、地中に埋もれた財宝を、掘り出して世に活用せしめたのは考え様に依よつては立派な行為とも言えると思うのです。しかも、諸行無常を觀じ出家遁世するのは、上品な事で、昔の偉い人はたいいていこれをやっているのです。それくらいの事は、皆さまにもわかりそうなものです。それなのに、私を輕蔑して仲間はずれにしようとなさる。それは、あんまりですよ。

私は決して下品な男ではないんです。これから大いに勉強もしよ

うと思つてゐるのです。出家というものは、高貴なものです。馬鹿になさらず、どうかどうかお見捨てなく、いつまでもお附き合いを願います。たまにはお手紙も下さいよ。あんなに皆に遊びに來いと書き送つてやつたのだから、誰かひとり、ひよつとしたらお見えになるかも知れぬ、と毎日毎日むなしく待ちこがれ、落葉が風に吹かれて地を這^はう音を、都の人の足音かと飛立つて外に駈^かけ出し、蕭^{しょうじょう}条^{じょう}たる冬木立を眺めて溜^{ため}息^{いき}をつき、夜は早く寝て風が雨戸をゆり動かすのを、もしや家から親御さまのお迎えかなど、うちも無い空頼みしていそいで雨戸をあけると寒月皎々^{こうこう}と中空に懸^かり、わが身ひとつはもとの身にして、南無阿弥陀心^{なむあみだ}底からの御念仏を申し、掛蒲団^{かけぶとん}を裏返しにして掛けて寝ると恋

しい女の面影おもかげを夢に見ると言伝えられているようですから、こんな淋さびしい夜にこそ、と思うのですが、さて、私にはこれぞと定きまった恋人も無く、誰でもいいというものの、さあ、誰の面影が出るか、など考えて、実に馬鹿らしくなり、深夜暗闇くらやみの中でひとりくすくす笑ってしまいました。ばばさまの面影などが出ては、たまりません。こんな味気ない夜には、お酒でもあると助かるのですが、この辺の地酒は、へんにすっぱくて胸にもたれ、その上、たいへん高価なので、いまいまして、十日にいちど五合くらい買って我慢しています。この山里の人は、何かと慾よくが深く、この下の溪流には鮎あゆがうようよいいて、私は出家の身ながら、なまぐさを時たま食べないと骨ばなれして五体がだるくてたまらなくなりま

すので、とって食おうと思い、さまざま工夫してみましたが、鮎もやはり生しょうるい類、なかなかすばしこく、不器用な私にはとても捕獲出来ず、そのような私のむだな努力の姿を里人に見つけられ、里人は私のなまぐさ坊主たる事を看破致し、それにつけ込んで、にやにや笑いながら鮎の串くし焼やきなど持って来て、おどろくほど高いお金を請求いたします。私は、もうここの里人から、すっかり馬鹿にされて、どしどしお金を捲まき上げられ、犬の毛皮を熊の毛皮だと言って買わされたり、また先日は、すりばちをさかさにして持って来て、これは富士山の置き物で、御出家の床の間にふさわしい、安くします、と言ひ、あまりに人をなめた仕打ち故ゆえ、私はくやし涙にむせかえました。それにつけても、お金が欲しく、

そろそろ富籤とみくじの当り番がわかった頃ころだと思いますが、私のは、たしか、イの六百八十九番だはずった筈です。当っているでしょうか。あの富籤を、京の家の私の寝間、床柱の根もとの節穴に隠して置きましたが、お願いですから、親爺に用ありげな顔をして私の家へ行き、寝間に忍び込んで床柱の根もとの節穴に指を突き込み、富籤を捜し出して、当っているかどうか、調べてみて下さい。当っているといいんですけれどもね。たぶん当っていないかと思いますが、でも、とにかく、念のために調べて見て下さいまし。お願いついでに、橋向うの質屋へ行つて、私がたしか一両であずけて置いた二寸ばかりの小さな観音像を受け出して下さいませんか。他の品は、みな流してもいいのです。あの観音像だけは、是非と

も受け出して下さい。あれは、ばばさまからおまもりとして幼少の頃もらったもので、珊瑚さんごに彫ったものですから、一両では安すぎるのです。受け出して、道具屋の佐兵衛に二十両で売って下さい。佐兵衛は、あれを二十両でいつでも引取ると言っていたのです。ついでに私の寝間の、西北の隅すみの畳の下に色紙一枚かくしてありますから、あれも佐兵衛のところへ持って行ってみて下さい。あの色紙は、茶屋の枕屏風まくらびょうぶに張ってあったのですが、私はもてない腹いせに、ひっぱがして家へ持って帰ったのです。雪舟ゆうではないかと思つているのですが、或いは贋物ある にせものかも知れません。とにかく佐兵衛に見せて、そこはあなた様も抜け目なく、相応の値段で売りつけてやって下さい。贋物であっても、出来は

悪くない色紙のようですから、五十両と吹かけてみて下さい。売れましたら、観音像の代金と一緒に、お手数でも、こちらへすぐにお送り願います。このたびは、あなた様にもいろいろ御手数をかけるわけですが、御礼として縞しまの羽織を差上げたいと思います。それはいま九郎助が持っているのです。ちよつと粋いきな縞で、裏の絹もずいぶん上等のものです。九郎助は駕籠かきのくせに、おしやれな男で、あの羽織をむやみに着たがりますので、私は一時借してやってそのままになっているのです。決してくれてやったのではありませんから、どうか九郎助から取り上げてあなた様がお召しになって下さい。あんな恩知らずの九郎助には、もつともつとこらしめを見せてやりたいと思います。かまいませんから、あ

れを九郎助から取上げてやって下さい。あなた様は色が白いから、きつとあの羽織はお似合いの事と思います。私は色が黒いのであるの羽織は少しも似合いませんでした。墨染の衣だけでも似合うかと思いの他、私は肩幅が広いので弁慶のような荒法師の姿で、おおかみ狼に衣の例に漏れず、何もかも面白くなく、既に出家していながら、更にまた出家遁世したくなつて何が何やらわからず、ただもう死ぬるばかり退屈で、

なげ歎きわび世をそむくべき方知らず、吉野の奥も住み憂しと言へり

という歌の心、お察しねがいたく、実はこれとて私の作つた歌ではなく、人の物もわが物もこの頃は差別がつかず、出家遁世し

て以来、ひどく私はすれました。このたびのまことに無分別の遁世、何卒^{なにとぞ}あわれと思召し、富籤と観音像と、それから色紙の事お忘れなく、昔の遊び仲間の方々にもよろしくお伝え下され、陽春の頃には、いちど皆様そろって吉野へ御来駕^{ごらいが}のほど、ひたすら御待ち申し上げます。頓首^{とんしゅ}。

(万^{よろづ}の文反古^{ふみほんぐ}、卷五の四、桜の吉野山難儀の冬)

青空文庫情報

底本：「お伽草紙」新潮文庫、新潮社

1972（昭和47）年3月21日発行

1991（平成3）年2月20日40刷改版

1999（平成11）年3月10日56刷

入力：a k i

校正：久保あきら

2000年4月24日公開

2006年5月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

新釈諸国噺

太宰治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>